

一般国道57号中九州横断道路建設事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)

高 添 遺 跡
新 殿 岡 遺 跡
庵 の 平 遺 跡
下 ノ 原 遺 跡
古城・五郎丸遺跡

2 0 0 7

大分県教育庁埋蔵文化財センター



高添遺跡全景写真



中九州道予定地温泉（高添遺跡より西を望む）



高添遺跡出口地区3次調査区東側部分



高添遺跡出口地区3次調査区西側部分



高添遺跡石五道原地区2次調査区



高添遺跡石五道原地区5次調査区



高湊遺跡土木園地区1次調査区



高湊遺跡土木園地区1次調査区3号土坑



高湊遺跡土圍地区2次調査区



新殿岡遺跡



庵の平遺跡



庵の平遺跡石造物

序 文

本書は大分県教育委員会が一般国道57号中九州横断道路の建設工事に伴い、国土交通省九州地方整備局佐伯河川国道事務所の委託を受けて実施した高添遺跡、新殿岡遺跡、庵の平遺跡、下ノ原遺跡、古城・五郎丸遺跡の発掘調査報告書です。一般国道57号中九州横断道路は大分市から豊後大野市・竹田市を經由して熊本県に至るルートを結ぶ九州中央部における重要な幹線道路として計画されたものです。

今回、報告書に掲載しました5遺跡は豊後大野市の犬飼一千歳間の工事に伴う発掘調査の報告です。

この区間は、大野川流域の火山性台地上を走り、大野川流域では最大級の弥生～古墳時代の集落跡である高添遺跡をはじめとして重要な遺跡群が存在し、当初から注目されていました。この高添遺跡では、弥生～古墳時代の住居跡群をはじめ、中世の屋敷群が確認され、これまでの成果に加え、遺跡の全貌を解明する上で大きな成果があげられました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また、学術研究資料として広く御活用いただけましたら幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで多くの方々の御理解と御協力をいただきましたことに対し、心から感謝申し上げます。

平成19年3月30日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 小 玉 学 司

例 言

1. 本書は、豊後大野市に所在する高添遺跡、新殿岡遺跡、庵の平遺跡、下ノ原遺跡、古城・五郎丸遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は一般国道57号中九州横断道路建設事業の実施に伴い、国土交通省九州地方整備局佐伯河川国道事務所の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した。
3. 本書に掲載する主要発掘調査区は以下の通りである。

遺跡名	担当者	調査期間
高添遺跡（出口地区3次調査区）	原田昭一・山崎文子	平成15年7月～平成16年2月
高添遺跡（石五道原地区2次調査区）	栗田勝弘・関野泰一	平成13年12月～平成14年3月
高添遺跡（石五道原地区5次調査区）	原田昭一・山崎文子	平成15年6月～平成15年8月
高添遺跡（土木園地区1次調査区）	栗原 眞・山本哲也	平成14年5月～平成15年3月
高添遺跡（土木園地区2次調査区）	栗原 眞・原田昭一 山崎文子・井上崇裕	平成15年4月～平成15年8月
新殿岡遺跡	村上久和・衛藤啓治	平成12年11月～平成13年3月
新殿岡遺跡	栗田勝弘・松本康弘・関野泰一	平成13年4月～平成13年7月
庵の平遺跡	原田昭一・山崎文子	平成15年10月～平成15年11月
下ノ原遺跡	栗原 眞・原田昭一	平成14年9月、平成17年1月
古城・五郎丸遺跡	村上久和・衛藤啓治・坂本嘉弘	平成14年9月

4. 現地での写真撮影・遺構の実測は各調査員が担当した。
5. 遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う諸作業については、調査員が担当したほか、大分県教育庁埋蔵文化財センターの整理作業員の多大な協力を得た。
6. 出土遺物ならびに図面・写真などは、大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田ビワノ門1977）において保管している。
7. 本書で使用する方位は、いずれも座標北である。座標値については、世界測地系の数値を記している。
8. 高添遺跡土木園地区1次調査区出土獸形勾玉の石材同定について、比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）・大坪志子（熊本大学埋蔵文化財調査室）の両氏よりご教示いただいた。
9. 本書の執筆は、第1章を栗田勝弘・原田昭一、第2章を栗田勝弘・原田昭一・山本哲也・山崎文子、第3章を栗田勝弘、第4章を原田昭一、第5章を原田昭一、第6章を坂本嘉弘・原田昭一が担当した。
10. 本書の編集は、調査員で協議して行った。

目次

第1章 はじめに (栗田勝弘・原田昭一)

第1節 調査の経緯	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の経過	1
3. 調査の体制	2
第2節 遺跡の立地と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3

第2章 高湊遺跡の調査

第1節 出口地区3次調査区 (原田昭一・山崎文字)	9
第2節 石五道原地区2・5次調査区 (栗田勝弘)	42
第3節 土木園地区1次調査区 (原田昭一・山本哲也)	119
第4節 土木園地区2次調査区 (原田昭一)	185
第5節 まとめ (栗田勝弘・原田昭一・山本哲也)	242

第3章 新殿岡遺跡の調査 (栗田勝弘)

第1節 調査の概要	248
第2節 遺構と遺物	250
第3節 まとめ	273

第4章 庵の平遺跡の調査 (原田昭一)

第1節 調査の概要	274
第2節 遺構と遺物	274
第3節 まとめ	279

第5章 下ノ原遺跡の調査 (原田昭一)

第1節 調査の概要	280
-----------	-----

第6章 古城・五郎丸遺跡の調査 (坂本嘉弘・原田昭一)

第1節 調査の概要	281
-----------	-----

目 次

第1図	中九州横断道(大削一大野間)と 発掘調査対象遺跡(1/100,000)	1
第2図	遺跡分布図(1/25,000)	4
第3図	高添遺跡調査区位置図(1/2,000)	5~6
第4図	高添遺跡出口地区3次調査区 遺構配置図(1/200)	7~8
第5図	高添遺跡出口地区3次調査区 1号竪穴実測図(1/80)	9
第6図	高添遺跡出口地区3次調査区 1号竪穴出土遺物実測図(1/4・1/3)	11
第7図	高添遺跡出口地区3次調査区 2号竪穴実測図(1/80)	12
第8図	高添遺跡出口地区3次調査区 2号竪穴出土遺物実測図(1/4)	12
第9図	高添遺跡出口地区3次調査区 3号竪穴実測図(1/80)	13
第10図	高添遺跡出口地区3次調査区 3号竪穴出土遺物実測図(1/4)	13
第11図	高添遺跡出口地区3次調査区 4号竪穴実測図(1/80)	13
第12図	高添遺跡出口地区3次調査区 4号竪穴出土遺物実測図(1/4・1/3)	13
第13図	高添遺跡出口地区3次調査区 6号竪穴実測図(1/80)	14
第14図	高添遺跡出口地区3次調査区 6号竪穴出土遺物実測図(1/4)	14
第15図	高添遺跡出口地区3次調査区 7号竪穴実測図(1/80)	14
第16図	高添遺跡出口地区3次調査区7号 竪穴出土遺物実測図(1/4・1/2・1/3)	15
第17図	高添遺跡出口地区3次調査区 8号竪穴出土遺物実測図(1/4)	15
第18図	高添遺跡出口地区3次調査区 9号竪穴実測図(1/80)	15
第19図	高添遺跡出口地区3次調査区 9号竪穴出土遺物実測図(1/3)	16
第20図	高添遺跡出口地区3次調査区 10号竪穴実測図(1/80)	16
第21図	高添遺跡出口地区3次調査区 10号竪穴出土遺物実測図(1/4)	16
第22図	高添遺跡出口地区3次調査区 11号竪穴実測図(1/80)	17
第23図	高添遺跡出口地区3次調査区 11号竪穴出土遺物実測図(1/3)	17
第24図	高添遺跡出口地区3次調査区 1号掘立柱建物実測図(1/80)	17
第25図	高添遺跡出口地区3次調査区 2号掘立柱建物実測図(1/80)	18
第26図	高添遺跡出口地区3次調査区 3号掘立柱建物実測図(1/80)	19
第27図	高添遺跡出口地区3次調査区 4号掘立柱建物実測図(1/80)	20
第28図	高添遺跡出口地区3次調査区 5号掘立柱建物実測図(1/80)	21
第29図	高添遺跡出口地区3次調査区 6号掘立柱建物実測図(1/80)	22
第30図	高添遺跡出口地区3次調査区 6号掘立柱建物出土遺物実測図(1/3)	22
第31図	高添遺跡出口地区3次調査区 7号掘立柱建物実測図(1/80)	23
第32図	高添遺跡出口地区3次調査区 8号掘立柱建物実測図(1/80)	24
第33図	高添遺跡出口地区3次調査区 9号掘立柱建物実測図(1/80)	25
第34図	高添遺跡出口地区3次調査区 10号掘立柱建物実測図(1/80)	26
第35図	高添遺跡出口地区3次調査区 11号掘立柱建物実測図(1/80)	27
第36図	高添遺跡出口地区3次調査区 12号掘立柱建物実測図(1/80)	28
第37図	高添遺跡出口地区3次調査区 13号掘立柱建物実測図(1/80)	29
第38図	高添遺跡出口地区3次調査区 1号櫛列実測図(1/80)	30
第39図	高添遺跡出口地区3次調査区 2号櫛列実測図(1/80)	31
第40図	高添遺跡出口地区3次調査区 1号溝土層断面図(1/40)	30
第41図	高添遺跡出口地区3次調査区 2号溝土層断面図(1/40)	31
第42図	高添遺跡出口地区3次調査区 2号溝出土遺物実測図①(1/3)	31
第43図	高添遺跡出口地区3次調査区 2号溝出土遺物実測図②(1/3)	32
第44図	高添遺跡出口地区3次調査区 2号溝出土遺物実測図③(1/3)	33
第45図	高添遺跡出口地区3次調査区 2号溝出土遺物実測図④(1/2)	33
第46図	高添遺跡出口地区3次調査区 3号溝土層断面図(1/40)	32
第47図	高添遺跡出口地区3次調査区 3号溝出土遺物実測図①(1/3)	35
第48図	高添遺跡出口地区3次調査区 3号溝出土遺物実測図②(1/6)	36
第49図	高添遺跡出口地区3次調査区3号溝、 1・2号大型土坑土層断面図(1/40)	36
第50図	高添遺跡出口地区3次調査区 1号大型土坑出土遺物実測図(1/3)	37
第51図	高添遺跡出口地区3次調査区 2号大型土坑出土遺物実測図(1/3)	37
第52図	高添遺跡出口地区3次調査区 4号溝土層断面図(1/80)	37
第53図	高添遺跡出口地区3次調査区 4号溝出土遺物実測図(1/3)	38
第54図	高添遺跡出口地区3次調査区 1号道路土層断面図(1/40)	38
第55図	高添遺跡出口地区3次調査区 1号道路出土遺物実測図(1/6)	38
第56図	高添遺跡出口地区3次調査区 1号ピット出土遺物実測図(1/3)	39
第57図	高添遺跡出口地区3次調査区 2号ピット出土遺物実測図(1/3)	39
第58図	高添遺跡出口地区3次調査区 出土遺物実測図①(1/3)	39
第59図	高添遺跡出口地区3次調査区 出土遺物実測図②(1/3)	40

第60回	高添遺跡出口地区 3次調査区 出土遺物実測図③ (1/3)	40	第91回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 11号竪穴出土遺物実測図 (1/4-1/3)	73
第61回	高添遺跡出口地区 3次調査区 出土遺物実測図④ (1/1)	41	第92回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 12号竪穴実測図 (1/80)	74
第62回	高添遺跡出口地区 3次調査区 出土遺物実測図② (2/3)	41	第93回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 12号竪穴出土遺物実測図	75
第63回	高添遺跡出口地区 3次調査区 出土遺物実測図⑤ (1/6)	41	第94回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 13号竪穴実測図 (1/80)	76
第64回	高添遺跡石五道原地区 2・5次 調査区 炭屑標本圖 (1/200)	43~44	第95回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 13号竪穴出土遺物実測図	77
第65回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 1号竪穴実測図 (1/80)	45	第96回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 14号竪穴実測図 (1/80)	78
第66回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 1号竪穴出土遺物実測図 (1/4-1/3)	46	第97回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 14号竪穴出土遺物実測図 (1/4-1/3)	79
第67回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 2号竪穴実測図 (1/80)	47	第98回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 15号竪穴実測図 (1/80)	80
第68回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 2号竪穴出土遺物実測図① (1/4)	48	第99回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 15号竪穴出土遺物実測図① (1/4-1/3)	81
第69回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 2号竪穴出土遺物実測図② (1/4-1/2)	49	第100回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 15号竪穴出土遺物実測図② (1/3)	82
第70回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 2号竪穴出土遺物実測図③ (1/3)	50	第101回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 16号竪穴実測図 (1/80)	82
第71回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 3号竪穴実測図 (1/80)	52	第102回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 16号竪穴出土遺物実測図 (1/4-1/3)	83
第72回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 3号竪穴出土遺物実測図① (1/4)	53	第103回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 17号竪穴実測図 (1/80)	84
第73回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 3号竪穴出土遺物実測図② (1/4)	54	第104回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 17号竪穴出土遺物実測図 (1/4-1/3)	85
第74回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 3号竪穴出土遺物実測図③	56	第105回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 18号竪穴実測図 (1/80)	86
第75回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 3号竪穴出土遺物実測図④ (1/3)	57	第106回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 18号竪穴出土遺物実測図① (1/4-1/3)	87
第76回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 4号竪穴実測図 (1/80)	58	第107回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 18号竪穴出土遺物実測図② (1/1-1/3)	88
第77回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 4号竪穴出土遺物実測図① (1/4)	59	第108回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 19号竪穴実測図 (1/80)	89
第78回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 4号竪穴出土遺物実測図②	60	第109回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 20号竪穴実測図 (1/80)	90
第79回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 6号竪穴実測図 (1/80)	61	第110回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 19・20号竪穴出土遺物実測図	91
第80回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 6号竪穴出土遺物実測図①	62	第111回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 21号竪穴実測図 (1/80)	92
第81回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 6号竪穴出土遺物実測図② (1/3)	63	第112回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 21号竪穴出土遺物実測図 (1/4-1/3)	93
第82回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 7号竪穴出土遺物実測図① (1/4)	65	第113回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 22号竪穴出土遺物実測図	94
第83回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 7号竪穴出土遺物実測図②	66	第114回	高添遺跡石五道原地区 5次調査区 23号竪穴実測図 (1/80)	95
第84回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 8号竪穴実測図 (1/80)	67	第115回	高添遺跡石五道原地区 5次調査区 23号竪穴出土遺物実測図	96
第85回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 8号竪穴出土遺物実測図 (1/4-1/3)	68	第116回	高添遺跡石五道原地区 5次調査区 24号竪穴実測図 (1/80)	97
第86回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 9号竪穴実測図 (1/80)	69	第117回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 1・2号掘立柱建物実測図 (1/80)	98
第87回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 9号竪穴出土遺物実測図 (1/4-1/3)	70	第118回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 3・4・5号掘立柱建物実測図 (1/80)	99
第88回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 10号竪穴実測図 (1/80)	71	第119回	高添遺跡石五道原地区 5次調査区 6号掘立柱建物実測図 (1/80)	101
第89回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 10号竪穴出土遺物実測図 (1/4-1/3)	71	第120回	高添遺跡石五道原地区 5次調査区 7号掘立柱建物実測図 (1/80)	101
第90回	高添遺跡石五道原地区 2次調査区 11号竪穴実測図 (1/80)	72	第121回	高添遺跡石五道原地区 5次調査区 8・9号掘立柱建物実測図 (1/80)	102

第122回	高添道跡石五道原地区2次調査区 1号溝(道跡伏遺構)実測区	103	第153回	高添道跡土木園地区1次調査区 9号竪穴出土遺物実測区④(1/1)	130
第123回	高添道跡石五道原地区2次調査区 1号溝(道跡伏遺構)出土遺物実測区	104	第154回	高添道跡土木園地区1次調査区 10号竪穴実測区(1/80)	130
第124回	高添道跡石五道原地区2・5次調査区 柱穴(ピット)内出土遺物実測区①(1/3)	105	第155回	高添道跡土木園地区1次調査区 10号竪穴出土遺物実測区①(1/4)	131
第125回	高添道跡石五道原地区2・5次調査区 柱穴(ピット)内出土遺物実測区②(1/4)	106	第156回	高添道跡土木園地区1次調査区 10号竪穴出土遺物実測区②(1/3)	131
第126回	高添道跡石五道原地区2・5次調査区 出土遺物実測区①(1/3)	108	第157回	高添道跡土木園地区1次調査区 10号竪穴出土遺物実測区③(2/3)	131
第127回	高添道跡石五道原地区2・5次調査区 出土遺物実測区②(1/3)	109	第158回	高添道跡土木園地区1次調査区 11号竪穴実測区(1/80)	132
第128回	高添道跡石五道原地区2・5次調査区 出土遺物実測区③(1/3)	110	第159回	高添道跡土木園地区1次調査区 11号竪穴出土遺物実測区①(1/4)	132
第129回	高添道跡石五道原地区2・5次調査区 出土遺物実測区④(1/3)	111	第160回	高添道跡土木園地区1次調査区 11号竪穴出土遺物実測区②(1/3)	133
第130回	高添道跡石五道原地区2・5次調査区 出土遺物実測区⑤(1/3)	112	第161回	高添道跡土木園地区1次調査区 12号竪穴実測区(1/80)	133
第131回	高添道跡石五道原地区2・5次調査区 出土遺物実測区⑥(1/4)	113	第162回	高添道跡土木園地区1次調査区12号 竪穴出土遺物実測区(1/4・1/1・1/3)	134
第132回	高添道跡石五道原地区2・5次調査区 出土遺物実測区⑦	114	第163回	高添道跡土木園地区1次調査区 13号竪穴実測区(1/80)	135
第133回	高添道跡石五道原地区2・5次調査区 出土遺物実測区⑧	115	第164回	高添道跡土木園地区1次調査区 13号竪穴出土遺物実測区(1/3)	135
第134回	高添道跡土木園地区1次調査区 遺構位置図(1/200)	117~118	第165回	高添道跡土木園地区1次調査区 14号竪穴実測区(1/80)	136
第135回	高添道跡土木園地区1次調査区 1号竪穴実測区(1/80)	120	第166回	高添道跡土木園地区1次調査区 14号竪穴出土遺物実測区①(1/4)	136
第136回	高添道跡土木園地区1次調査区 1号竪穴出土遺物実測区(1/4・1/3)	120	第167回	高添道跡土木園地区1次調査区 14号竪穴出土遺物実測区②(1/3)	137
第137回	高添道跡土木園地区1次調査区 2号竪穴実測区(1/80)	121	第168回	高添道跡土木園地区1次調査区 14号竪穴出土遺物実測区③(2/3)	137
第138回	高添道跡土木園地区1次調査区2号 竪穴出土遺物実測区(1/4・1/3・1/2)	122	第169回	高添道跡土木園地区1次調査区 15号竪穴実測区(1/80)	137
第139回	高添道跡土木園地区1次調査区 3号竪穴実測区(1/80)	122	第170回	高添道跡土木園地区1次調査区 15号竪穴出土遺物実測区①(1/4)	138
第140回	高添道跡土木園地区1次調査区 4号竪穴実測区(1/80)	123	第171回	高添道跡土木園地区1次調査区 15号竪穴出土遺物実測区②(1/2)	138
第141回	高添道跡土木園地区1次調査区 4号竪穴出土遺物実測区(1/4・1/3)	123	第172回	高添道跡土木園地区1次調査区 16号竪穴実測区(1/80)	138
第142回	高添道跡土木園地区1次調査区 5号竪穴実測区(1/80)	124	第173回	高添道跡土木園地区1次調査区 16号竪穴出土遺物実測区(1/4)	139
第143回	高添道跡土木園地区1次調査区 5号竪穴出土遺物実測区(1/4・1/3)	124	第174回	高添道跡土木園地区1次調査区 17号竪穴実測区(1/80)	139
第144回	高添道跡土木園地区1次調査区 6号竪穴実測区(1/80)	125	第175回	高添道跡土木園地区1次調査区 17号竪穴出土遺物実測区①(1/4・1/3)	140
第145回	高添道跡土木園地区1次調査区 7号竪穴実測区(1/80)	125	第176回	高添道跡土木園地区1次調査区 17号竪穴出土遺物実測区②(1/6)	140
第146回	高添道跡土木園地区1次調査区 7号竪穴出土遺物実測区(1/4)	125	第177回	高添道跡土木園地区1次調査区 18号竪穴実測区(1/80)	140
第147回	高添道跡土木園地区1次調査区 8号竪穴実測区(1/80)	126	第178回	高添道跡土木園地区1次調査区 18号竪穴出土遺物実測区①(1/4・1/3)	141
第148回	高添道跡土木園地区1次調査区 8号竪穴出土遺物実測区(1/4・1/3)	126	第179回	高添道跡土木園地区1次調査区 18号竪穴出土遺物実測区②(1/2)	141
第149回	高添道跡土木園地区1次調査区 9号竪穴実測区(1/80)	127	第180回	高添道跡土木園地区1次調査区 19号竪穴実測区(1/80)	142
第150回	高添道跡土木園地区1次調査区 9号竪穴出土遺物実測区①(1/4)	128	第181回	高添道跡土木園地区1次調査区 19号竪穴出土遺物実測区②(1/4)	143
第151回	高添道跡土木園地区1次調査区 9号竪穴出土遺物実測区③(1/4)	129	第182回	高添道跡土木園地区1次調査区 19号竪穴出土遺物実測区②(1/4)	144
第152回	高添道跡土木園地区1次調査区 9号竪穴出土遺物実測区④(1/3)	129	第183回	高添道跡土木園地区1次調査区19号 竪穴出土遺物実測区③(1/3・1/1・1/2)	144

第184回	高添遺跡土木園地区1次調査区 20号竪穴実測図(1/80)	145	第215回	高添遺跡土木園地区1次調査区 32号竪穴実測図(1/80)	164
第185回	高添遺跡土木園地区1次調査区20号 竪穴出土遺物実測図(1/4・1/3・1/1)	145	第216回	高添遺跡土木園地区1次調査区 33号竪穴実測図(1/80)	165
第186回	高添遺跡土木園地区1次調査区 21号竪穴実測図(1/80)	146	第217回	高添遺跡土木園地区1次調査区 35号竪穴実測図(1/80)	165
第187回	高添遺跡土木園地区1次調査区 21号竪穴出土遺物実測図(1/4・1/3)	147	第218回	高添遺跡土木園地区1次調査区 1号土坑実測図(1/80)	166
第188回	高添遺跡土木園地区1次調査区 22号竪穴実測図(1/80)	148	第219回	高添遺跡土木園地区1次調査区 1号土坑出土遺物実測図(1/4・1/1)	167
第189回	高添遺跡土木園地区1次調査区22号竪穴 出土遺物実測図(1/4・1/3・1/1・1/2)	149	第220回	高添遺跡土木園地区1次調査区 2号土坑実測図(1/80)	167
第190回	高添遺跡土木園地区1次調査区 23号竪穴実測図(1/80)	150	第221回	高添遺跡土木園地区1次調査区 2号土坑出土遺物実測図(1/4)	168
第191回	高添遺跡土木園地区1次調査区 23号竪穴出土遺物実測図(1/4・1/3)	151	第222回	高添遺跡土木園地区1次調査区 3号土坑実測図(1/10)	169
第192回	高添遺跡土木園地区1次調査区 24号竪穴実測図(1/80)	152	第223回	高添遺跡土木園地区1次調査区 3号土坑出土遺物実測図①(1/3)	172
第193回	高添遺跡土木園地区1次調査区 24号竪穴出土遺物実測図(1/4・1/3)	153	第224回	高添遺跡土木園地区1次調査区 3号土坑出土遺物実測図②(1/3)	173
第194回	高添遺跡土木園地区1次調査区 25号竪穴実測図(1/80)	154	第225回	高添遺跡土木園地区1次調査区 3号土坑出土遺物実測図③(1/3)	174
第195回	高添遺跡土木園地区1次調査区 25号竪穴出土遺物実測図(1/3)	154	第226回	高添遺跡土木園地区1次調査区 3号土坑出土遺物実測図④(1/2)	175
第196回	高添遺跡土木園地区1次調査区 26号竪穴実測図(1/80)	154	第227回	高添遺跡土木園地区1次調査区 出土遺物実測図①(1/3)	175
第197回	高添遺跡土木園地区1次調査区 27号竪穴実測図(1/80)	155	第228回	高添遺跡土木園地区1次調査区 出土遺物実測図②(1/4)	176
第198回	高添遺跡土木園地区1次調査区 27号竪穴出土遺物実測図①(1/4)	156	第229回	高添遺跡土木園地区1次調査区 出土遺物実測図③(1/4)	177
第199回	高添遺跡土木園地区1次調査区 27号竪穴出土遺物実測図②(1/4)	157	第230回	高添遺跡土木園地区1次調査区 出土遺物実測図④(2/3)	178
第200回	高添遺跡土木園地区1次調査区 27号竪穴出土遺物実測図③(1/3)	157	第231回	高添遺跡土木園地区1次調査区 出土遺物実測図⑤(2/3)	179
第201回	高添遺跡土木園地区1次調査区 27号竪穴出土遺物実測図④(1/6)	157	第232回	高添遺跡土木園地区1次調査区 出土遺物実測図⑥(2/3)	179
第202回	高添遺跡土木園地区1次調査区 28号竪穴実測図(1/80)	158	第233回	高添遺跡土木園地区1次調査区 出土遺物実測図⑦(2/3)	180
第203回	高添遺跡土木園地区1次調査区 28号竪穴出土遺物実測図①(1/4)	159	第234回	高添遺跡土木園地区1次調査区 出土遺物実測図⑧(1/3)	181
第204回	高添遺跡土木園地区1次調査区 28号竪穴出土遺物実測図②(1/4)	160	第235回	高添遺跡土木園地区1次調査区 出土遺物実測図⑨(1/6)	182
第205回	高添遺跡土木園地区1次調査区 28号竪穴出土遺物実測図③(1/6)	161	第236回	高添遺跡土木園地区1次調査区 出土遺物実測図⑩(2/3)	182
第206回	高添遺跡土木園地区1次調査区 28号竪穴出土遺物実測図④(2/3)	161	第237回	高添遺跡土木園地区1次調査区 出土遺物実測図⑪(2/3)	182
第207回	高添遺跡土木園地区1次調査区 29号竪穴実測図(1/80)	161	第238回	高添遺跡土木園地区1次調査区 出土遺物実測図⑫(1/2)	182
第208回	高添遺跡土木園地区1次調査区 29号竪穴出土遺物実測図(1/4・1/3)	162	第239回	高添遺跡土木園地区2次調査区 遺構配置図(1/200)	183~184
第209回	高添遺跡土木園地区1次調査区 30号竪穴実測図(1/80)	162	第240回	高添遺跡土木園地区2次調査区 1号竪穴実測図(1/80)	185
第210回	高添遺跡土木園地区1次調査区30号 竪穴出土遺物実測図①(1/4・1/3)	163	第241回	高添遺跡土木園地区2次調査区1号 竪穴出土遺物実測図(1/4・1/2・1/3)	187
第211回	高添遺跡土木園地区1次調査区 30号竪穴出土遺物実測図②(1/3)	163	第242回	高添遺跡土木園地区2次調査区 2号竪穴実測図(1/80)	188
第212回	高添遺跡土木園地区1次調査区 30号竪穴出土遺物実測図③(1/6)	163	第243回	高添遺跡土木園地区2次調査区2号 竪穴出土遺物実測図(1/4・1/3)	188
第213回	高添遺跡土木園地区1次調査区 31号竪穴実測図(1/80)	164	第244回	高添遺跡土木園地区2次調査区 3号竪穴実測図(1/80)	189
第214回	高添遺跡土木園地区1次調査区 31号竪穴出土遺物実測図(1/4)	164	第245回	高添遺跡土木園地区2次調査区 3号竪穴出土遺物実測図①(1/4)	190

第308図	高浜遺跡土木地区2次調査区 6号地下式横出土遺物実測図② (1/3) ……	232	第335図	弧状遺構出土遺物実測図② (1/4) ……	255
第309図	高浜遺跡土木地区2次調査区 6号地下式横出土遺物実測図③ (1/3) ……	233	第336図	新殿岡遺跡1区2・3号 弧状遺構出土遺物実測図③ (1/3・1/4) ……	256
第310図	高浜遺跡土木地区2次調査区 6号地下式横出土遺物実測図④ (1/6) ……	233	第337図	新殿岡遺跡1区3号 弧状遺構実測図 (1/80) ……	257
第311図	高浜遺跡土木地区2次調査区 6号地下式横出土遺物実測図⑤ (1/1) ……	234	第338図	新殿岡遺跡1区 櫛円形土坑実測図 (1/80) ……	258
第312図	高浜遺跡土木地区2次調査区 6号地下式横出土遺物実測図⑥ (1/1) ……	235	第339図	新殿岡遺跡1区 出土遺物実測図① (1/4) ……	259
第313図	高浜遺跡土木地区2次調査区 1号溝断面図 (1/25) ……	236	第340図	新殿岡遺跡2区 出土遺物実測図② (1/3) ……	260
第314図	高浜遺跡土木地区2次調査区 1号溝出土遺物実測図 (1/3) ……	236	第341図	新殿岡遺跡2区 2号掘立柱建物実測図 (1/80) ……	261
第315図	高浜遺跡土木地区2次調査区 2号溝断面図 (1/25) ……	236	第342図	新殿岡遺跡2区 2号掘立柱建物実測図 (1/80) ……	262
第316図	高浜遺跡土木地区2次調査区 2号溝出土遺物実測図 (1/3) ……	237	第343図	新殿岡遺跡2区 3号掘立柱建物実測図 (1/80) ……	262
第317図	高浜遺跡土木地区2次調査区 3号溝断面図 (1/25) ……	237	第344図	新殿岡遺跡2区 4号掘立柱建物実測図 (1/80) ……	262
第318図	高浜遺跡土木地区2次調査区 3号溝出土遺物実測図 (1/3) ……	238	第345図	新殿岡遺跡2区 5号掘立柱建物実測図 (1/80) ……	262
第319図	高浜遺跡土木地区2次調査区 1～3号ピット出土遺物実測図 (1/4) ……	238	第346図	新殿岡遺跡3区1号土坑略測図 (1/60) ……	263
第320図	高浜遺跡土木地区2次調査区 4号ピット出土遺物実測図 (1/3) ……	238	第347図	新殿岡遺跡3区2号土坑実測図 (1/60) ……	263
第321図	高浜遺跡土木地区2次調査区 5号ピット出土銭貨 (1/1) ……	238	第348図	新殿岡遺跡3区3号土坑実測図 (1/60) ……	264
第322図	高浜遺跡土木地区2次調査区 出土遺物実測図① (1/3・1/4) ……	239	第349図	新殿岡遺跡3区4号土坑実測図 (1/20) ……	265
第323図	高浜遺跡土木地区2次調査区 出土遺物実測図② (2/3) ……	240	第350図	新殿岡遺跡3区 2～5号土坑出土遺物実測図 (1/3・1/4) ……	266
第324図	高浜遺跡土木地区2次調査区 出土遺物実測図③ (1/3) ……	240	第351図	新殿岡遺跡3区 1号掘立柱建物実測図 (1/80) ……	267
第325図	高浜遺跡土木地区2次調査区 出土遺物実測図④ (1/2) ……	240	第352図	新殿岡遺跡3区 2号掘立柱建物実測図 (1/80) ……	267
第326図	高浜遺跡土木地区2次調査区 出土遺物実測図⑤ (1/3) ……	241	第353図	新殿岡遺跡3区 3号掘立柱建物実測図 (1/80) ……	268
第327図	高浜遺跡における中世の屋敷地 ……	243	第354図	新殿岡遺跡3区 1号伊勢山出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/6) ……	269
第328図	高浜遺跡土木地区1次調査区 3号土坑出土遺物分類図 (1/3) ……	246	第355図	新殿岡遺跡3区 出土遺物実測図① (1/3) ……	271
第329図	新殿岡遺跡1・2・3区位置図 (1/1000) ……	248	第356図	新殿岡遺跡3区出土遺物実測図② (1/4) ……	272
第330図	新殿岡遺跡1・2・3区遺構配置図 (1/480) ……	249	第357図	庵の平遺跡周辺地形図 (1/2,000) ……	274
第331図	新殿岡遺跡1区1号 弧状遺構実測図 (1/80) ……	251	第358図	庵の平遺跡遺構平面図 (1/80) ……	275
第332図	新殿岡遺跡1区2号 弧状遺構実測図 (1/80) ……	252	第359図	庵の平遺跡原位置残存石塔実測図 (1/10) ……	275
第333図	新殿岡遺跡1区2号 弧状遺構出土遺物実測図① (1/3・1/4) ……	253	第360図	庵の平遺跡石塔実測図① (1/10) ……	276
第334図	新殿岡遺跡1区2号		第361図	庵の平遺跡出土遺物実測図 (1/3) ……	276
			第362図	庵の平遺跡石塔実測図② (1/10) ……	277
			第363図	庵の平遺跡石塔実測図③ (1/10) ……	278
			第364図	下ノ原遺跡調査区位置図 (1/2,500) ……	280
			第365図	古城・五郎九遺跡調査区位置図 (1/2,500) ……	281

表 目 次

第1表	高浜遺跡出口地区3次調査区 遺構一覧表 ……	10	第4表	高浜遺跡土木地区1次調査区 3号土坑出土土器観察表 ……	170・171
第2表	高浜遺跡出口地区3次調査区 掘立柱建物一覧表 ……	29	第5表	高浜遺跡土木地区2次調査区 遺構一覧表 ……	186
第3表	高浜遺跡土木地区1次調査区 遺構一覧表 ……	119	第6表	高浜遺跡土木地区2次調査区 掘立柱建物一覧表 ……	219

写真図版目次

巻頭写真

高添遺跡全景写真	
中九州道予定地遺景 (高添遺跡より西を望む)	
高添遺跡出口地区3次調査区東側部分	
高添遺跡出口地区3次調査区西側部分	
高添遺跡石五道原地区2次調査区	
高添遺跡石五道原地区5次調査区	
高添遺跡土木園地区1次調査区	
高添遺跡土木園地区1次調査区3号土坑	
高添遺跡土木園地区2次調査区	
新飯阿遺跡、鹿の平遺跡、嵐の平遺跡石遺物	
写真図版1 (高添遺跡出口地区3次調査区)	
1号壑穴(南から)、2号壑穴(西から)	
3号壑穴(北西から)、4号壑穴(北東から)	
5号壑穴(北から)、6号壑穴(北から)	
7号壑穴(南から)、1・2号溝(北から) ……………	285
写真図版2 (高添遺跡出口地区3次調査区)	
2号溝瓦葺様出土状態	
1・2号大型土坑(北東から)	
2号大型土坑、3号溝・1号道路(北から)	
4号溝(東から)、4号溝埋積状態(東から)	
1号壑穴出土遺物(第6図参照)	
2号壑穴出土遺物(第8図参照) ……………	286
写真図版3 (高添遺跡出口地区3次調査区)	
4号壑穴出土遺物(第12図参照)	
6号壑穴出土遺物(第14図参照)	
2号溝出土遺物(第42~43図参照) ……………	287
写真図版4 (高添遺跡石五道原地区)	
1号壑穴(東から)、2号壑穴(東から)	
3号壑穴(東から)、4号壑穴(東から)	
6号壑穴(東から)、7号・18号壑穴(東から)	
8号壑穴(東から)、9号壑穴(東から) ……………	288
写真図版5 (高添遺跡石五道原地区)	
9号壑穴遺物出土状態(東から)、10号壑穴(東から)	
11号壑穴(東から)、12号壑穴(東から)	
13号壑穴(東から)、14号壑穴(東から)	
15号壑穴(東から)、16号壑穴(東から) ……………	289
写真図版6 (高添遺跡石五道原地区)	
17号壑穴(東から)、18号壑穴(東から)	
18号壑穴遺物出土状態(西から)	
19号壑穴(東から)、20号壑穴(東から)	
23号壑穴(東から)	
1号圓柱建物・2号圓柱建物 ……………	290
写真図版7 (高添遺跡石五道原地区)	
1・2号掘立柱建物(東から)	
3・4・5号掘立柱建物	
1号溝(道路状遺構) 検出状態	
1号壑穴出土遺物(第66図参照)	
2号壑穴出土遺物(第68・69図参照) ……………	291
写真図版8 (高添遺跡石五道原地区)	
3号壑穴出土遺物(第72・73図参照)	
3・4号壑穴出土遺物(第73~75・77図参照) ……………	292
写真図版9 (高添遺跡石五道原地区)	
4・6号壑穴出土遺物(第77・78・80~82図参照) ……	293
写真図版10 (高添遺跡石五道原地区)	
7号壑穴出土遺物(第82・83図参照) ……………	294
写真図版11 (高添遺跡石五道原地区)	
7・9号壑穴出土遺物(第83・85・87図参照) ……………	295

写真図版12 (高添遺跡石五道原地区)	
9~12号壑穴出土遺物(第87・89・91・93図参照) ……	296
写真図版13 (高添遺跡石五道原地区)	
12~14号壑穴出土遺物(第93・95・97図参照) ……………	297
写真図版14 (高添遺跡石五道原地区)	
14~16号壑穴出土遺物	
(第97・99・100・102図参照) ……………	298
写真図版15 (高添遺跡石五道原地区)	
16~18号壑穴出土遺物	
(第102・104・106・107図参照) ……………	299
写真図版16 (高添遺跡石五道原地区)	
18~21号壑穴出土遺物(第107・110・112図参照) ……	300
写真図版17 (高添遺跡石五道原地区)	
21・22号壑穴・1号溝・柱穴(ピット) 出土遺物	
(第112・113・123・124図参照) ……………	301
写真図版18 (高添遺跡石五道原地区)	
柱穴(ピット) 出土遺物	
(第124・126・127図参照) ……………	302
写真図版19 (高添遺跡石五道原地区)	
石五道原地区出土遺物(第127~131図参照) ……………	303
写真図版20 (高添遺跡石五道原地区)	
石五道原地区出土遺物(第131~133図参照) ……………	304
写真図版21 (高添遺跡土木園地区1次調査区)	
1号壑穴(南西から)、2号壑穴(南西から)	
4号壑穴(南西から)、6・16・33号壑穴(南西から)	
7号壑穴(南東から)、8号壑穴(北西から)	
9号壑穴(南西から)、9号壑穴出土遺物 ……………	305
写真図版22 (高添遺跡土木園地区1次調査区)	
10号壑穴(南西から)、13号壑穴(南西から)	
10・14号壑穴(南東から)、17号壑穴(南東から)	
17・18号壑穴(北西から)、18号壑穴(北東から)	
19・28号壑穴(北東から)	
19・28号壑穴(南西から) ……………	306
写真図版23 (高添遺跡土木園地区1次調査区)	
20・21号壑穴(北東から)、22号壑穴(北西から)	
23号壑穴(北東から)、24号壑穴(北西から)	
27号壑穴(北西から)、1号土坑	
2号土坑、3号土坑 ……………	307
写真図版24 (高添遺跡土木園地区1次調査区)	
1号壑穴出土遺物(第136図参照)	
2号壑穴出土遺物(第138図参照)	
9号壑穴出土遺物(第150~151図参照) ……………	308
写真図版25 (高添遺跡土木園地区1次調査区)	
10号壑穴出土遺物(第155図参照)	
12号壑穴出土遺物(第162図参照)	
14号壑穴出土遺物(第166図参照)	
19号壑穴出土遺物(第181図参照) ……………	309
19号壑穴出土遺物(第182図参照)	
写真図版26 (高添遺跡土木園地区1次調査区)	
22号壑穴出土遺物(第189図参照)	
23号壑穴出土遺物(第191図参照)	
24号壑穴出土遺物(第193図参照) ……………	310
写真図版27 (高添遺跡土木園地区1次調査区)	
27号壑穴出土遺物(第198~200図参照)	
28号壑穴出土遺物(第203~206図参照) ……………	311

写真図版28 (高添遺跡土木園地区1次調査区)	
30号堅穴出土遺物 (第210図参照)	
1号土坑出土遺物 (第219図参照)	
2号土坑出土遺物 (第221図参照)	
3号土坑出土遺物 (第223~226図参照)	312
写真図版29 (高添遺跡土木園地区1次調査区)	
土木園地区1次調査区出土遺物	
(第227~232図参照)	313
写真図版30 (高添遺跡土木園地区1次調査区)	
土木園地区1次調査区出土遺物	
(第233~238図参照)	314
写真図版31 (高添遺跡土木園地区2次調査区)	
1号堅穴 (北西から)、2号堅穴 (南東から)	
3号堅穴 (北東から)、4号堅穴 (北西から)	
1号土坑 (北から)、2号土坑 (北から)	
3号溝 (西から)、3号溝 (東から)	315
写真図版32 (高添遺跡土木園地区2次調査区)	
2号地下式竈 (西から)、3号地下式竈 (北から)	
4号地下式竈 (南から)	
4号地下式竈附蓋石出土状態 (南から)	
5号地下式竈 (東から)	
5号地下式竈附蓋石出土状態 (東から)	
6号地下式竈 (西から)	
6号地下式竈残貨出土状態	316
写真図版33 (高添遺跡土木園地区2次調査区)	
1号堅穴出土遺物 (第241図参照)	
2号堅穴出土遺物 (第243図参照)	
3号堅穴出土遺物 (第245~246図参照)	
4号堅穴出土遺物 (第248図参照)	
1号土坑出土遺物 (第250図参照)	
2号土坑出土遺物 (第252~253図参照)	317
写真図版34 (高添遺跡土木園地区2次調査区)	
5号地下式竈出土遺物 (第302~305図参照)	
6号地下式竈出土遺物 (第307~311図参照)	318
写真図版35 (高添遺跡土木園地区2次調査区)	
土木園地区2次調査区出土遺物 (第322~326図参照)	
高添地区個人宅石造物	
高添地区石五道地区石造物	
高添地区堀・土塁①、高添地区堀・土塁②	319
写真図版36 (新殿岡遺跡)	
1区 (南から)、1区2号弧状道構 (南から)	
1区 (東から)	
1区2号弧状道構内上段埋出土状態 (右から)	
3区 (東から)、3区1号土坑 (東から)	
3区2号土坑 (東から)、3区3号土坑 (東から) ...	320
写真図版37 (新殿岡遺跡)	
3区5号土坑 (東から)、3区1号加跡 (南から)	
1区2号弧状道構出土遺物 (第333・334図参照)	321
写真図版38 (新殿岡遺跡)	
1区2号・3号弧状道構出土遺物 (第334・335図参照)	
3区2~5号土坑出土遺物、3区1号加跡	
出土遺物 (第350・354図参照)	322
写真図版39 (岡の平遺跡)	
完掘状態 (南から)・完掘状態 (上方から)	
豊後大野市指定有形文化財並塔婆①	
豊後大野市指定有形文化財並塔婆②	
石塔移転後①・石塔移転後②	323

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

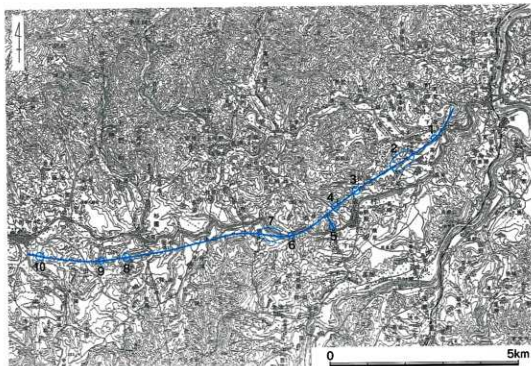
1 調査に至る経過

一般国道57号中九州横断道路は、大分市と熊本市を結ぶ延長120kmの地域高規格道路であり、このうち豊後大野市大野町から千歳町の「大野千歳道路（4.3km）」が平成7年度に、豊後大野市千歳町から大野町の「千歳大野道路（8.7km）」が平成8年度に事業化されている。中九州横断道路は豊後大野市の大野町～大野町までの供用が平成20年度までに計画されている。

豊後大野市千歳町に所在する高添遺跡群、新殿岡遺跡、庵の平遺跡、下ノ原遺跡、古城・五郎丸遺跡の発掘調査は、中九州横断道路建設工事に伴う試掘調査によって発見、あるいは遺跡の分布範囲を再確認したものである。この区間の遺跡の発掘調査は、土地買収の終了した地点を中心に、平成12～16年度にかけて順次実施された。

2 調査の経過

発掘調査は「大野千歳道路」と「千歳大野道路」とを並行して、事業対象地域の買収が行われた遺跡から取りかかった。「大野千歳道路」に関しては、平成12～13年度にまず、新殿岡遺跡の本調査を行った。これに続き、平成13年度に高添遺跡石五道原地区2次調査区、平成14年度に高添遺跡土木園地区1次調査区、平成15年度に高添遺跡土木園地区2次調査区、高添遺跡石五道原地区5次調査区および高添遺跡出口地区3次調査区の調査を行った。今回の中九州横断道路建設工事予定地において最大の遺跡である高添遺跡に対して、平成12年から15年にわたり、5ヶ所の調査区に分けて発掘調査を行ってきたが、このほかにも旧千歳村教育委員会に平成14年に高添遺跡石五道原地区3次調査区、高添遺跡出口地区2次調査区、平成15年に高添遺跡石五道原地区4次調査区の



【大野千歳道路】

- 1 下ノ原遺跡 2 高添遺跡 3 新殿岡遺跡 4 古城・五郎丸遺跡 5 庵の平遺跡

【千歳大野道路】

- 6 田原園遺跡 7 岡遺跡 8 穴井遺跡 9 穴井南遺跡 10 千仏南遺跡

第1図 中九州横断道（大野～大野間）と発掘調査対象遺跡（1/100,000）

発掘調査を再委託し、両方合わせると都合8次にも及ぶ大規模な発掘調査を実施した。

このほかにも、確認調査を行ったうえ、発掘調査に至った遺跡が多いが、平成14年に行った古城・五郎丸遺跡や、平成14・17年に行ったは下ノ原遺跡に関しては、工事予定地内において本調査に至るだけの成果が得られなかったが、重要遺跡であることは違いない。

また、本線部分ではないがインター進入路にあたる庵の平遺跡の調査を平成15年度に行い、調査地内に所在した豊後大野市指定有形文化財の笠塔婆をはじめとした石造物は工事予定地外の隣接地に移転した。

3 調査の体制

【平成12年度】

調査主体 大分県教育委員会

田中恒治（大分県教育委員会教育長）

山本芳直（大分県教育庁文化課課長）

伊藤正行（大分県教育庁文化課参事兼課長補佐）

清水宗昭（大分県教育庁文化課参事兼課長補佐）

調査員 栗田勝弘（大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第二係長）

村上久和（大分県教育庁文化課埋蔵文化財第二係副主幹）

新殿岡遺跡調査担当

衛藤啓治（大分県教育庁文化課埋蔵文化財第二係主査）

新殿岡遺跡調査担当

【平成13年度】

調査主体 大分県教育委員会

石川公一（大分県教育委員会教育長）

工藤正徳（大分県教育庁文化課課長）

麻生祐二（大分県教育庁文化課参事兼課長補佐）

清水宗昭（大分県教育庁文化課参事兼課長補佐）

調査員 栗田勝弘（文化課発掘調査受託事業担当主幹）

新殿岡遺跡・高添遺跡石五道原地区2次調査担当

松本康弘（文化課発掘調査受託事業担当主査）

新殿岡遺跡調査担当

岡野泰一（文化課発掘調査受託事業担当嘱託）

新殿岡遺跡・高添遺跡石五道原地区2次調査担当

【平成14年度】

調査主体 大分県教育委員会

石川公一（大分県教育委員会教育長）

岩尾康晴（大分県教育庁文化課課長）

麻生祐二（大分県教育庁文化課参事兼課長補佐）

清水宗昭（大分県教育庁文化課参事兼課長補佐）

調査員 坂本嘉弘（文化課発掘調査受託事業担当主幹）

古城・五郎丸遺跡調査担当

栗原 真（文化課発掘調査受託事業担当副主幹）

高添遺跡土木園地区1次調査担当

山本哲也（文化課発掘調査受託事業担当嘱託）

高添遺跡土木園地区1次調査担当

【平成15年度】

調査主体 大分県教育委員会

深田秀生（大分県教育委員会教育長）

今永一成（大分県教育庁文化課課長）

麻生祐二（大分県教育庁文化課参事兼課長補佐）

清水宗昭（大分県教育庁文化課参事兼課長補佐）

調査員 坂本嘉弘（文化課発掘調査受託事業担当主幹）

高添遺跡土木園地区2次調査担当（～5月）

栗原 真（文化課発掘調査受託事業担当副主幹）

高添遺跡土木園地区2次（6月～）・石五道原

原田昭一（文化課発掘調査受託事業担当副主幹）

地区5次・出口地区3次調査担当

井上素裕（文化課発掘調査受託事業担当嘱託）

高添遺跡土木園地区2次調査担当

山崎文子（文化課発掘調査受託事業担当嘱託）

高添遺跡土木園地区2次・石五道原地区5次・

出口地区3次調査担当

第2節 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

本書で報告する遺跡群はいずれも旧大野郡千歳村に位置する。平成17年3月、この千歳村をはじめとして三重町・大飼町・大野町・朝地町・緒方町・清川村の旧大野郡に属する7町村が合併し、豊後大野市となったが、豊後大野市は大分県南部の大半を流域面積とする大野川の中流域に広がる地域である。

大野川は九州中央部の山稜地帯に源を発し、阿蘇溶結凝灰岩を基盤とする火山性台地を浸食して流れており、そのため、標高100～300mの広大な台地と大野川流域の谷底平野に地形が大きく分かれる特徴をもつ。今回、調査が行われた旧大野郡千歳村は、南を大野川本流、西を代三五山、王子山、田口山、北を石田山、東を白鹿山に囲まれた酉川流域の谷状平野及びその周辺を取り囲む台地が広がる地形をもつ。中には高添台地や鹿道原台地など100万㎡にも及ぶ広大な台地もみられ、これらの台地上は良好な畑地として多くの農産物を生んでいる。

気候は大分平野と久住山・祖母山の山稜部との中間の様相をもち、四季を通じて温暖であり、平坦地の平均気温が15～16℃と、きわめて農耕に適しており、広大な火山性台地の存在とともに古くから農業が基幹産業となりえる条件に恵まれていたことがわかる。

2 歴史的環境

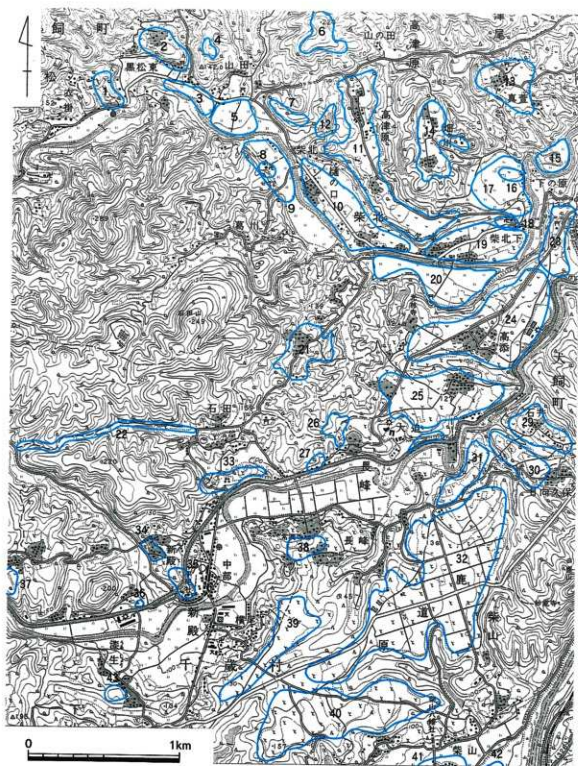
『豊後国風土記』に「此郡所部悉皆原野也 因斯名曰大野郡」とある。大野郡の地名の由来を記した件であるが、広大な原野が広がる土地であることから、地名が生まれたように、広大な原野が広がることが、この地域を最も特徴づけるものである。この広大な原野は火山性台地からなる肥沃な土地であるため、太古から様々な自然の恵みをたらしている。そのため、現在に至っても県下を代表する畑作地帯として受け継がれている。

旧石器時代の遺物はほとんどの台地上から出土しており、高添遺跡、鹿道原遺跡、大迫遺跡、原田第1・2遺跡において確認されている。今回、発掘調査が行われた高添遺跡石五道原地区や高添遺跡に隣接する倉園地区において石器集中箇所が確認されており、今後、良好な状態の遺跡はさらに増えるものと考えられよう。

縄文時代に至っても、ほとんどの台地上から遺物が出土している。高添遺跡石五道原地区、上原遺跡、鹿道原遺跡などをはじめとして縄文時代早期の無文土器や押型土器が確認されている。これ以降、縄文時代前期・中期・後期前半の遺跡は乏しく、後期後半になり、ふたたび遺跡が増加する。高添遺跡石五道原地区、上原遺跡、鹿道原遺跡などでは後期後半から晩期の縄文土器が出土しており、中でも、高添遺跡石五道原地区では西平式土器に伴う土偶が出土したように特筆すべきものもみられる。

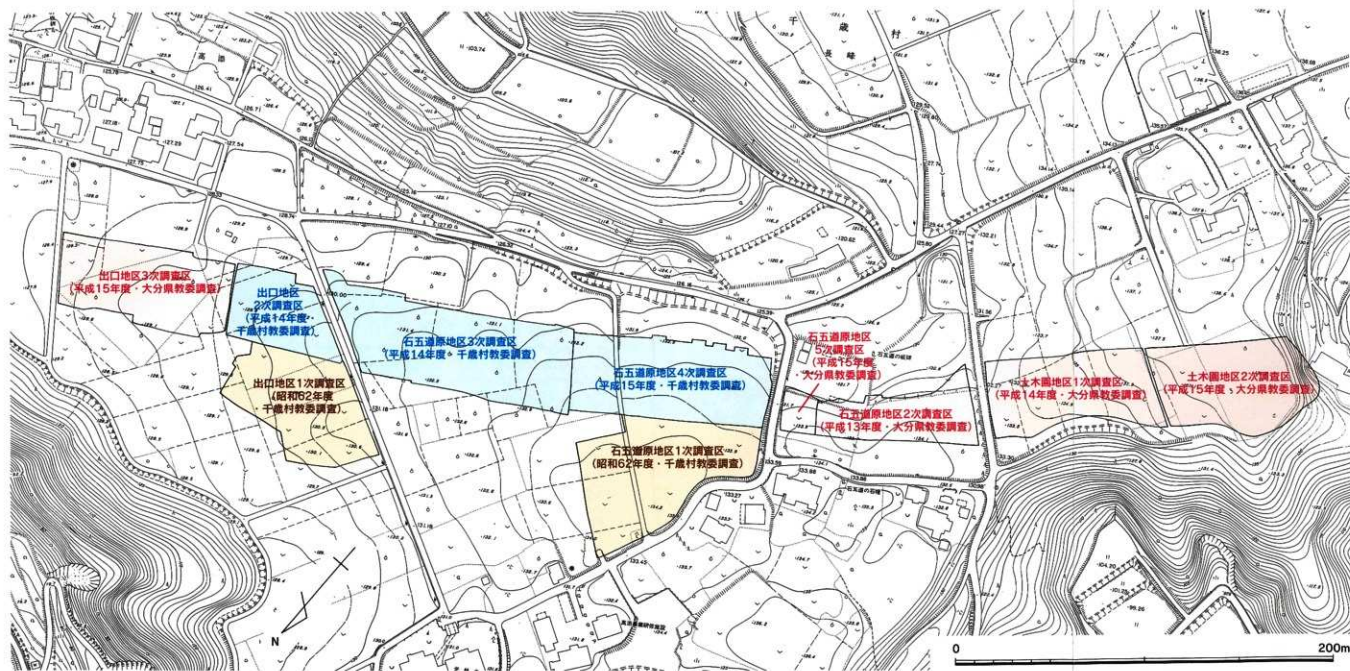
弥生時代では、前期から中期前半にかけての遺跡はひじょうに乏しい。その中でも高添遺跡の平石地区から前期の甕棺・壺棺墓が15基検出されたことは、墓の発見がきわめて乏しい大野川流域地域において興味深い。後期後半になると大野川流域全域に共通するが、集落遺跡の爆発的な増大がみられる。中でも、千歳町内で最大級の台地である高添台地、鹿道原台地ではそれぞれ、200基をこえる竪穴住居が検出されており、県下を代表する規模の集落が大野川流域の台地状に集中しており、当時の大野川流域の繁栄の様子がうかがえる。この傾向は古墳時代前期まで続き、弥生時代後期後半に出現した集落遺跡はこの時期まで存続するものが多い。しかし、これに続く集落遺跡はほとんど確認できず、台地上から忽然とムラが消える様相をもつ。これは、台地上を捨て、大野川流域の谷部に生活の拠点を移していったとも考えられようが、谷部においても当該期の集落遺跡が確認できているわけではない。

中世に至ると、人々の足跡が石造物からうかがえる。高添台地に限れば、貞和5年(1349)銘をもつ石五道板碑がまず確認でき、石五道地区には南北朝～戦国期におさまる石塔の集積地がみられる。このほかにも台地最高地にあたる場所には土壇や地下式墳からなる墓が存在し、ここにも戦国期の石塔がみられた。高添の集落内には現在も土壇や堀の痕跡が確認できるところがみられ、天文8年(1539)銘をもつ2基の高添板碑は屋敷地の土壇を背にして建てられている。このほかにも高添台地には水禄4年(1561)銘をもつ石幢がみられ、発掘調査により、遺構・遺物が確認できていないものの、台地上の集落は南北朝以降に営まれはじめたことがわかる。これは、他の台地上でも同様であり、南北朝～戦国期におさまる石塔が各地でみられるようになる。



第2図 遺跡分布図 (1/25,000)

- 1 黒松庵跡 2 阿蘇社遺跡 3 霧無遺跡 4 山田遺跡 5 表遺跡 6 高畑遺跡 7 向田・東遺跡 8 大型寺 9 大聖寺前遺跡 10 橋の口遺跡群 11 高津原遺跡群 12 西谷遺跡 13 真菰遺跡 14 畑ヶ川遺跡群 15 高橋遺跡 16 神宿A遺跡 17 神宿B遺跡 18 門行寺 19 名本遺跡群 20 橋の窪遺跡群 21 久保上遺跡 22 参勤交替道路 23 下ノ原遺跡 24 高浜遺跡 25 大迫遺跡 26 大迫の城跡 27 長慶寺跡 28 岩下横穴古墳群 29 八山遺跡 30 田原原遺跡群 31 中原遺跡群 32 鹿追原遺跡 33 古城・五部丸遺跡 34 新殿岡遺跡 35 龍興寺跡 36 庵の平遺跡 37 米山・南遺跡 38 ジョウワク寺跡 39 上原遺跡 40 宮園・筒ノ上遺跡 41 宮田遺跡 42 下津留遺跡

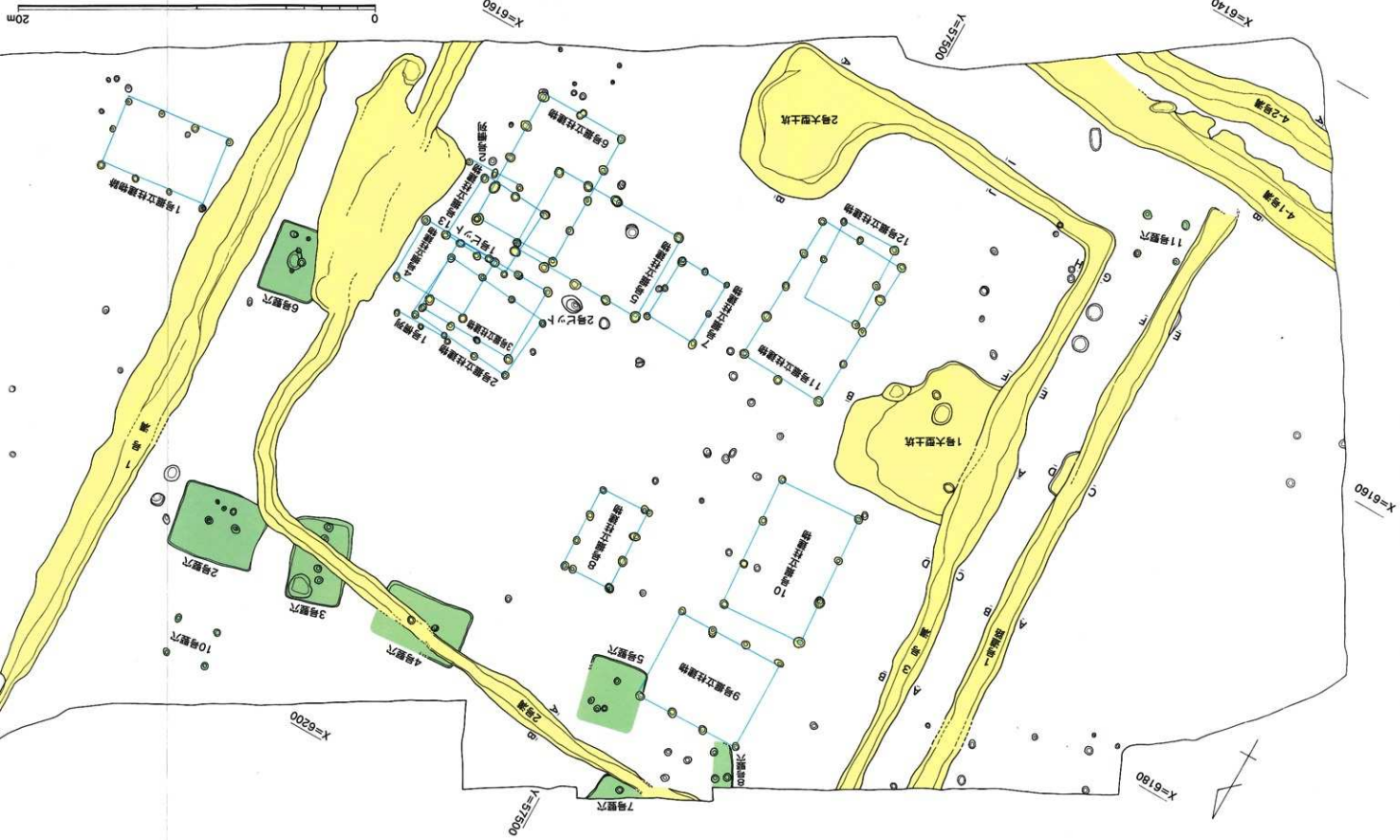


第3図 高湊道跡調査位置図 (1/2,000)



第4図 高浜遺跡出口地区3次調査区遺構配置図 (1/200)

第4图 高家湾遗址出口地区3次调查区通槽配置图(1/200)



第2章 高添遺跡の調査

第1節 出口地区3次調査区

1 調査の概要

出口地区3次調査区は大分県豊後大野市千歳町長峰字出口（旧大野郡千歳村大字長峰字出口）に所在し、高添台地上に位置する高添遺跡の東端にあたる。高添遺跡（出口地区）については、昭和62年に大野川中央地区畑地帯総合改良事業に伴う1次調査で、今回の調査区西側において50棟を超える弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居跡が検出されている。また、平成14年度の一般国道57号中九州横断道路建設に伴う千歳村再委託分である2次調査においては、中世～近世の溝状遺構・道状遺構が検出されている。今回の発掘調査における成果として、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構群と戦国時代の遺構群に分けられる。前者は方形竪穴住居跡を主体にし、後者は道状遺構や方形に巡る溝により囲まれた区画やその内外に展開する掘立柱建物群を主体にする。

発掘調査は、平成15年7月から平成16年2月まで8ヶ月間、実施した。

2 遺構と遺物

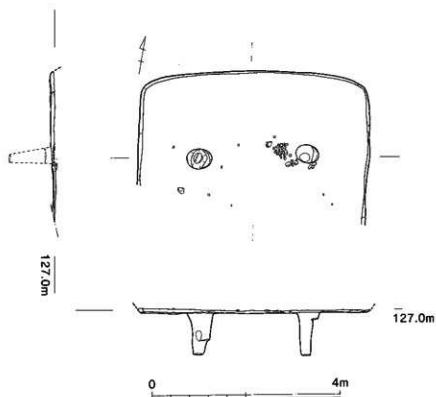
1号竪穴（第5図）

調査区の東側において確認された方形竪穴住居である。残存する深さは10cm程度と、削平がいちじるしい。遺構の南側部分が攪乱による削平を受けており、一辺4.9mの北側部分のみ残存している。主柱穴は2本と考えられ、この主柱穴に挟まれた間に焼土の広がり確認でき、また、焼土が広がる東側には土器片が集中して出土した。

出土遺物は第6図に示した。1・2は壺であり、両者とも外面にタテハケが施され、2の底部はレンズ底を呈する。3は叢石の台石であろうか。扁平な丸い川原石の中央に径3cmのくぼみがみられる。

2号竪穴（第7図）

調査区の中央よりやや東側において確認された東西4.9m、南北4.0mを測る方形竪穴住居である。残存する深



第5図 高添遺跡出口地区3次調査区1号竪穴実測図 (1/80)

第1表 高添遺跡出口地区3次調査区遺構一覧表

本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の時期	特記事項	掲載頁
1号堅穴	SH1	堅穴住居	弥生時代後期後葉～終末		9
2号堅穴	SH2	堅穴住居	弥生時代後期後葉～終末		9
3号堅穴	SH3	堅穴住居	弥生時代後期後葉		11
4号堅穴	SH4	堅穴住居	弥生時代終末～古墳時代初頭		11
5号堅穴	SH5	堅穴住居	弥生時代後期～古墳時代初頭		11
6号堅穴	SH6	堅穴住居	弥生時代終末～古墳時代初頭		11
7号堅穴	SH7	堅穴住居	古墳時代前葉		14
8号堅穴	SH8	堅穴住居	古墳時代前葉		14
9号堅穴	—	堅穴住居	弥生時代後葉～古墳時代前葉		15
2号堅穴ピット1	P1	堅穴住居柱穴	弥生時代後葉～古墳時代前葉		15
9号堅穴ピット2	P3	堅穴住居柱穴	弥生時代後葉～古墳時代前葉		15
9号堅穴ピット3	P4	堅穴住居柱穴	弥生時代後葉～古墳時代前葉		15
9号堅穴ピット4	P2	堅穴住居柱穴	弥生時代後葉～古墳時代前葉		15
10号堅穴	—	堅穴住居	弥生時代後葉～古墳時代前葉		16
10号堅穴ピット1	P23	堅穴住居柱穴	弥生時代後葉～古墳時代前葉		16
11号堅穴	—	堅穴住居	弥生時代後葉～古墳時代前葉		16
11号堅穴ピット1	P31	堅穴住居柱穴	弥生時代後葉～古墳時代前葉		16
1号掘立柱建物	—	掘立柱建物	16世紀後葉～18世紀中葉		18
2号掘立柱建物	—	掘立柱建物	16世紀後葉～18世紀中葉		18
3号掘立柱建物	—	掘立柱建物	16世紀後葉～18世紀中葉		18
4号掘立柱建物	—	掘立柱建物	16世紀後葉～18世紀中葉		19
5号掘立柱建物	—	掘立柱建物	16世紀後葉～18世紀中葉		19
6号掘立柱建物	—	掘立柱建物	16世紀後葉～18世紀中葉		19
6号掘立柱建物ピット1	P19	掘立柱建物柱穴	16世紀後葉～18世紀中葉		19
6号掘立柱建物ピット2	P14	掘立柱建物柱穴	16世紀後葉～18世紀中葉		19
6号掘立柱建物ピット3	P15	掘立柱建物柱穴	16世紀後葉～18世紀中葉		19
7号掘立柱建物	—	掘立柱建物	16世紀後葉～18世紀中葉		19
8号掘立柱建物	—	掘立柱建物	16世紀後葉～18世紀中葉		20
9号掘立柱建物	—	掘立柱建物	16世紀後葉～18世紀中葉		20
10号掘立柱建物	—	掘立柱建物	16世紀後葉～18世紀中葉		20
11号掘立柱建物	—	掘立柱建物	16世紀後葉～18世紀中葉		20
12号掘立柱建物	—	掘立柱建物	16世紀後葉～18世紀中葉		20
13号掘立柱建物	—	掘立柱建物	16世紀後葉～18世紀中葉		23
1号横列	—	横列	16世紀後葉～18世紀中葉		30
2号横列	—	横列	16世紀後葉～18世紀中葉		30
1号溝	SD1	溝	16世紀後葉～18世紀中葉		30
2号溝	SD2	溝	16世紀後葉～18世紀中葉		34
3号溝	SD3	溝	16世紀後葉～18世紀中葉		34
4-1号溝	SD4-1	溝	戦国～近世		36
4-2号溝	SD4-2	溝	戦国～近世		36
1号道路	SF1	道路	16世紀後葉～18世紀中葉		39
1号大型土坑	S3	大型土坑	16世紀後葉～18世紀中葉		35
2号大型土坑	S4	大型土坑	16世紀後葉～18世紀中葉		35
1号ピット	P13	ピット	16世紀後葉～18世紀中葉		39
2号ピット	P36	ピット	16世紀後葉～18世紀中葉		39

さは10cm程度と、削平がいちじるしい。遺構の南西隅は2号溝より削平を受けている。主柱穴は2本と考えられ、この主柱穴に挟まれた間に炭や焼土の広がりか確認できた。

出土遺物は第8図に示した。1・2は複合口縁壺の破片であり、1は口縁の立ち上がりはさほど高くなく、外面に上下2段の櫛描波状文が施されている。3～6は甕であり、4・6の底部は尖底に近い丸底を呈する。

3号壜穴 (第9図)

調査区の中央よりやや北東側において確認された東西3.4m、南北4.9mを測る方形壜穴住居であり、残存する深さは20～40cm程度である。遺構の中央は2号溝より削平を受けている。主柱穴は2本と考えられ、北東コーナーには、径1.4m、深さ60cm程度の土坑がみられる。主柱穴に挟まれた間に炭の広がりがわずかに確認できた。

出土遺物はさほど多くなく、図化できるものは第10図に示した。1・2は甕であり、2の底部は小さな平底を呈する。

4号壜穴 (第11図)

調査区の中央よりやや北東側において確認された東西5.2m、南北3.2mを測る方形壜穴住居であり、残存する深さは30cm程度である。遺構の中央は2号溝より削平を受けている。主柱穴は2本と考えられ、主柱穴に挟まれた間に炭の広がりがわずかに確認できた。

出土遺物はさほど多くなく、床面直上のものはみられない。図化できるものは第12図に示した。1・2は複合口縁壺の破片であり、1は口縁が内傾しながら高く立ち上がり、外面には上に櫛描直線文、下に櫛描波状文が施されている。2はナナメのキザミ目をもつ断面三角突帯がみられる。3は甕であろうか。底部が小さな平底を呈する。4～6は半月形の土器片加工品である。

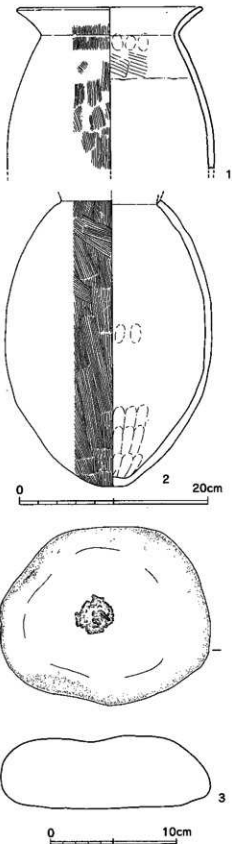
5号壜穴 (第4図)

調査区の中央よりやや北側において確認された残存辺3.3mを測る方形壜穴住居であり、残存状態はきわめて悪い。主柱穴は2本と考えられる。出土遺物はきわめて少なく、図化できるものはみられなかった。

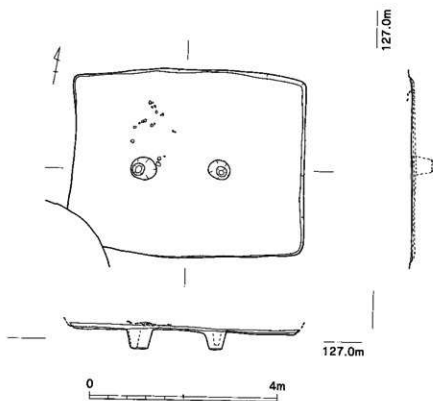
6号壜穴 (第13図)

調査区の中央において確認された東西4.1mを測る方形壜穴住居であり、残存する深さは10cm程度である。遺構の西側は2号溝より削平を受けている。主柱穴は2本であり、主柱穴に挟まれた間に灰跡が確認できた。

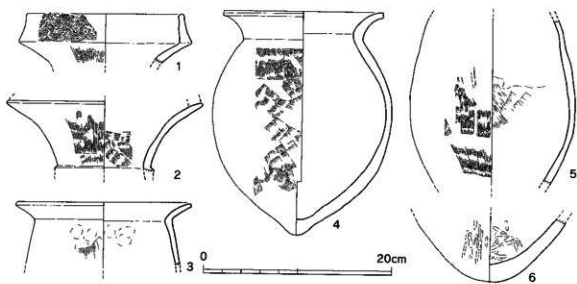
出土遺物は第14図に示した。1・2は複合口縁壺の破片であり、1は口縁が内傾しながら立ち上がり、外面には櫛描波状文が施され、2は直線的に高く立ち上がる口縁の外面に櫛描波状文が施されている。4は甕であろうか、底部は小さな平底を呈する。



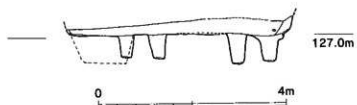
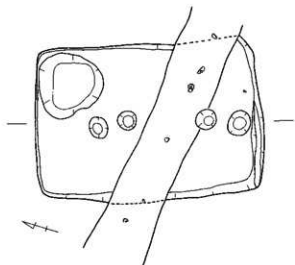
第6図 高浜遺跡出口地区3次調査区
1号壜穴出土遺物実測図(1/4・1/3)



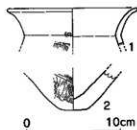
第7图 高添遺跡出口地区3次調査区2号竪穴実測図 (1/80)



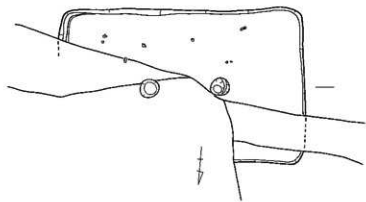
第8图 高添遺跡出口地区3次調査区2号竪穴出土遺物実測図 (1/4)



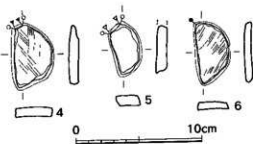
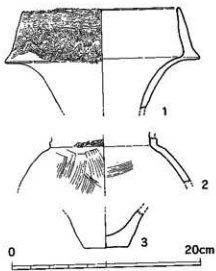
第9图 高添遺跡出口地区3次調査区3号竪穴実測図 (1/80)



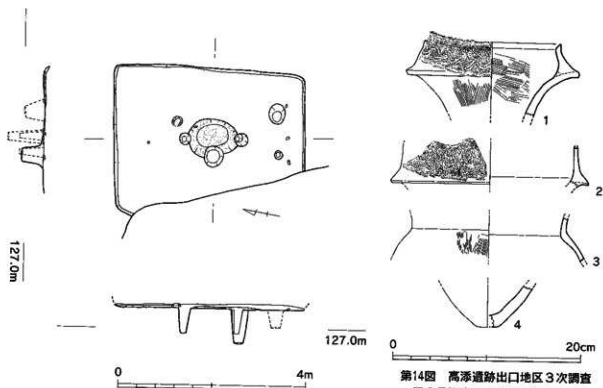
第10图 高添遺跡出口地区3次調査区3号竪穴出土遺物実測図 (1/4)



第11图 高添遺跡出口地区3次調査区4号竪穴実測図 (1/80)



第12图 高添遺跡出口地区3次調査区4号竪穴出土遺物実測図 (1/4·1/3)



第13図 高添遺跡出口地区3次調査区6号竪穴実測図 (1/80)

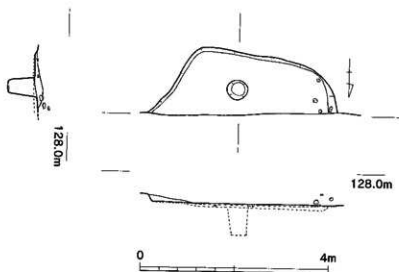
7号竪穴 (第15図)

調査区の中央北端において確認された竪穴住居であり、残存する深さは10cm程度である。北側は調査区外に延び、南は2号溝に接するため、明確なプランは明らかでない。柱穴は1本確認できたのみである。

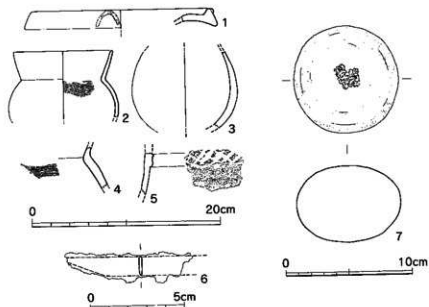
出土遺物は第16図に示した。1は複合口縁壺の破片であり、短く立ち上がる口縁外面には逆U字形の粘土を貼り付けている。2は小型丸底壺である。6は鉄器であるが、用途は明らかでない。7は川原石を利用した敲石であり、中央に径2cmのくぼみが見られる。

8号竪穴 (第4図)

調査区の中央よりやや北側において確認された方形竪穴住居であり、残存状態はきわめて悪い。出土遺物はき



第15図 高添遺跡出口地区3次調査区7号竪穴実測図 (1/80)



第16図 高湊遺跡出口地区3次調査区7号壁穴出土遺物実測図 (1/4・1/2・1/3)

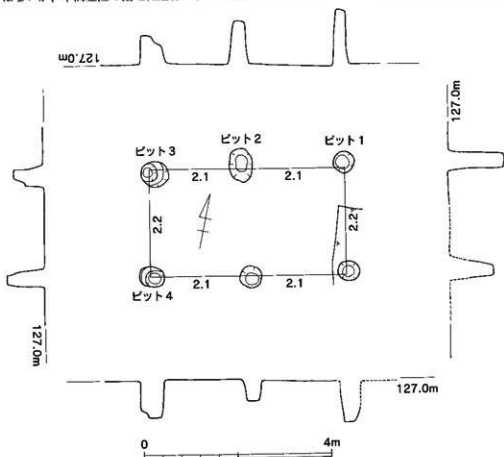
わめて少なく、図化できるものは1点のみである。第17図1は外反して口唇部に至る複合口縁壺の破片である。

9号壁穴 (第18図)

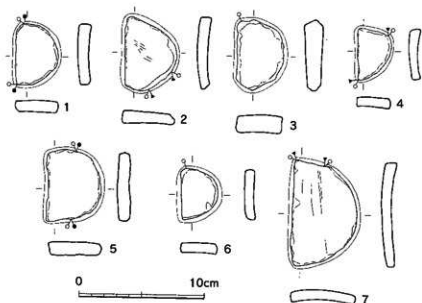
調査区東隅で確認できた6本の柱穴群である。掘立柱建物と考えられもなくはないが、本調査区の掘立柱建物はすべて磁北に近い方位を



第17図 高湊遺跡出口地区3次調査区8号壁穴出土遺物実測図 (1/4)



第18図 高湊遺跡出口地区3次調査区9号壁穴実測図 (1/80)



第19図 高浜遺跡出口地区3次調査区9号竪穴出土遺物実測図 (1/3)
 (1・2-ピット1、3-ピット2、4・5・6-ピット3、7-ピット4)

もつ並びの戦国期～近世のものであるが、柱穴群の方位が異なるうえに、この柱穴群中4箇所から出土した遺物が、すべて弥生～古墳時代のものであるため、床面まで削平された竪穴住居と判断した。出土遺物で図化できるものは第19図に示したが、すべて半月形の土器片加工品である。

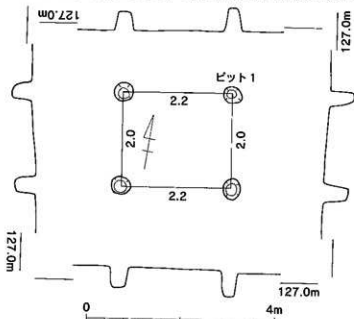
10号竪穴 (第20図)

調査区北東側で確認できた4本の柱穴群である。本調査区の掘立柱建物はすべて磁北に近い方位をもつ並びの戦国期～近世のものであるが、柱穴群の方位が異なるうえに、この柱穴群中から出土した遺物が、すべて弥生～古墳時代のものであるため、床面まで削平された竪穴住居と判断した。

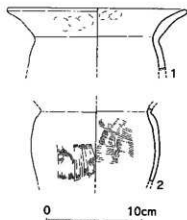
出土遺物で図化できるものは第21図に示したが、いずれも甕片である。

11号竪穴 (第22図)

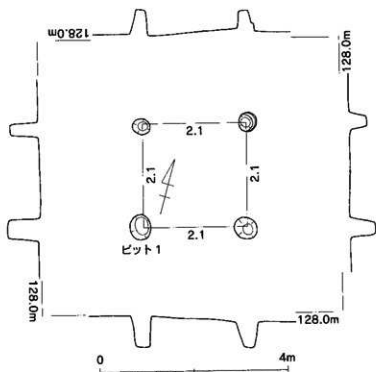
調査区西端で確認できた4本の柱穴群である。本調査区の掘立柱建物はすべて磁北に近い方位をもつ並びの戦



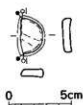
第20図 高浜遺跡出口地区3次調査区10号竪穴実測図 (1/80)



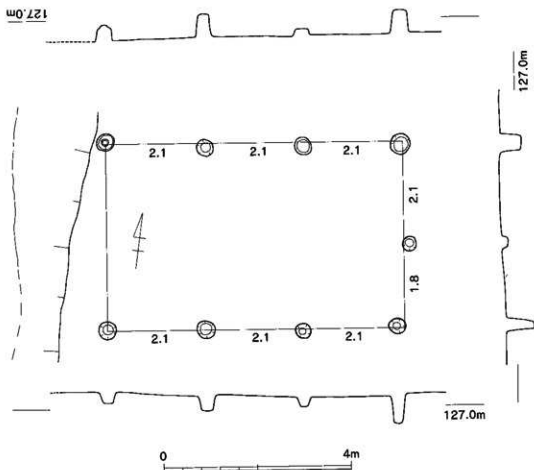
第21図 高浜遺跡出口地区3次調査区
 10号竪穴出土遺物実測図 (1/4)



第22図 高添遺跡出口地区3次調査区11号竪穴実測図 (1/80)



第23図 高添遺跡出口地区3次調査区
11号竪穴出土遺物実測図 (1/3)



第24図 高添遺跡出口地区3次調査区1号竪立柱建物実測図 (1/80)

国期～近世のものであるが、柱穴群の方位が異なるうえに、この柱穴群中から出土した遺物が、すべて弥生～古墳時代のものであるため、床面まで削平された堅穴住居と判断した。

出土遺物で図化できるものは第23図に示したが、半月形の土器片加工品である。

1号掘立柱建物 (第24図)

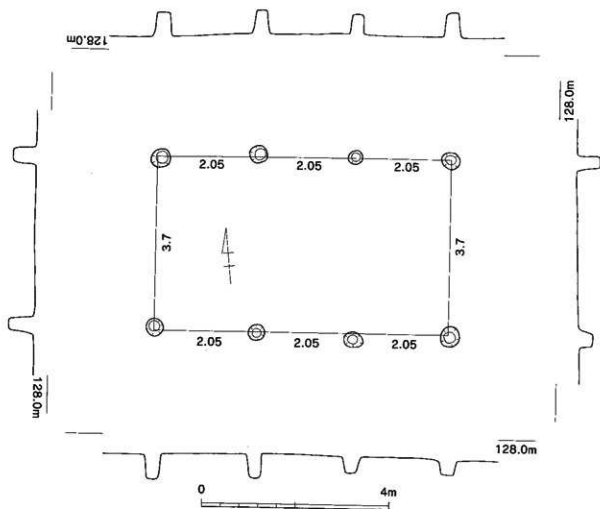
方形に廻る2・3号溝内の掘立柱建物群と異なり、1号溝の東側に単独で存在する。建物方位は $N-8^{\circ}-W$ であり、規模は梁間2間(3.9m)、桁行3間(6.3m)と、東西に長い。桁行の柱間寸法は南北とも2.1mで均等である。身舎面積は24.6 m^2 を測る。

2号掘立柱建物 (第25図)

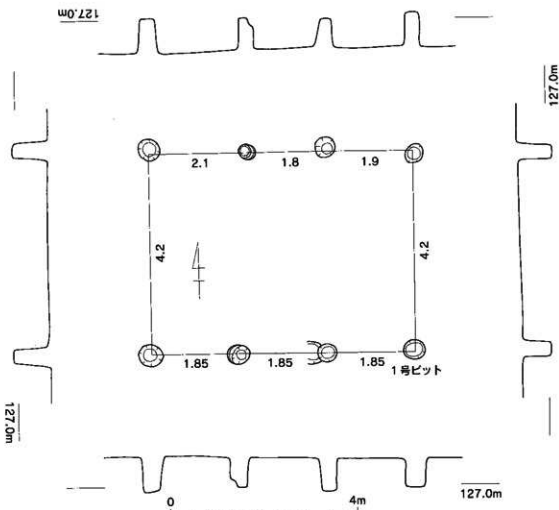
方形に廻る2・3号溝内の掘立柱建物群中の東端に存在し、3・4号掘立柱建物と重複する。建物方位は $N-6^{\circ}-E$ であり、規模は梁間1間(3.7m)、桁行3間(6.15m)と、東西に長い。桁行の柱間寸法は南北とも2.05mで均等である。身舎面積は22.7 m^2 を測る。

3号掘立柱建物 (第26図)

方形に廻る2・3号溝内の掘立柱建物群中の東端に存在し、2・4・13号掘立柱建物と重複する。建物方位は $N-1^{\circ}-E$ であり、規模は梁間1間(4.2m)、桁行3間(5.55m)と、東西に長く、身舎面積は23.3 m^2 を測る。4号掘立柱建物とビット1で重複するが、埋土はほぼ同じであり、どちらの掘立柱建物が新しいか判断できなかった。第56図に示したように、1号ビット中から17世紀後半～18世紀前半の唐津産陶器碗が出土しているため、近世に至ってもこの屋敷地が継続して営まれていたことがわかる。



第25図 高添遺跡出口地区3次調査区2号掘立柱建物実測図 (1/80)



第26図 高浜遺跡出口地区3次調査区3号掘立柱建物実測図 (1/80)

4号掘立柱建物 (第27図)

方形に廻る2・3号溝内の掘立柱建物群中の東端に存在し、2・3・13号掘立柱建物と重複する。建物方位は真北であり、規模は梁間1間(3.6m)、桁行2間(4.4m)と、東西に長く、身舎面積は15.8㎡を測る。3号掘立柱建物と1号ピットで重複するが、掘土はほぼ同じであり、どちらの掘立柱建物が新しいか判断できなかった。1号ピット中から17世紀後半～18世紀前半の唐津窯陶器碗が出土しているため、近世に至ってもこの屋敷地が継続して営まれていたことがわかる。

5号掘立柱建物 (第28図)

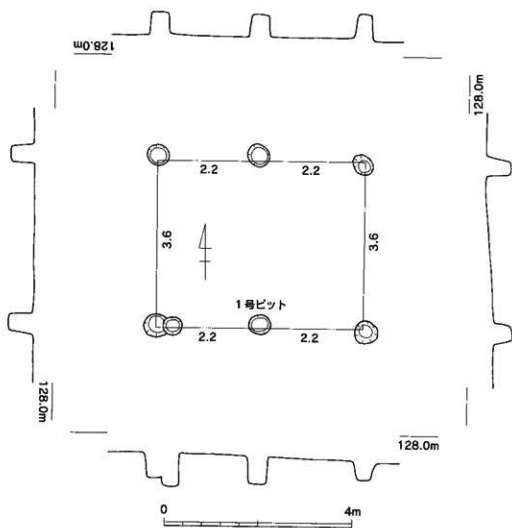
方形に廻る2・3号溝内の掘立柱建物群中の中央よりやや東側に存在し、6・13号掘立柱建物と重複する。建物方位は真北であり、規模は梁間1間(5.0m)、桁行4間(7.6m)と、東西に長い。桁行の柱間寸法は南北とも1.9mで均等であるが、南列の西より2箇所目の柱穴が欠けている。身舎面積は38㎡を測る。

6号掘立柱建物 (第29図)

方形に廻る2・3号溝内の掘立柱建物群中の東南端に存在し、5・13号掘立柱建物、2号櫓列と重複する。建物方位は真北であり、規模は梁間2間(4.9m)、桁行4間(7.6m)と、南北に長い。身舎面積は37.2㎡を測る。なお、この掘立柱建物の柱穴内から出土遺物がみられ、第30図に示した。1は口縁が端反りの形をもつ景徳鎮窯系青花皿、2は白磁皿、3は京都系土師器皿、4は土師質土器皿、5は備前系統陶器壺である。

7号掘立柱建物 (第31図)

方形に廻る2・3号溝内の掘立柱建物群中の中央に存在する。建物方位は真北であり、規模は梁間2間(2.5



第27図 高添遺跡出口地区3次調査区4号掘立柱建物実測図 (1/80)

m)、桁行2間(3.9m)と、南北に長い。身舎面積は9.8㎡を測る。

8号掘立柱建物 (第32図)

方形に廻る2・3号溝内の掘立柱建物群中の中央よりやや北側に存在する。建物方位は $N-2^{\circ}-W$ であり、規模は梁間1間(2.8m)、桁行3間(4.8m)と、南北に長い。身舎面積は13.4㎡を測る。

9号掘立柱建物 (第33図)

方形に廻る2・3号溝内の掘立柱建物群中の北西端に存在する。建物方位は真北であり、規模は梁間1間(5.2m)、桁行3間(6.3m)と、東西に長い。身舎面積は32.7㎡を測る。

10号掘立柱建物 (第34図)

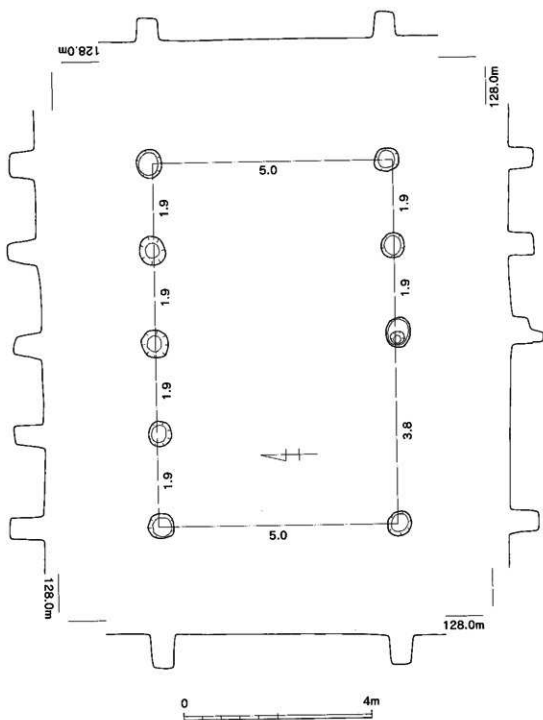
方形に廻る2・3号溝内の掘立柱建物群中の北西端に存在する。建物方位は $N-4^{\circ}-W$ であり、規模は梁間1間(4.8m)、桁行3間(7.5m)と、南北に長い。身舎面積は36.0㎡を測る。

11号掘立柱建物 (第35図)

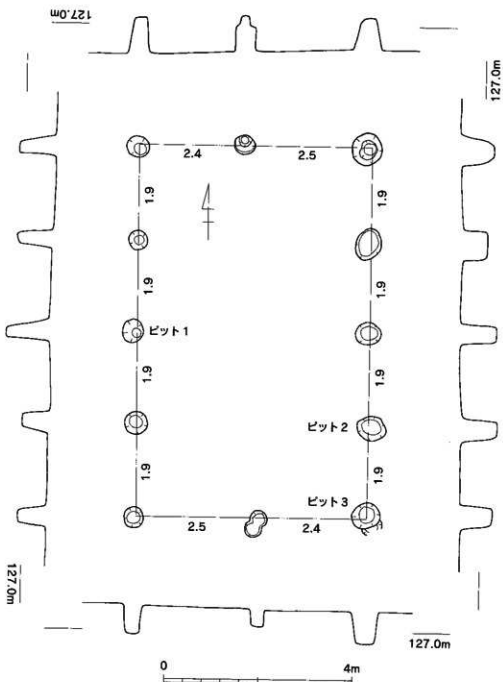
方形に廻る2・3号溝内の掘立柱建物群中の中央よりやや南西側に12号掘立柱建物と重複して存在する。建物方位は $N-1^{\circ}-E$ であり、規模は梁間2間(5.2m)、桁行4間(8.6m)と、南北に長い。身舎面積は44.7㎡を測る。

12号掘立柱建物 (第36図)

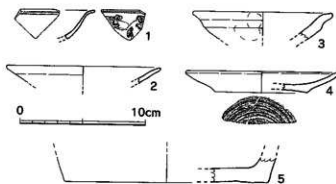
方形に廻る2・3号溝内の掘立柱建物群中の中央より南西側に11号掘立柱建物と重複して存在する。建物方位



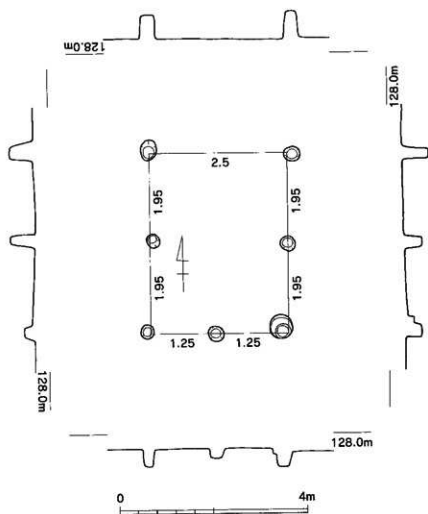
第28图 高濂遗址出口地区3次調査区5号獨立柱建物実測図 (1/80)



第29図 高添遺跡出口地区3次調査区6号掘立柱建物実測図 (1/80)



第30図 高添遺跡出口地区3次調査区6号掘立柱建物出土遺物実測図 (1/3)
(1-2-3-ビット1、4-ビット2、5-ビット3)

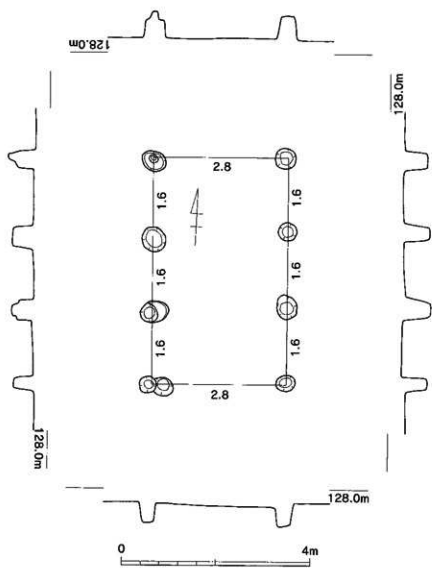


第31図 高添遺跡出口地区3次調査区7号掘立柱建物実測図 (1/80)

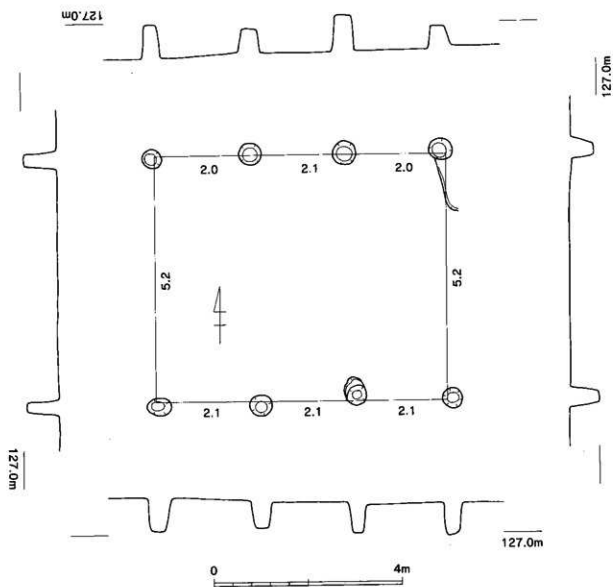
はN-3°-Wであり、規模は梁間1間(3.4m)、桁行2間(4.8m)と、南北に長い。北東隅の柱穴が欠けている。身舎面積は16.3㎡を測る。

13号掘立柱建物(第37図)

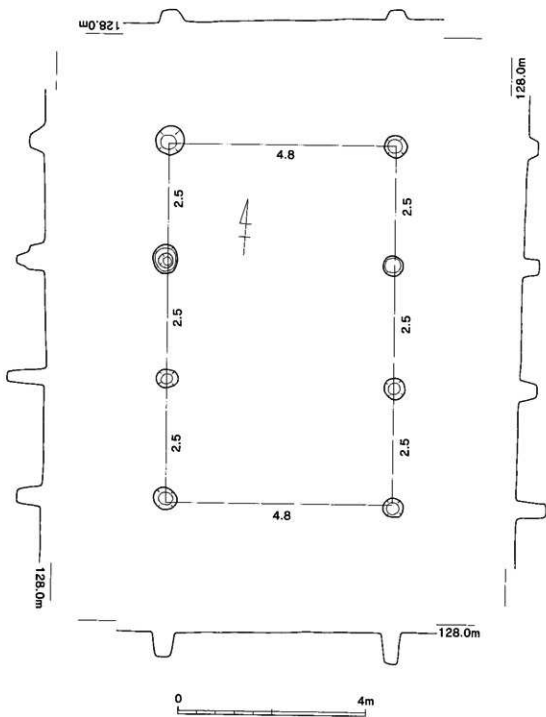
方形に廻る2・3号溝内の掘立柱建物群中の中央東端に3～6号掘立柱建物と重複して存在する。建物方位はN-2°-Eであり、規模は梁間1間(3.9m)、桁行2間(3.95m)と、正方形に近い。身舎面積は15.4㎡を測る。



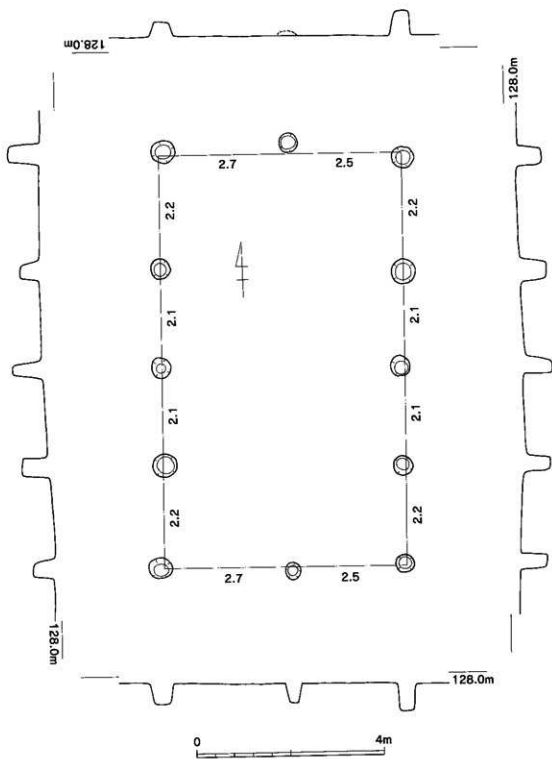
第32图 高添道跡出口地区3次調査区8号掘立柱建物実測図 (1/80)



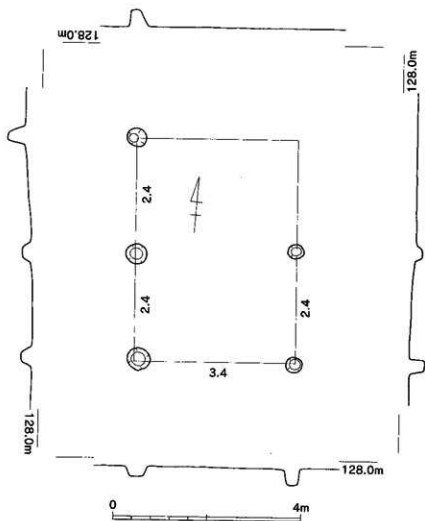
第33图 高添遺跡出口地区3次調査区9号竪立柱建物実測図 (1/80)



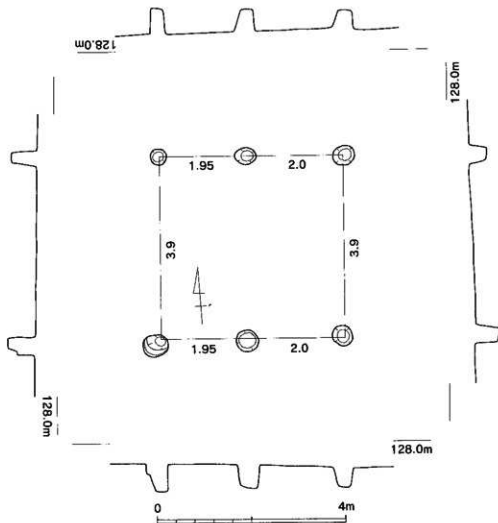
第34图 高泽遗址出口地区3次调查区10号掘立柱建筑物实测图 (1/80)



第35图 高添道跡出口地区3次調査区11号掘立柱建物実測図 (1/80)



第36图 高添通跡出口地区3次調査区12号掘立柱建物実測図 (1/80)



第37回 高湊遺跡出口地区3次調査区13号掘立柱建物実測図 (1/80)

第2表 高湊遺跡出口地区3次調査区掘立柱建物一覽表

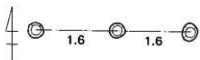
遺構名	梁間	桁行	面積	建物方位
1号掘立柱建物	2間 (3.9m)	3間 (6.3m)	24.6㎡	N-8°-W
2号掘立柱建物	1間 (3.7m)	3間 (6.15m)	22.7㎡	N-6°-E
3号掘立柱建物	1間 (4.2m)	3間 (5.55m)	23.3㎡	N-1°-E
4号掘立柱建物	1間 (3.6m)	2間 (4.4m)	15.8㎡	N-0°-E
5号掘立柱建物	1間 (5.0m)	4間 (7.6m)	38.0㎡	N-0°-E
6号掘立柱建物	2間 (4.9m)	4間 (7.6m)	37.2㎡	N-0°-E
7号掘立柱建物	2間 (2.5m)	2間 (3.9m)	9.8㎡	N-0°-E
8号掘立柱建物	1間 (2.8m)	3間 (4.8m)	13.4㎡	N-2°-W
9号掘立柱建物	1間 (5.2m)	3間 (6.3m)	32.7㎡	N-0°-E
10号掘立柱建物	1間 (4.8m)	3間 (7.5m)	36.0㎡	N-4°-W
11号掘立柱建物	2間 (5.2m)	4間 (8.6m)	44.7㎡	N-1°-E
12号掘立柱建物	1間 (3.4m)	2間 (4.8m)	16.3㎡	N-3°-W
13号掘立柱建物	1間 (3.9m)	2間 (3.95m)	15.4㎡	N-2°-E

1号横列 (第38図)

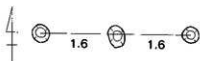
方形に廻る2・3号溝内の掘立柱建物群中の中央東端に2～6・13号掘立柱建物が重複して存在する北端に東西方向に3基並ぶ柱穴列であり、横列と捉えた。柱間は1.6mであり、全長3.2mを測る。

2号横列 (第39図)

方形に廻る2・3号溝内の掘立柱建物群中の中央東端に2～6・13号掘立柱建物が重複して存在する南端に東西方向に3基並ぶ柱穴列であり、横列と捉えた。柱間は1.6mであり、全長3.2mを測る。



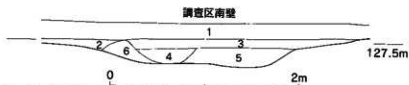
第38図 高添遺跡出口地区3次調査区1号横列実測図 (1/80)



第39図 高添遺跡出口地区3次調査区2号横列実測図 (1/80)

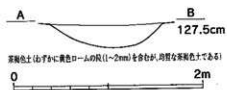
1号溝 (第4・40図)

方形に廻る2・3号溝の東側に2号溝と中心間約7mを隔て真北方向に走る幅2.5～3.5mの溝状遺構である。昭和末期の土地改良以前には、この位置に同様な溝が存在していたことが伝えられており、また、現在の地帯境にあたる。1号溝は発掘調査においても重機による掘削痕が認められたため、現代まで継続していたことがわかるが、重機により掘削された以前の溝が存在していたことが埋土から確認できる。しかし出土遺物が少なく、その開削期は明らかでない。

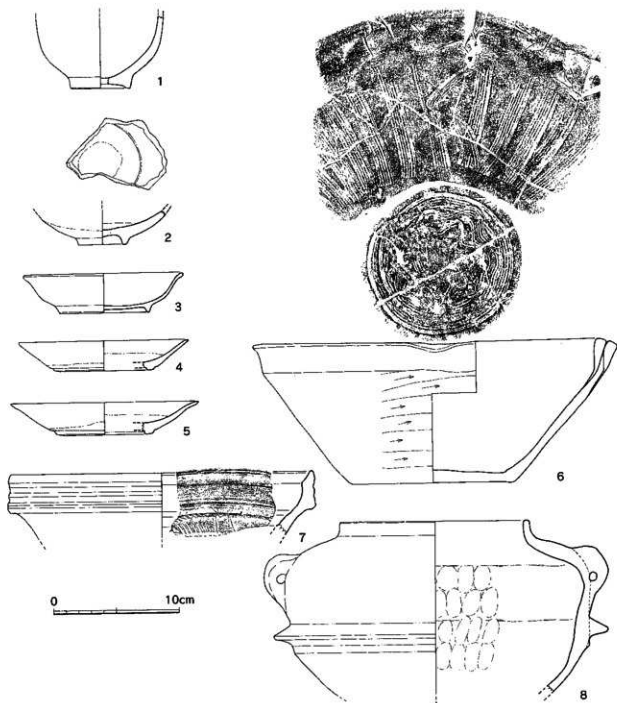


- 1 表土 (耕作土)
- 2 地上からの耕作により攪乱した土
- 3 茶褐色土 (1号溝最上層 黄色ロームの粒 (1～20mm) を含む)
- 4 茶褐色土 (3層より黄色ロームの粒が少ない)
- 5 暗茶褐色土 (4層より色調が暗い 黄色ローム粒を多く含む)

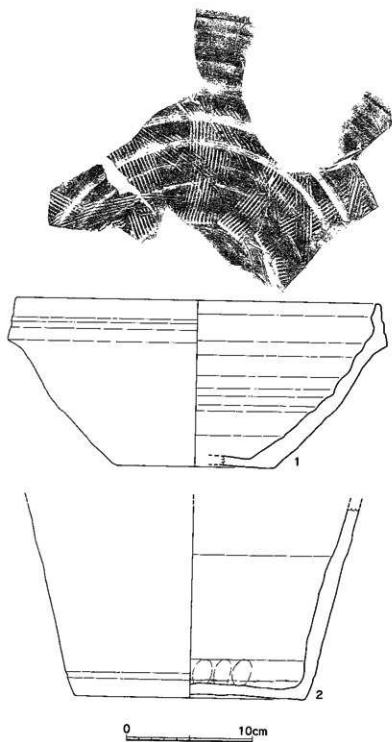
第40図 高添遺跡出口地区3次調査区1号溝土層断面図 (1/40)



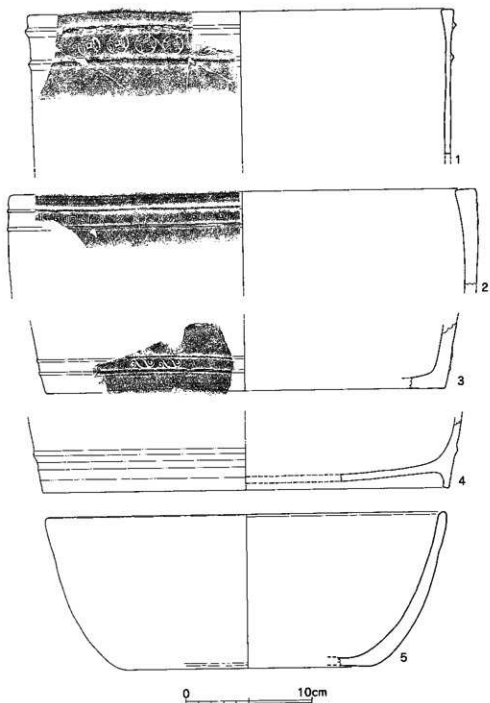
第41図 高添遺跡出口地区3次調査区2号溝土層断面図 (1/40)



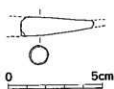
第42図 高添遺跡出口地区3次調査区2号溝出土遺物実測図① (1/3)



第43图 高添遺跡出口地区3次調査区2号溝出土遺物実測図② (1/3)



第44图 高添遗址出口地区3次調査区2号溝出土遺物実測図③ (1/3)



第45图 高添遗址出口地区3次調査区2号溝出土遺物実測図④ (1/2)

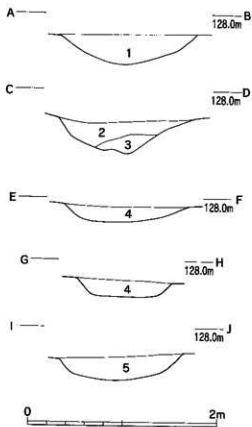
2号溝 (第4・41図)

方位によって方形に廻る溝である。深さは40cm程度であり、幅1～2mを測る。埋土は1層であり、土地の水捌けがよいせいか、滲水や水流の痕跡はみられなかった。調査区の南北に連続するが、北側に関しては、3号溝と連続するものと考えられ、方形の空間を囲む溝であることが想定できる。この空間を囲むそれぞれ相対する溝の心心間は38～40mを測り、1,500㎡の広さをもつ空間をつくり出している。2号溝東辺の中央部には南北12m、東西7m、深さ20～40cmの不定形な土坑が掘り直されたものとみられる大型土坑がみられる。埋土はしまりの弱い暗茶褐色土であり、地山の黄色ロームのブロックを多量に含むため、一気に埋め戻された土坑であると考えられよう。この土坑中からは陶磁器類のほか、五輪窓の部材や被熱した凝灰岩も多く出土している。第42図6の瓦質摺鉢が溝底からほぼ完形で押しつぶされた状態で確認できたため、溝の存続期間の一時期を決める資料になろう。

出土遺物は42～45図に示した。第42図1は肥前唐津系陶器碗であり、内外面に黄灰色に発色する釉が施され、畳付けに砂目が一部残る。16世紀末～17世紀前半に属するものであろう。2は唐津産陶器皿であり、外面下半および内面見込みが蛇の目状の露胎を呈し、畳付けにはわずかに砂目が残る。17世紀前半に属するものであろう。3～5は白磁皿である。3は口縁がS字状に外反し、4・5は逆「ハ」の字状に直線的に体部がのび、内外面とも下半が露胎のままである。6は瓦質摺鉢である。ナナメに開く体部の口縁を「く」の字状に折り曲げる特徴をもち、外面には横方向のケズリが施されている。内面には放射状スリ目がみられ、見込みには円状の中に波状のスリ目がみられる。7は備前系統締締陶器摺鉢であり、ナナメスリ目がみえるため16世紀後葉に属するものであろう。8は瓦質羽釜である。第43図1は備前系統締締陶器摺鉢であり、放射状スリ目に加えてナナメスリ目がみえるため16世紀後葉に属するものであろう。2は備前系統締締陶器壺の下半である。第44図1～4は瓦質土器火鉢である。1の口縁には2本の細い突線がみられ、その間に七宝文のスタンプが連続してみられる。2の口縁には2本の細い突線がみられ、その間に2個1単位の雷文帯のスタンプが連続してみられる。3は底部付近に2本の細い突線がみられ、その間に2個1単位の双頭煎手龍雲文のスタンプが連続してみられる。5は瓦質鉢である。第45図はキセル吸口である。

3号溝 (第4・46図)

方位によって方形に廻る溝である。深さは20～40cm程度であり、幅1～2mを測る。埋土は基本的に茶褐色土に地山の黄色ロームの粒を含む。土地の水捌けがよいせいか、滲水や水流の痕跡はみられなかった。調査区の北に連続するが、北側に関しては、2号溝と連続するものと考えられ、方形の空間を囲む溝であることが想定できる。この空間を囲むそれぞれ相対する溝の心心間は38～40mを測り、1,500㎡の広さをもつ空間をつくり出している。3号溝西辺の中央部には南北9m、東西7m、深さ40cmの不定形な大型土坑(1号大



第46図 高浜遺跡出口地区3次調査区
3号溝土層断面図 (1/40)

- 1 茶褐色土を基本に黄色ロームの小さい粒(1～50mm程度)を含む。また、黒灰少粒(1～10mm)も含むが、黄色ローム粒ほど大きくない。下層ほど黄色ロームの粒が大きい
- 2 茶褐色土を基本に黄色ローム無の小さい粒(1～20mm程度)を多く含む
- 3 1層と同じだが、より黄色ローム粒が多く、土色として黄色味を強く感じる
- 4 茶褐色土を基本に黄色ロームの小さい粒(1～20mm程度)と黒ボク粒(1～5mm)を多く含む
- 5 4層と基本的に黄色ローム・黒灰少粒はより少ない

型土坑)がみられる。土層観察から1号大型土坑を3号溝が切っているため、3号溝が新しいとも思えるが、溝の掘り直しが存在した可能性を考えると開削時期は確定できない。また、3号溝南辺の中央部にも東西7m、南北8m、深さ40cmの不定形な大型土坑(2号大型土坑)がみられる。3号溝と2号大型土坑との切り合い関係は認められず、同時存在の可能性が高い。

出土遺物は47・48図に示した。47図1・6は備前系焼締陶器甕であり、1は口縁の外周を縦長に肥厚させており、15世紀に属するものである可能性が高い。2は中国景德鎮窯系青花碗であり、わずかに口縁を端反りしている。3は青磁碗であろうが、変質している。高台内まで厚い釉がかけられており、14~15世紀に属するものとみられる。4は肥前唐津系陶器碗であり、高台部は露胎のままであり、胎土目であると考えられるため、1590~1610年に属するものであろう。5は唐津系陶器皿であり、胎土目であると考えられるため、1590~1610年に属するものであろう。7は瓦質土器火鉢である。口縁には2本の細い突縁がみられ、その間に2個1単位の双頭象手龍雲文のスタンプが連続してみられる。48図1は安山岩製石臼の上臼である。分面数は8区画であり、副溝は4~5本である。2は凝灰岩製石臼の下臼である。分面数は8区画であり、副溝は8本である。3は凝灰岩製五輪塔の地輪であろう。調整は粗い。

1号大型土坑(第4・49図)

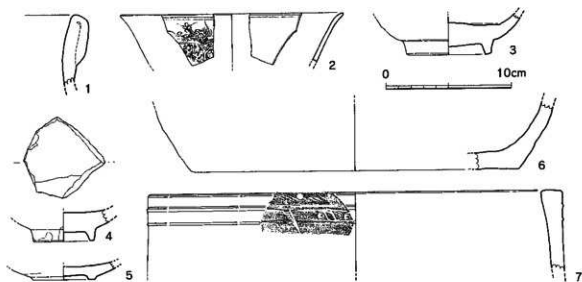
方位によって方形に廻る3号溝の中央部の東側にみられる南北9m、東西7m、深さ40cmの不定形な大型土坑である。土層観察から1号大型土坑を3号溝が切っているため、3号溝が新しいとも思えるが、溝の掘り直しが存在した可能性を考えると新旧関係は確定できない。

出土遺物は少ないが、図化できるものを50図に示した。瓦質土器火鉢である。口縁外周を肥厚させ、下の細い突縁との間に梅文のスタンプが連続してみられる。

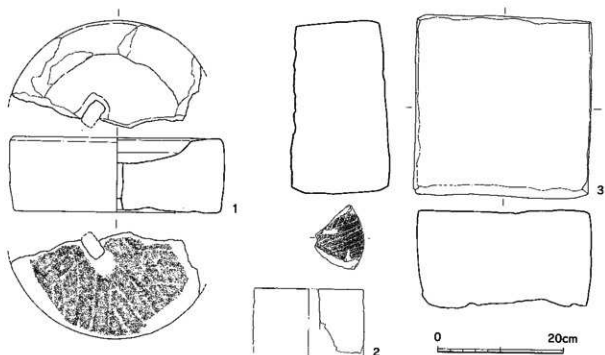
2号大型土坑(第4・49図)

方位によって方形に廻る3号溝南辺の中央部にみられる東西7m、南北8m、深さ40cmの不定形な大型土坑である。3号溝と2号大型土坑との切り合い関係は認められず、同時存在の可能性が高く、また、2号大型土坑の東側には3号溝は延びていない。

出土遺物は51図に示した。1は瓦質土器蓋である。2は青磁碗である。3は土質土器碗である。4・6は肥前唐津系陶器碗であり、17世紀後半~18世紀前半に属するものであろう。5は京都系土師器皿である。7は肥前磁器染付碗であろう。



第47図 高添遺跡出口地区3次調査区3号溝出土遺物実測図①(1/3)



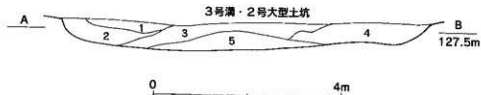
第48図 高添遺跡出口地区3次調査区3号溝出土遺物実測図② (1/6)

4号溝 (第4・52図)

調査区南西端に走る2条の溝であり、平成14年度、千歳村教育委員会(現:豊後大野市教育委員会)が調査した高添遺跡出口地区2次調査区2・3号溝に相当する溝の延長線上にある遺構である。4号溝は北側の幅が広く浅い溝と南側の断面逆台形の深い溝からなり、それぞれ、4-1号溝と4-2号溝とした。この両者は切り合いがなく先後関係は明らかでない。

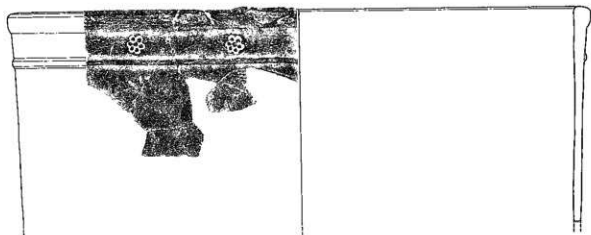


- 1 3号溝埋土: 茶褐色土(黒ボク・黄色ロームが少し混じる)
- 2 3号溝埋土: 黄色ロームのブロックと茶色土ブロックの混在層 一気に埋め戻したものであろう
- 3 3号溝埋土: 茶褐色土(炭が混じる)
- 4 3号溝埋土: 茶褐色土
- 5 1号大型土坑埋土: 黄色ロームのブロックと茶色土ブロックの混在層 一気に埋め戻したものであろう
- 6 1号大型土坑埋土: 茶褐色土(黒ボク・黄色ロームが少し混じる)
- 7 1号大型土坑埋土: 6層と似ているが、粒子がより細かい
- 8 1号大型土坑埋土: 茶色土(黒ボク・黄色ロームが少し混じる 比較的軟弱な土)
- 9 1号大型土坑埋土: 8層と似ているが、粒子がより細かい
- 10 1号大型土坑埋土: 基本的に8層と同じだが、黄色ロームブロックが大きい

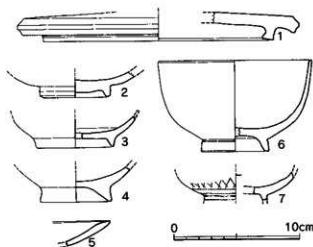


- 1 暗褐色土(黄色ロームブロックが少し混じる 軟弱な火山灰層)
- 2 黄色ローム(地川ではなく流れ込み、あるいは埋め戻されたものであり、茶褐色土が若干混入する)
- 3 茶褐色土(1~10mmの細かい黄色ロームを含む 3号溝と同じ埋土であると思える)
- 4 3層と同じだが、黄色ローム粒が1~100mmと大きく、混入土も大きい
- 5 黄色ロームと茶褐色土がブロック状に混在する

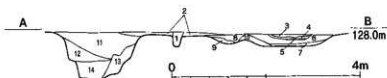
第49図 高添遺跡出口地区3次調査区3号溝、1・2号大型土坑土層断面図 (1/40)



第50図 高添遺跡出口地区3次調査区1号大型土坑出土遺物実測図 (1/3)

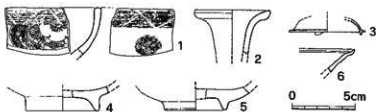


第51図 高添遺跡出口地区3次調査区2号大型土坑出土遺物実測図 (1/3)



- 1 現代の水遣管理設備方
- 2 道床硬化面 茶褐色土 (1~3mm程度の黄色ロームの小さい粒を含む)
- 3 茶褐色土に黄色ロームの小さい粒を比較的多く含む。軟質
- 4 茶褐色土 きめが細かく均質で硬化している
- 5 青灰色粘質土 かなり硬化しており道路の水溜りに溜まった泥が踏み固められて硬化したものか
- 6 茶褐色土にきわめて小さい黄色ロームの粒 (1~5mm) をわずかに含む。比較的硬化している
- 7 6層と同じだが、より硬化している
- 8 茶褐色土にきわめて小さい黄色ロームの粒 (1~5mm) をわずかに含む。比較的硬化している。6層と同じか
- 9 地山
- 10 茶褐色土・黄色ローム・黒ボクの小さい粒が混在
- 11 茶褐色土を基本にしなから黄色ローム・黒ボクのブロックを大量に含む
- 12 11層とはほぼ同じだが、やや軟質である
- 13 茶褐色土・黄色ローム・黒ボクの小さい粒が混在するきわめて軟らかい土。堀が生きている間に徐々に崩壊した土か
- 14 茶褐色土 (1~3mm程度の黄色ロームの小さい粒を含む。本来の構理上であろう)

第52図 高添遺跡出口地区3次調査区4号溝土層断面図 (1/80)

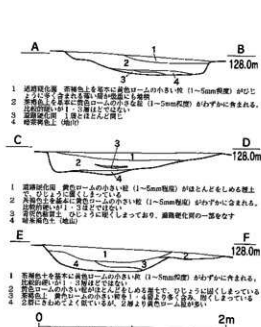


第53図 高湊遺跡出口地区3次調査区4号溝出土遺物実測図 (1/3)

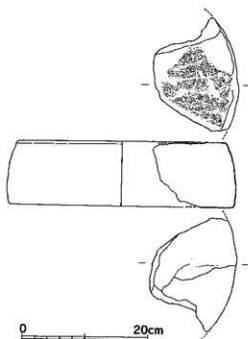
4-1号溝は最下層(7層)が硬化しており、その上層(6・8層)も比較的硬い。遺構としては溝状を呈するが、道路としての機能も有していることが考えられる。しかし、さらに上層には茶褐色に黄色ロームを含む埋土(3層)がみられる新たな溝が確認できるが、この最下層(5層)は青灰色粘質土がきわめて硬化しており、道路として機能しており、水溜まりに溜まった泥が踏み固められて硬化したものと考えられる。

4-2号溝は上幅1.5m、深さ1mを測る逆台形の溝であり、最も古い埋土である13層は茶褐色土・黄色ローム・黒ボクの小さい粒が混在するきわめて軟らかい土で、溝掘前後に溝肩が壊れて徐々に埋没した自然埋土であるものと思える。これに対して、14層は本来の溝埋土であり、茶褐色土に黄色ロームの小さい粒が含まれる。この14層中には16世紀に属する遺物がみられるため、4-2号溝が当該期に存在していたことがうかがえる。これに対して、その上層である11・12層は茶褐色土を基本にしながら、黄色ローム・黒ボクのブロックを大量に含むため、溝を埋めるため一気に埋め戻した埋土であることが想定できる。なお、この層には近世陶磁器が含まれるため、近世以降の埋め戻しであることが想定できる。4-2号溝埋め戻し後には4-1号溝と4-2号溝を覆うように茶褐色土に黄色ロームの小さい粒が含まれる硬化土がみられるため、この位置に道路面が存在していたことがうかがえる。近年、位置が若干ずれるが、道路が存在していたことが伝えられているため、この道路が踏襲されていることが考えられよう。

出土遺物は乏しいが、図化できるものは第53図に示した。4のみ4-2号溝14層から出土しているが、他はすべて最上層からの出土である。3は銅製蓋であろうか。4は肥前唐津系陶器碗であり、内外面に黄灰色に発色する釉が施釉されており、裏付面に砂目が一部残る。17世紀前半に属するものであろう。



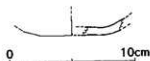
第54図 高湊遺跡出口地区3次調査区
1号道路土層断面図 (1/40)



第55図 高湊遺跡出口地区3次調査区
1号道路出土遺物実測図 (1/6)



第56図 高浜遺跡出口地区3次調査区
1号ピット出土遺物実測図 (1/3)



第57図 高浜遺跡出口地区3次調査区
2号ピット出土遺物実測図 (1/3)

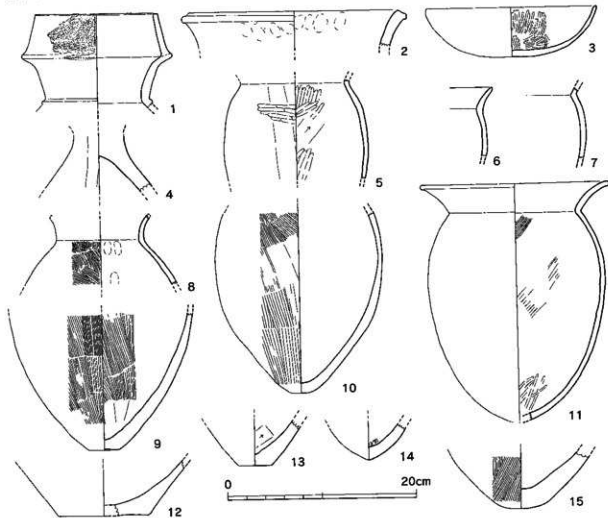
1号道路 (第4・54図)

方形に廻る2・3号溝の西側に3号溝と心間約4~5mを隔て真北方向に走る幅1.0~1.5m、深さ20~30cmの道路遺構である。底面は歩行のためか非常に硬化しており、中には青灰色粘質土がきわめて硬化した箇所もみられ、水溜まりに溜まった泥が踏み固められて硬化したものと考えられる。

出土遺物はほとんどみられないが、図化できるものは第55図に示した。第55図は安山岩製石臼の下臼である。

ピット (第4図)

遺跡中から2・3号溝に囲まれた範囲を中心に、200基を超えるピットが確認されている。その多くは掘立柱建物のものでとらえられるが、このほかに出土遺物から弥生~古墳時代の柱穴であるものも存在する。大野川流域の台地上の地層は場所により厚さが異なるが、ほとんど似た様相がみられる。ここでは一部、黒色帯まで遺構検出面としてみえているため、本来の地形からいちじるしく削平されていることがわかる。弥生時代末の住居跡群のほとんどが残存深10cm程度であるため、かなりの削平を受けていることがわかるが、床面まで削平さ



第58図 高浜遺跡出口地区3次調査区出土遺物実測図① (1/3)

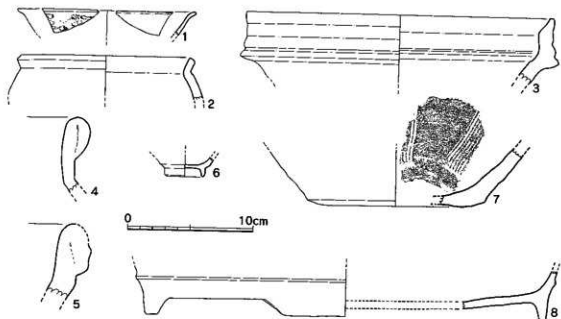
れ、2・4・6本の柱穴のみ残された遺構も存在する。このうち、竪穴住居の可能性が高い遺構は把握できたが、なかには把握しえなかったものも存在するはずである。

出土遺物は非常に少なく図化したもののみ、第56・57図に示した。第56図は1号ピット中から出土した唐津産陶器碗である。17世紀後半～18世紀前半に属するものであろう。第57図は2号ピット中から出土した京都系土師器皿である。16世紀後半に属するものであろう。

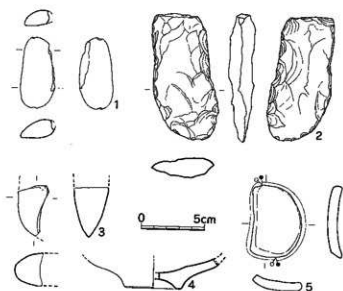
包含層 (第58～63図)

包含層中から出土した遺物は第58～63図に示した。

第58図1は複合口縁蓋の破片であり、1は口縁が高く立ち上がり、外面に上下2段の櫛描波状文が施されてい

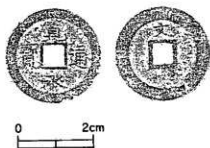


第58図 高浜遺跡出口地区3次調査区出土遺物実測図② (1/3)

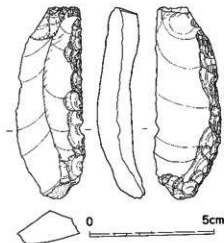


第60図 高浜遺跡出口地区3次調査区出土遺物実測図③ (1/3)

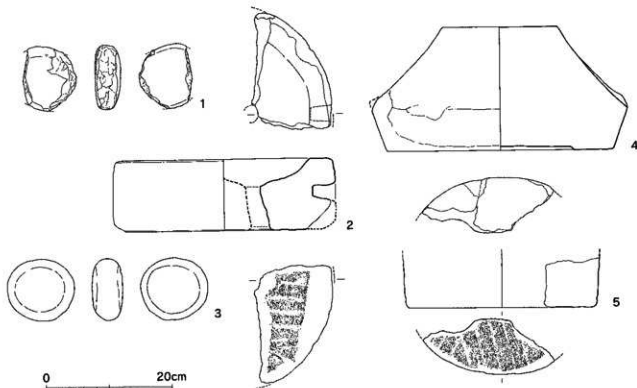
る。4は高坏脚部である。3は鉢であり、内面を丁寧にみがいている。第59図1は景德鎮窯系青花皿である。2は土師質土器壺である。「く」の字状に短く外反する口縁が特徴的である。3～5・7は備前系統締締陶器であり3・7は搥鉢、4・5は壺甕類である。6は陶器小杯、8は瓦質火鉢である。第60図1は粘板岩製切目石錘である。2は安山岩製扁平打製石器である。3は安山岩製磨製石斧の破片である。4は縄文時代浅鉢底部片である。5は弥生土器の半月形の土器片加工品である。第62図は流紋岩製削器である。第63図1・3は両面を磨面とした磨石であり、1は砂岩製、3は安山岩製である。2・5は石臼である。4は五輪塔火輪である。第61図は寛永通寶の文銭である。



第61図 高添遺跡出口地区3次調査区
出土遺物実測図④ (1/1)



第62図 高添遺跡出口地区3次調査区
出土遺物実測図⑤ (2/3)



第63図 高添遺跡出口地区3次調査区出土遺物実測図⑥ (1/6)

第2節 石五道原2・5次調査区

1 調査の概要と調査区の設定

豊後大野市千歳町に所在する高添遺跡群の発掘調査は、中九州横断道路建設工事に伴う、路線内の試掘調査によって遺跡の分布範囲を再確認して実施したものである。遺跡の発掘調査は、土地買収の終了した地点を中心に、平成12～15年度にかけて順次実施された。

高添遺跡は、大野川支流の西川左岸の台地上に位置する広大な面積を有する遺跡である。遺跡の標高は約133mを呈する。高添遺跡は、現在の小学の範囲を越えて展開しており、便宜上、北側から出口地区、石五道原地区、土木園地区に分割して把握できる。石五道原地区2・5次調査区は、高添地区の台地中央部を西・東に走る中九州道の道路敷幅の限定された範囲であり、道路敷幅内に東西約26.5m、南北約112mの調査区を設定した。調査面積は約3,000㎡である。

高添遺跡群の石五道原地区2次調査は、平成13年12月17日～平成14年3月31日の約4ヶ月間実施し、石五道原地区5次調査は、平成15年6月26日～平成15年8月15日の約2ヶ月間実施した。

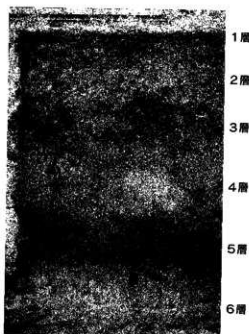
発掘調査は、試掘調査の結果に基づいて、表土を約30～50cm前後重機で剥ぎ、遺構を検出する作業から行った。

発掘調査の結果、石五道原地区2次調査は、弥生時代後期～古墳時代前期の堅穴22基や掘立柱建物遺構5基、古い道路と考えられる溝状遺構1基等が検出されている。石五道原地区5次調査は、弥生時代後期～古墳時代前期の堅穴1基や掘立柱建物遺構4基が検出されている。その内、堅穴住居跡と掘立柱建物遺構の配置には、何らかの規則的なまとまりがあることが判明している。これまで、大野川流域一帯の遺跡から発見された掘立柱建物遺構は、千歳町の鹿道原遺跡で、並び舎の先駆的な様相として、その稀有な事例が認識されたことは記憶に新しいが、それ以降、僅かな事例の追加があるのみであり、地域的な特徴が普遍的な分布を含めて、極めて注目される発見例と言っても過言ではない。

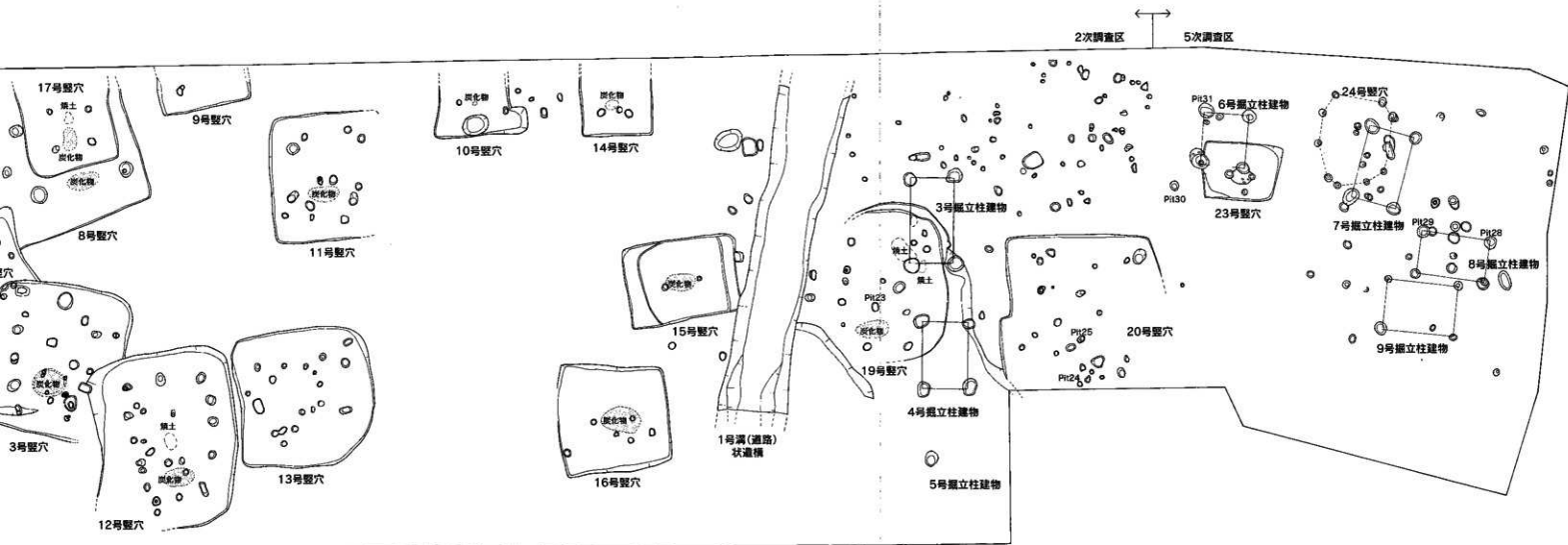
2 基本層序

高添遺跡の現状は畑地帯であり、土層の堆積は比較的単純である。基本的な層序を柱状図で示すと次のようになる。

- 1層 表土層。灰黒褐色の現耕作土層である。
- 2層 灰褐色土層で旧耕作土層に相当する。
- 3層 黒褐色土層。いわゆるクロボクと呼ばれる火山灰層である。弥生～古墳時代の堅穴住居跡はこの3層上面から掘り込まれている。
- 4層 明褐色土層。いわゆる貴な粉のようなアカホヤと呼ばれる火山灰層をブロック状に含む土層である。この層はアカホヤが上・下のクロボクと混合した赤みがあった土層であり、太陽光線にキラキラと光る微細なガラス質火山灰層である。
- 5層 漆黒褐色土層。いわゆるクロボクと呼ばれる火山灰層である。縄文早期の遺物包含層にあたる。やや粘性のある土層である。
- 6層 黄色火山灰層である。やや粘性のあるローム層である。弥生～古墳時代の堅穴住居跡はこの6層内まで掘り込まれている。

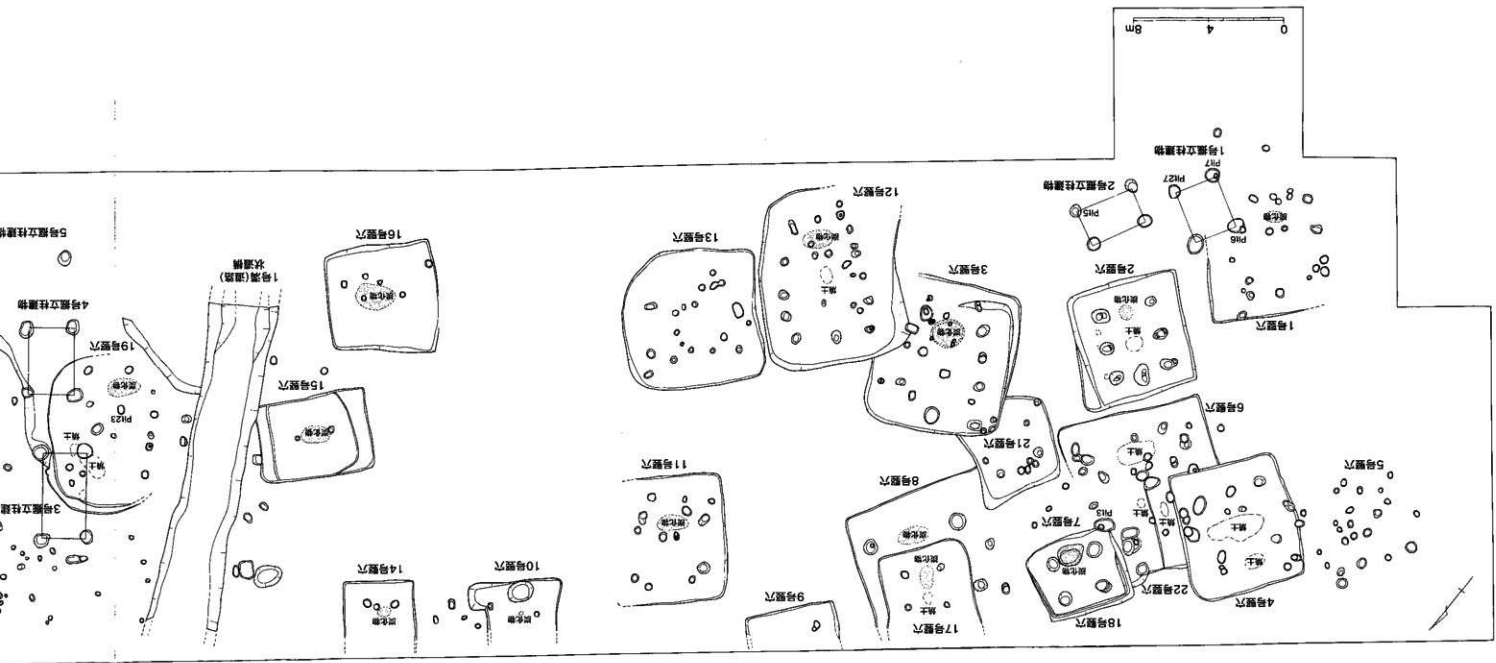


高添遺跡石五道原地区2次調査区
基本層序（東から）



第64图 高净道跡石五道原地区2・5次調査区遺構配置图 (1/200)

第64圖 臺灣通統石滬脚地区 2・5次崩落区遺構配置圖 (1/200)

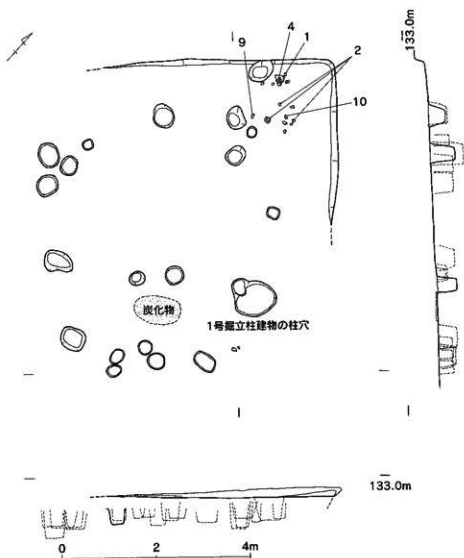


3 調査の成果

竪穴遺構

1号竪穴 (第65図)

調査区の西端部に位置する方形の竪穴である。竪穴は北コーナーを残すもので、規模は判然としないが、残存する主柱穴から壁面までの距離を考慮すると、東西8.4m、南北7.5mの長方形を呈する。確認面から床面までは約10~25cmであり、中央部やや南寄りに長軸1m、短軸60cm、深さ数cmの楕円状の炭化物が位置している。主柱穴は北側、南側中央部の各1本と、2本ずつの8本、計10本の主柱を設置している。炭化物の北側には2本一対の補助柱穴が遺存していた。竪穴北側の床面近くの覆土内には土器片が散乱していた。1号竪穴は1号掘立柱建物と切り合い関係にある。

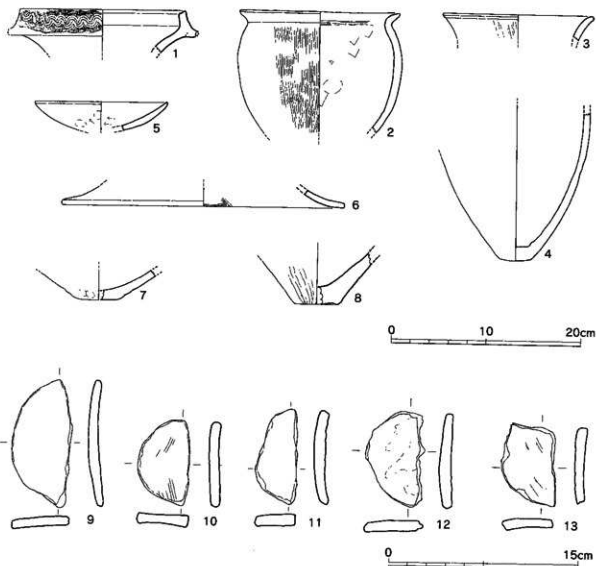


第65図 高湊遺跡石五道原地区2次調査区1号竪穴実測図 (1/80)

出土遺物 (第66図)

1は複合口縁甕の口縁部である。立ち上がりは低く、一条の櫛播波状文を施す。首部のやや長いものであろう。口径17.5cmを測る。2～4は甕形土器である。2は短く屈曲する口縁部の先端は細く仕上げている。口径16.9cm、頸部15.2cm、胴部最大径は上半にあり、17.3cmを呈する。表面は縦の刷毛目調整、内面はナデ調整を施す。3は口縁部、4は胴部から底部への破片である。表裏はナデ調整で、底径は3.3cmである。5は浅い鉢形土器である。口径14cm、器高約3cmで底部は丸底である。6は高坏の脚である。脚径は30cmを測る。7・8は底部である。いずれも平底底部で4.4cmの底径がある。9～13は土器片加工品である。周辺部を磨き半月状に仕上げている。9の大きいもので長さ10.1cm、幅4.8cm、重さ41.5g。10の小さいもので長さ7.5cm、幅3.3cm、重さ22.8g。土器片加工品の形態や機能を推察するに、研磨しつつ、半月状に仕上げるのが目的だったのか、使用の結果の所産だったのかは、俄かに判別しにくい。

1号竪穴の時期は弥生時代後期中葉にあたる。



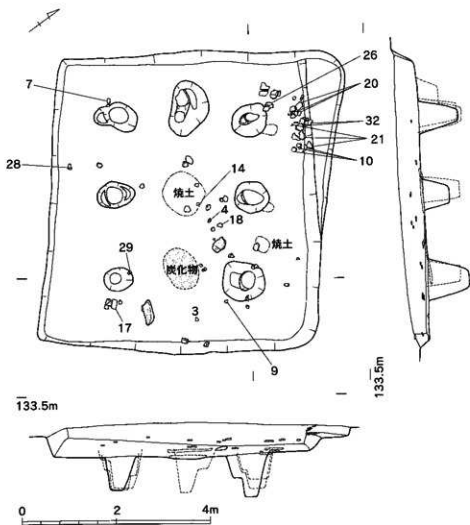
第66図 高添遺跡石五道原地区2次調査区1号竪穴出土遺物実測図 (1/4・1/3)

2号竪穴 (第67図)

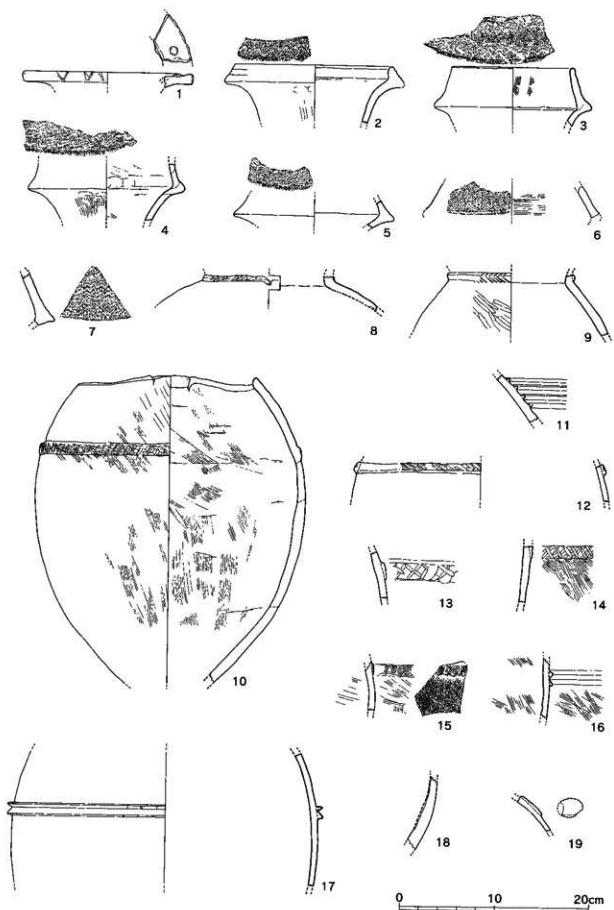
調査区の南西部に位槽する竪穴である。竪穴の平面プランは、東西6m、南北6.4mの正方形に近い長方形を呈し、北端コーナー部付近では、段状になっている。確認面から床面までは約40~50cmであり、中央部に、径約90cmの赤褐色焼土炉が位置し、これよりやや南方に長軸90cm、短軸70cm、深さ数cmの楕円状の炭化物炉が位置している。主柱穴は北側中央部の1本と、左右に3本ずつの6本の主柱を設置している。竪穴北側の床面近くの覆土内には土器片が散乱していた。

出土遺物 (第68~70図)

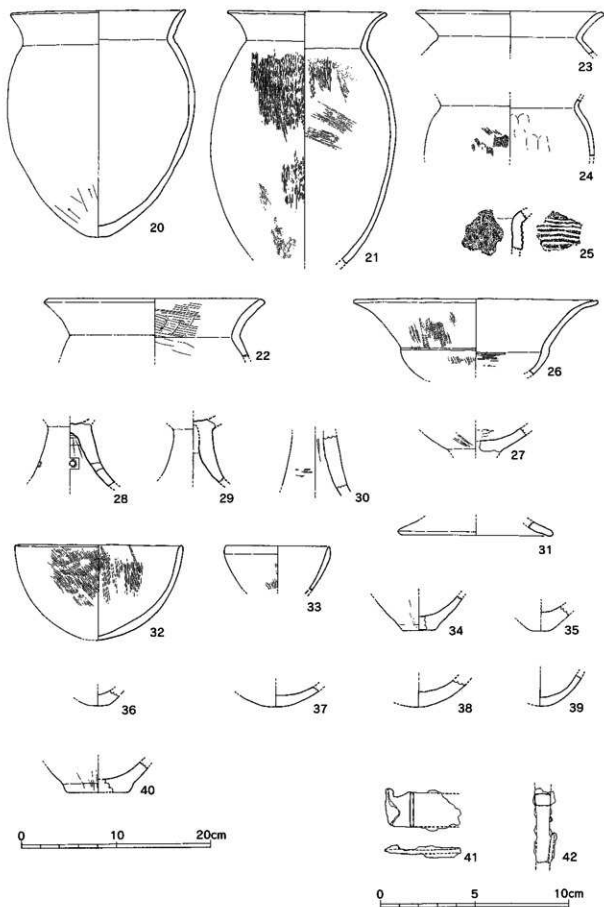
1~19までは複合口縁の壺形土器の破片である。1は立ち上がりの極めて低く、鋤先状の口縁に近い。肥厚した平坦面には円形浮文が施文されている。2の複合口縁の立ち上がりも低く、一条の櫛播波状文が廻る。口径は16.8cm。3の複合口縁の立ち上がりはやや高く、二条の櫛播波状文が廻っている。4~7は櫛播波状文が廻る複合口縁の破片である。7は二条の櫛播波状文が廻っている。8・9は頸部に低い三角突帯を廻らせた破片である。8は斜め刻み目を施し、頸部径は14cmを測る。9は頸部から肩部の破片である。頸部の突帯上を「く」の字状に刻む。頸部径は13cmを測る。10は複合口縁の壺形土器の体部である。口縁部、頸部を欠損するが、胴部中央部の最大径は28.8cmである。胴部中央より上半には「×」の付いた一条の突帯を廻らす。底部は欠損して



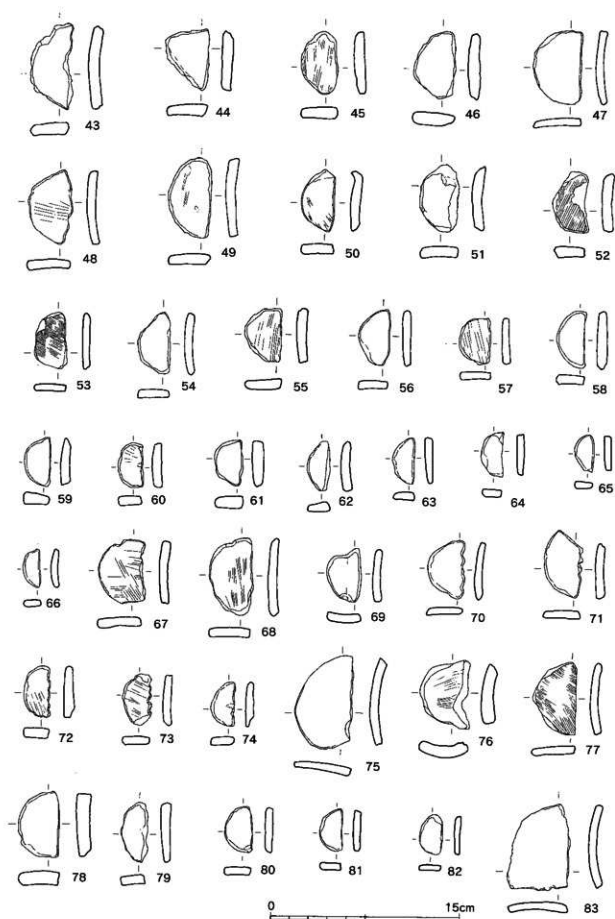
第67図 高浜遺跡石五道原地区2次調査区2号竪穴実測図 (1/80)



第68图 高添遺跡石五道原地区2次調査区2号堅穴出土物実測図① (1/4)



第69图 高添遺跡石五道原地区2次調査区2号竪穴出土遺物実測図② (1/4・1/2)



第70图 高泽遗址石玉道原地区2次調査区2号整穴出土遺物実測図③ (1/3)

いる。口縁部、頸部を欠損するが、口部は丁寧に縁取りされて、破損した後も使用されていたことが判る。胴部最大径は28.8cmを測る。11は壺形土器の肩部である。断面三角突帯が少なくとも4条施文されている。12~18は壺形土器の胴部の破片である。12~14は低い「コ」の字状突帯に「×」の付いた一条の突帯を廻らす。12の胴部径は27.5cm。15は低い「コ」の字状突帯に刷毛目原体で大きく刻んだ一条の突帯を廻らす。16~18は壺形土器の胴部である。断面三角突帯が2条接着して施文されている。17の胴部の最大径は突帯部で33.5cm。19は頸部近くに円形の浮文を施す。

20~24は壺形土器である。20は口径18.6cm、頸部16.2cm、胴部最大径は20cmであり底部はやや厚い丸底である。表裏ナデ調整。21は口径16.8cm、頸部13cm、胴部最大径は19.8cmであり底部は欠損している。表裏刷毛目調整。22・23は口縁部である。22は口径22.6cm、頸部は18.2cm。23は口径19.5cm、頸部は15.4cm。24は頸部14.6cmを測る。25は大野川上流域の壺形土器の頸部である。7条の沈線が並行に施文されている。

26~31は高坏である。26は丸い体部に、やや屈曲しつつ長く伸びる口縁部が付く。表裏は赤色顔料が付着している。口径は26cmを測る。27は高坏の坏部である。表裏は赤色顔料が付着している。28~31は脚部片である。28は4箇所に穿孔が開く。29は外面と内部に赤色顔料を施す。30は外面に赤色顔料を施文する。31は表裏に赤色顔料を施文する。

32は丸底を呈する鉢形土器である。口径17.5cm、器高10cmを測る。表裏は刷毛目調整。33は口径11cm測る鉢形土器である。器壁は口縁部でやや肥厚し、口唇部でやや尖る傾向がある。

34~40は底部である。34は底径3.5cmの平底。35は底径2cm、36は底径2.2cmの底部が若干残っている。37~39はやや厚い丸底の底部である。40は底径6.6cmの平底である。

41、42は鉄器片である。41は手鎌である。半分は欠損している。端部は折り曲げている。現状の長さは4cm、幅は2.2cm、厚さ0.2cm、重さ6g。42は断面長方形の鉄器である。鉄鍍の基部であろうか。現状の長さは4cm、幅は0.8cm、厚さ0.6cm、重さ8g。

43~83は土器片加工品である。周辺部を磨き半月状に仕上げている。大きいもので長さ7.4cm、幅4.6cm、重さ27.6g。小さいもので長さ3cm、幅1.5cm、重さ2.9g。ちなみに、長さ7cm以上が1個、長さ6cm以上が4個、長さ5cm以上が9個、長さ4cm以上が14個、長さ3cm以上が12個、長さ2cm以上が1個である。

2号堅穴の時期は弥生時代後期末~古墳時代前期初頭にあたる。

3号堅穴（第71図）

調査区の南西部に位置する堅穴である。堅穴の平面プランは、東西7.3m、南北8.1mの隅丸長方形を呈し、南端コーナー付近では、段状になっている。西隅コーナーで7号堅穴を切り、東隅コーナーを12号堅穴で切られる関係にある。確認面から床面までは約50cmであり、中央部よりやや南方に長軸1.8m、短軸1.5m、深さ30cmの楕円状の炭化物炉が位置している。炭化物炉には傘大から傘大の川原礫が伴出している。主柱穴は中央部の1本と、2本を一對とした4対（8本）の主柱であり、北南の柱間にも主柱を設置している。床面近くの覆土内には土器片が少数散乱していた。

出土遺物（第72・73図）

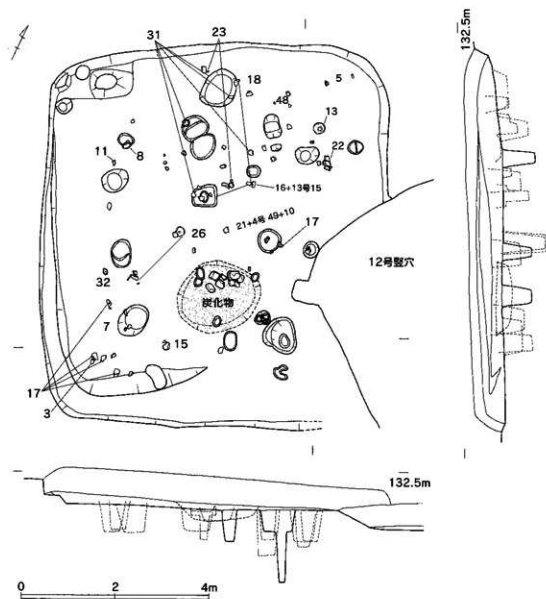
1は下城式土器である。壺形土器の口縁部であり、口縁下に刻み目突帯文が廻る。2は壺形土器の胴部である。胴部の最大径は14.4cmを測る。弧状の沈線文が二本単位で廻っている。

3~13は壺形土器の複合口縁部である。3は低い立ち上がり部に浮文を配し、垂れ気味な口辺には三角状の刻みが廻る。4は「コ」の字状に立上る口縁部に円形浮文を施す。口径20cmで口縁部には櫛播波状文が一条廻る。5はやや内傾斜状に立上るもので、粘土紐の巻き込みが顕著である。6は摘み上げたような口縁部であり、櫛播波状文が一条廻る。口径18cmを測る。7の垂れ気味な口縁部には、櫛播波状文が一条廻る。波底部には縦に5個の浮文が並び、中心筋を形成している。8・9は低い立ち上がりの複合口縁部である。櫛播波状文が一条廻る。8の口径は16.6cmを測り、頸部には断面三角突帯文を廻らせている。9の口径は17.5cmを測る。10・11

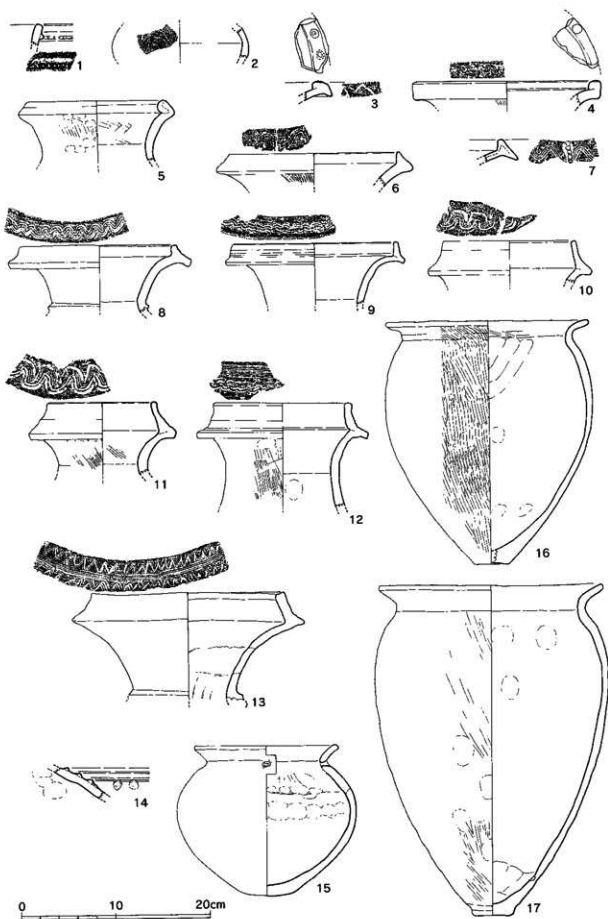
は立ち上りのやや高い一群である。うねりのある櫛溝波状文が一条廻る。10の口径は14cmを測る。11の口径は11.6cmを測る。12は口径14.6cmのJ縁部である。口縁の立ち上りはやや高く、櫛溝の直線文と波状文とが上、下に施文されている。13は口径20.4cmのJ縁部である。口縁の立ち上りはやや高く、櫛溝の直線文を真ん中に、波状文が上、下に施文されている。頸部には断向三角突帯文を廻らせている。14は壘形土器の胴部である。三条の断向三角突帯文と勾玉状の粘土を貼り付けている。

15は小形の壘形土器である。頸部で屈曲して短く折れる。頸部に穿孔が認識できる。口径15.2cm、器高15.8cm、胴部最大径は19cmを呈し、底部は丸底気味のレンズ状を呈する。

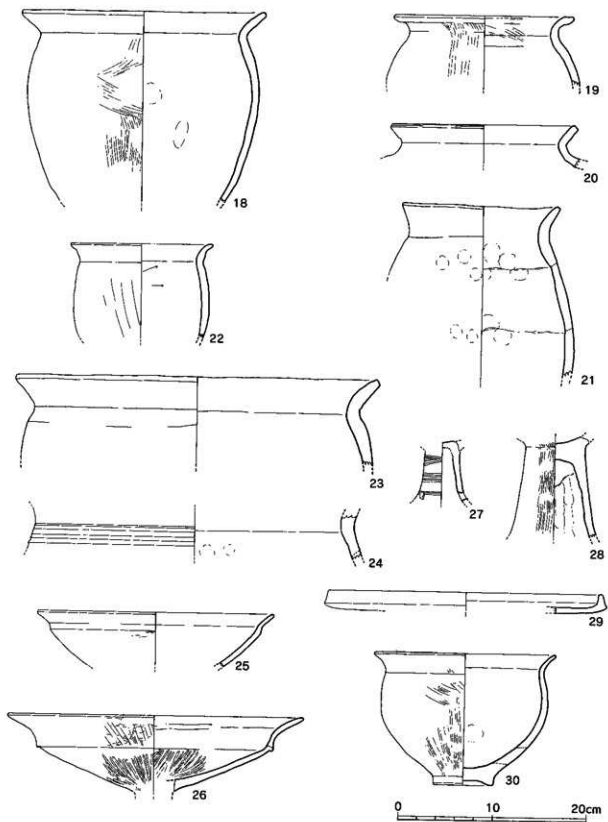
16~24は壘形土器である。16は口径部径21.4cm、頸部径18cm、胴部最大径22cmで、若干の上げ底気味の底部は3.8cmを呈する。口縁部で屈曲し、胴部上半で最大径となり、そのまま底部へ至る壘形土器である。表面は刷毛目痕、内面はナデ、指押さえ痕を残す。17は口径部径23.8cm、頸部径20cm、胴部最大径25cmで、底部は3.8cmを呈する。口縁部で屈曲し、胴部上半で最大径となり、そのまま底部へ至る壘形土器である。表面は刷毛目痕、内面はナデ、指押さえ痕を残す。18は口径部径26cm、頸部径22cm、胴部最大径24.7cmで、底部は欠損



第71図 高添遺跡石五道原地区2次調査区3号整穴実測図 (1/80)



第72図 高添遺跡石五道原地区2次調査区3号竖穴出土遺物実測図① (1/4)



第73图 高濂遗址石五道原地区2次調査区3号窖穴出土物実測图② (1/4)

している。口縁部で屈曲し、胴部上半で最大径となり、そのまま底部へ至る壺形土器である。表面は刷毛目痕、内面はナデ、指押さえ痕を残す。19は口縁部径19cm、頸部径15.7cmである。20は口縁部径19.8cm、頸部径17.5cmである。21・22の口縁部は緩く締まり、やや外反する。胴部は余り張らない壺である。表裏はナデ調整を施す。21は口径16.8cm、頸部径15cmを測り、胴部最大径は約20cmを呈する。22は口径15cm、頸部径13cmを測り、胴部最大径は約14.3cmを呈する。23、24はやや大型の器壁の厚い壺形土器である。表裏はナデ調整されている。23は口径38cm、頸部径34.5cmである。24は口縁部が欠損している。頸部径は33.8cmで、頸部下には並行に沈線文が施されている。

25～28は高坏である。25は坏部の上端で緩く屈折し、口縁部が短く延びるもので、口径25cmを測る。表裏はナデ調整を施す。26は坏部の中央部付近で段を持ち、緩く屈曲しつつ、口縁部が短く延びるもので、口径31.4cmを測る。坏身の表裏は寛磨きの調整である。

27、28は高坏の脚部である。27の脚上端部径は3.6cmで、脚の上、中、下部には沈線文が廻る。脚部下部の穿孔は3箇所に認められる。28の脚上端部径は約6cmで、表面は刷毛目調整。29は口径30cm、器高2.1cmを測る。高坏の坏身の部分であろうか。上、下を逆に解釈することも可能である。

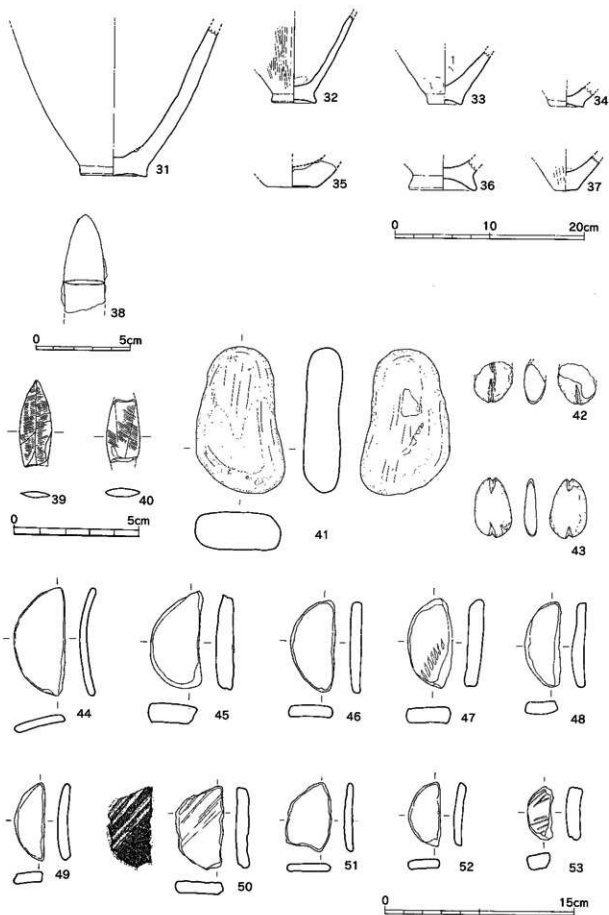
30は鉢形土器である。口縁部が緩く外反し、胴部の張らないもので、底部はやや上げ底を呈する。表面は刷毛目調整で内面はナデ調整を施す。口径19.2cm、頸部径16.8cm、胴部径17.6cm、底部径6.4cmを測る。31～37は底部の破片である。31～34は壺形土器の底部である。底部は心持ち上げ底を呈する。31は底径7cm、32は4.8cm、33は底径3.5cm、34は3.4cmを測る。35の壺形土器の底部径は2.4cmである。36は分厚い平底部である。底径5cmを測る。37は底径7.2cmを測り、底部中央で1.3cmも上がった上げ底である。

38は鉄鏝の先端部である。長さ5.2cm、幅2.2cm、厚さ0.2cm、重さ9.5gである。

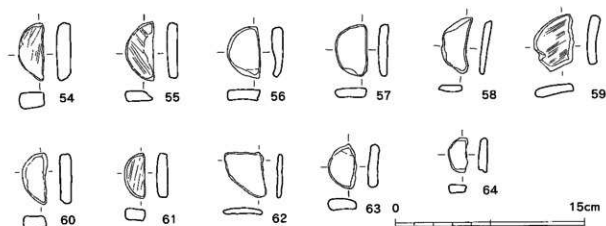
39～43は石器である。39は柳葉形の平基式の磨製石鏝である。石材は粘板岩製で、長さ3.4cm、幅1.3cm、厚さ0.25cm、重さ1.1gである。40は先端部と基部の欠損した粘板岩製の磨製石鏝である。長さ2.5+ α cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ1.4gである。41は砂岩製の磨石である。表裏と側面に磨った痕跡を残している。長さ11.5cm、幅7cm、厚さ3cm、重さ379.1gである。42、43は石錘である。42は有溝石錘で、長軸に沿って幅約0.35cmの溝が廻っている。溝の先端はずれたままである。長さ3.3cm、幅3cm、厚さ1.7cm、重さ18.8gである。43は切れ目石錘である。長軸中央の端部に幅約0.5cmで長さ約1～1.3cmの切れ目が入っている。長さ4.7cm、幅2.9cm、厚さ1cm、重さ17.8gである。

44～64は土器片加工品である。周辺部を磨き半月状に仕上げている。大きいもので長さ8.5cm、幅4cm、重さ24.1g。小さいもので長さ2.7cm、幅1.5cm、重さ3.4g。ちなみに、長さ8cm以上が1個、長さ7cm以上が3個、長さ6cm以上が3個、長さ5cm以上が2個、長さ4cm以上が8個、長さ3cm以上が3個、長さ2cm以上が1個である。59には弧状部の端にノッチが1箇所認められる。なお、50は縄文土器の再加加工品である。

3号壺穴の時期は弥生時代後期中葉にあたる。



第74图 高淳遗址石五道原地区2次调查区3号竖穴出土遗物实测图③ (1/4·1/2·2/3·1/3)



第75図 高添遺跡石五道原地区2次調査区3号壜穴出土遺物実測図④ (1/3)

4号壜穴 (第76図)

調査区の西端に位置する壜穴である。壜穴の平面プランは、東西6.2m、南北7mの隅丸長方形を呈し、北東端コーナー部付近では、段状になっている。6号壜穴に大きく重なるように位置している。確認面から床面までは約35～45cmであり、中央部付近に長軸3m、短軸1.4mの楕円状の焼土炉が位置し、やや北側にも長軸95cm、短軸65cmの楕円状の焼土炉が位置している。主柱穴は壜穴中央部の4本と、南側中央部の1本である。中央の焼土炉の南側には2本を一对とした補助柱穴が遺存している。補助柱穴と主柱間には炭化物炉の痕跡が2箇所に残っていた。壜穴内にはその他の柱穴があるが、この壜穴に伴うものか判然としない。北東部の床面近くの覆土内には土器片が少数散乱していた。

出土遺物 (第77・78図)

1～9は複合口縁の壜形土器片である。1、2の立ち上がりは低く短い。一条の溝描波状文が廻っている。2は口径9.6cmである。3の口縁部は断面が逆「く」の字状を呈し、2段の溝描波状文が廻っている。口径14cmである。4は口縁部の一部が欠損するが、2段の溝描波状文が廻っている。5～7は頸部片である。5の頸部径は10.2cmで、頸部突帯には斜めの刻み目が施文され、合流部で垂れている。6の頸部径は10.4cmで、頸部突帯には斜めの刻み目が施文されている。7の頸部径は16.8cmで、頸部突帯には矢羽根状の刻み目が施文されている。8は胴部の破片である。断面三角形の突帯が3条廻っている。9は丸底の底部である。器壁はやや厚く、内面の剥落は顕著である。

10は壜形土器の頸部から胴部の破片である。頸部径は20cmで胴部最大径は28.3cmを測る。11は壜形土器の頸部から肩部の破片である。赤色顔料を塗布している。

12～14は壜形土器の口縁部である。12は口径18.6cm、頸部径15.3cmで、やや誇張された胴部最大径は23cmである。表面は溝描波状文、内面はナデ調整である。13の口縁部は断面が「く」の字状を呈する。表面は刷毛目調整を施す。14は心持ち内湾する壜形土器の口縁部である。口径11.4cmを測る。

15～22は高坏の脚部である。15は脚部付け根付近で5cmを測り、脚部下半で屈折して開く。脚部の最大径は17.4cmで、屈折部には4箇所穿孔が開いている。表面は飽磨きの痕を残す。16は脚部付け根付近で4cmを測り、脚部はラッパ状に開く。脚部の最大径は14.6cmで、変化点付近には3箇所穿孔が開いている。表面は飽磨きの痕を残す。17は脚部付け根付近で4.6cmを測り、脚部下半で屈折して開く。表面は飽磨きの痕を残す。18～20も脚部付け根付近から、脚部はラッパ状に開く。表面はナデ調整。18は脚部付け根付近で4.7cm、19は4cm、20は7cmを測る。20には穿孔がある。21は脚部下半で屈折して開く。脚部の最大径は19cmである。22は高坏の脚部であろうか。屈折点には穿孔を施し、表面は丹塗りである。屈折点下には山形の連続文が廻っている。

23、24は丸底を呈する小形の鉢形土器である。23は口径9cmである。表裏はナデ調整で赤色顔料が施されて

いる。24は口径11.2cm、器高は6.4cmを測る。表面は刷毛目調整で内面はナガ、鈍磨きを施す。

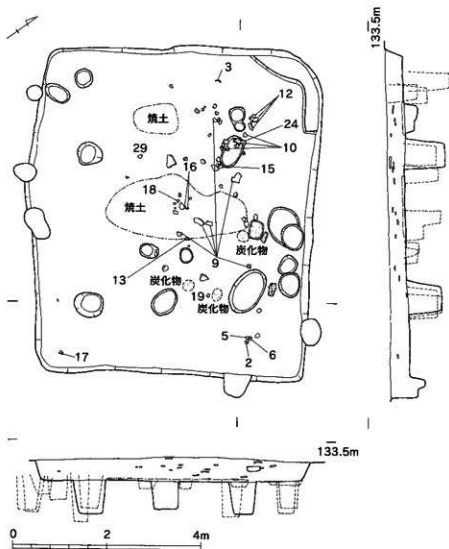
25、26は丸底底部、27～29は平底底部である。27は底径3cm、28は底径2.5cmを測る。29は底径5.7cmを測る上げ底気味の平底である。

30は磨石である。表裏面と4つの側面を使用している。長さ9.7cm、幅10cm、厚さ5.9cm、重さ914.6g。

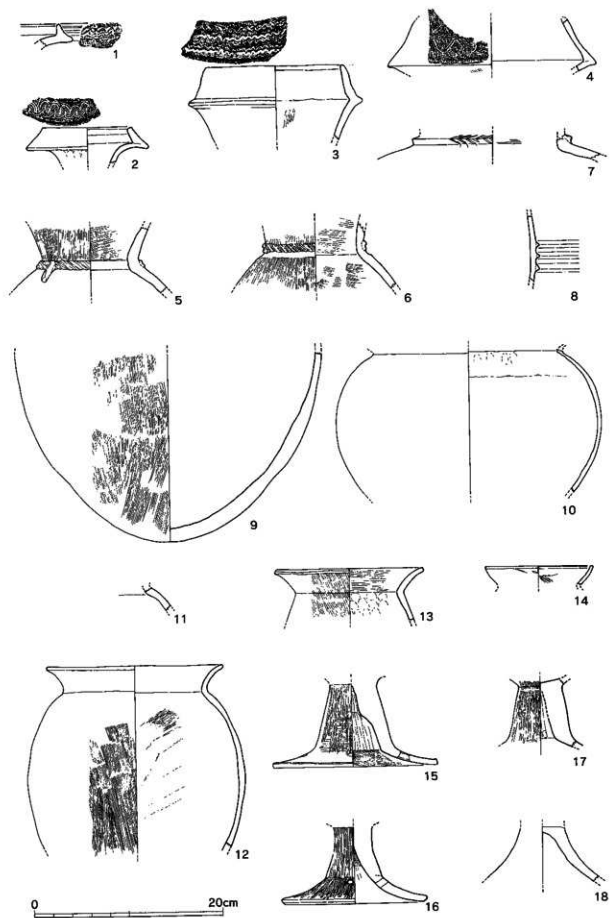
31は銅銭であろう。混入したものである。

32～35は土器片加工品である。33は円形を呈する。

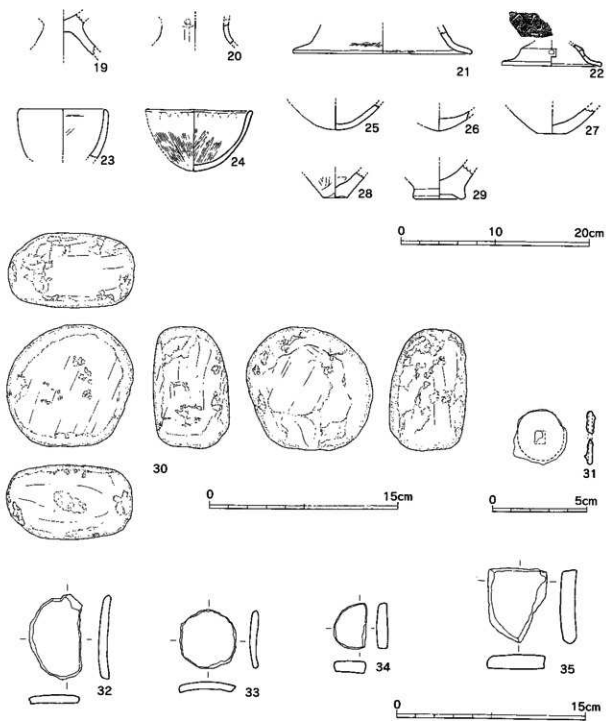
4号竪穴の時期は弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭にあたる。



第76図 高湊遺跡石五道原地区2次調査区4号竪穴実測図 (1/80)



第77图 高漆道跡石五道原地区2次調査区4号竖穴出土遺物実測図① (1/4)



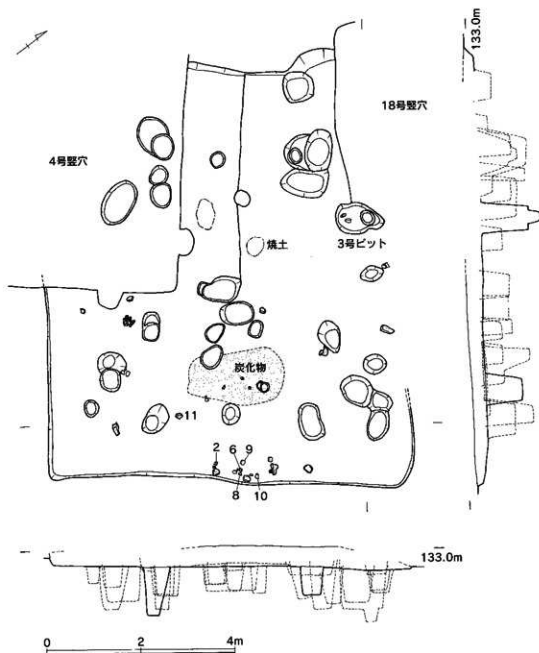
第78图 高濂遗址石五道原地区2次調査区4号竖穴出土遺物実測図② (1/4-1/3-1/2)

6号竪穴 (第79図)

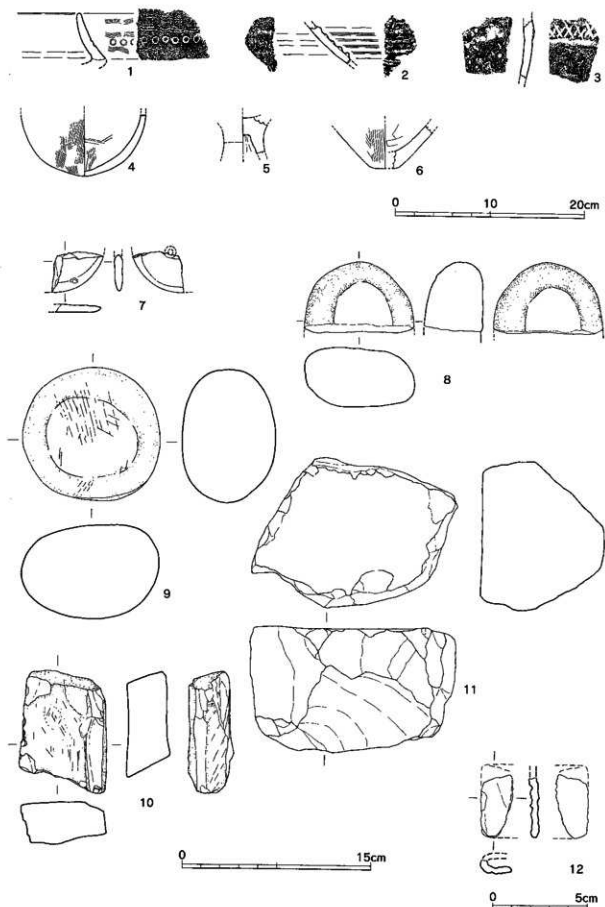
調査区の西端近くに位置する長方形プランの竪穴であるが、竪穴西北コーナーを4号竪穴、北東コーナーを18号竪穴に大きく切られる関係にある。竪穴の平面プランは、東西7.8m、南北8.8mを呈する。確認面から床面までは約20~25cmであり、中央部付近に長軸45cm、短軸35cmの楕円状の焼土炉が位置し、やや南側には長軸2.1m、短軸1.2mの楕円状の炭化物炉が位置している。主柱穴は竪穴中央部の4隅に位置する2本一対の8本主柱である。炭化物炉の北側には2本を一対とした補助柱穴が遺存している。竪穴内にはその他の柱穴が多数あるが、この竪穴に伴うものかどうかは判然としない。

出土遺物 (第80・81図)

1は複合口縁部の破片である。断面が逆「く」の字に立ち上がる面に、三条の櫛播波状文と円文とが施文され



第79図 高瀬遺跡石五道原地区2次調査区6号竪穴実測図 (1/80)



第80图 高漆道跡石五道原地区2次調査区6号竪穴出土遺物実測図①(1/4・1/3・1/2)

ている。2は複合口縁の壺の肩部である。五条の三角突帯が廻っている。

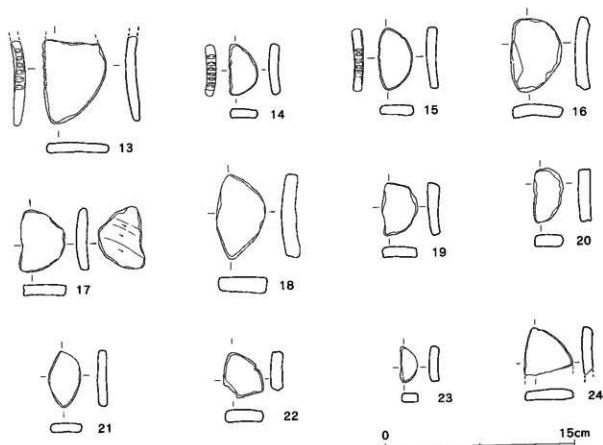
3は複合口縁の壺の胴部である。胴部の突帯上を「X」状に刻んでいる。4は丸底部である。表裏は刷毛目調整。5は高坏の脚部である。脚部径は4.1cm。6は菱形土器の底部である。底部径は2.8cmで表面は刷毛目、内面は板状工具によるナデ調整。

7は石包丁の破片である。縦3cm、横3.7cm、厚さ0.7cm、重さ10.1g。8・9は磨石である。8は半分欠損しているが、表裏に顕著な研磨痕が認められる。9は片面の中央部に磨り面がある。縦10.5cm、横10.9cm、厚さ7.4cm、重さ1.1kg。10は半分欠損した砥石である。表面と側面が使用されている。11は石皿の破片である。周辺部に敲打による面取り加工が残る。

12は鉄器である。手鎌の折り返し部分の破片である。縦3.15cm、横1.65cm、厚さ0.6cm、重さ3.6g。

13～24は半月状の土器片加工品である。13～15の弦に当たる中央部には6～7個所にノッチを入れ、鋸齒状に加工されている。22の弧に当たる端付近には一箇所ノッチが認められる。13・22・24番は半分程度欠損している。大きいもので長さ6.7cm、幅3.8cm、重さ33.7g。小さいもので長さ2.9cm、幅1.3cm、重さ3.3g。ちなみに、長さ6cm以上が2個、長さ5cm以上が1個、長さ4cm以上が6個、長さ3cm以上が2個、長さ2cm以上が1個である。

6号壜穴の時期は弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭にあたる。



第81図 高添遺跡石五道原地区2次調査区6号壜穴出土遺物実測図② (1/3)

7号堅穴

出土遺物 (第82・83図)

1～6は複合口縁壺の破片である。1は大きく開いた口縁部が短く立ち上がるもので、口径19.2cmを呈する。口縁部は指圧の痕跡が連続に廻る。2は口径15.2cmで立ち上がりも短く一条の櫛描波状文を施す。3の立ち上がりも短く、一条の櫛描波状文を施す。口唇部には刺突文が多数認められた。4は口径16.4cmで立ち上がりも短く内湾する。三本単位の一列の櫛描波状文を施す。口唇部には刺突文が多数認められた。5は頸部から肩部への破片である。頸部に断面三角形の一条の突帯と2本の粘七紐が飾られていた。6は胴部の破片である。胴部に二条の断面三角形の突帯が廻っている。胴部径は24cmを測る。7は直行口縁の壺形土器である。口径12.6cmで頸部径は10.3cmを呈する。頸部には一条の断面三角形の突帯が廻っている。

8～11は甕形土器である。口縁部断面は「く」の字状を呈し、胴部が若干張るものである。表面は刷毛目調整で内面は、刷毛目調整、ナデ調整、篋削り等が認められる。8は口径15.4cm、頸部径は12cm、胴部最大径は15cmである。9は口径11.8cm、頸部径は10.8cm、胴部最大径は14cmである。表面に赤色顔料が塗布されている。10は口径20.6cm、頸部径は18cm、胴部最大径は25.1cmである。11は口径20.6cm、頸部径は17.5cm、胴部最大径は22.3cmである。

12～15は表裏ナデ調整された甕形土器である。口縁部は弧状を描いて外反する一群である。12は口径23.6cm、頸部径は19.6cm、胴部最大径は22.6cmでありレンズ状の丸底を呈する。13は口径19cm、頸部径は14.4cm、胴部最大径は16.5cmである。14は口径14.6cm、頸部径は11.8cm、胴部最大径は14.4cmであり底部を欠損する。15は口径15.6cm、頸部径は11.9cm、胴部最大径は12.4cmであり裏りは無い。底部を欠損する。

16～18は小さな平底の甕形土器である。表裏は篋削り工具による、ナデ調整や篋削りの調整であり、特徴的な一群である。16は口径12cm、頸部径11cm、胴部最大径は14.6cm、底径4cm、器高は21.6cmを測る。17は底径2.4cmを測る。18は底径4cmを測り、やや上げ底である。

19は甕形土器である。緩く外反する口縁下に沈線が廻る。20は頸部に平行沈線と櫛描波状沈線が廻っている。

21・22・23は高坏である。21は高坏の坏部である。基底部近くに段を持ち、口縁部が緩く長く開くものである。口径は20.8cmである。表裏面は赤彩色。22は坏身の中央部に稜線を持つもので、表面は篋研磨、内面はナデ調整。口径30.2cmである。表面は赤彩色。23は高坏の脚部である。脚部の取り付け部径は4.4cmである。表面は篋の篋ナデ、内面は紋り。

24は鉢形土器である。口縁部は緩く折れ、口径25cm、頸部径21.9cmで、胴部は張らずにそのまま丸底底部へと至る。器高は13.7cmを測る。表面は縦刷毛、内面は横刷毛で、底部付近の表面は篋削りの痕跡を残している。

25は壺の底部である。26は甕の底部である。底径8.2cmでやや上げ底である。

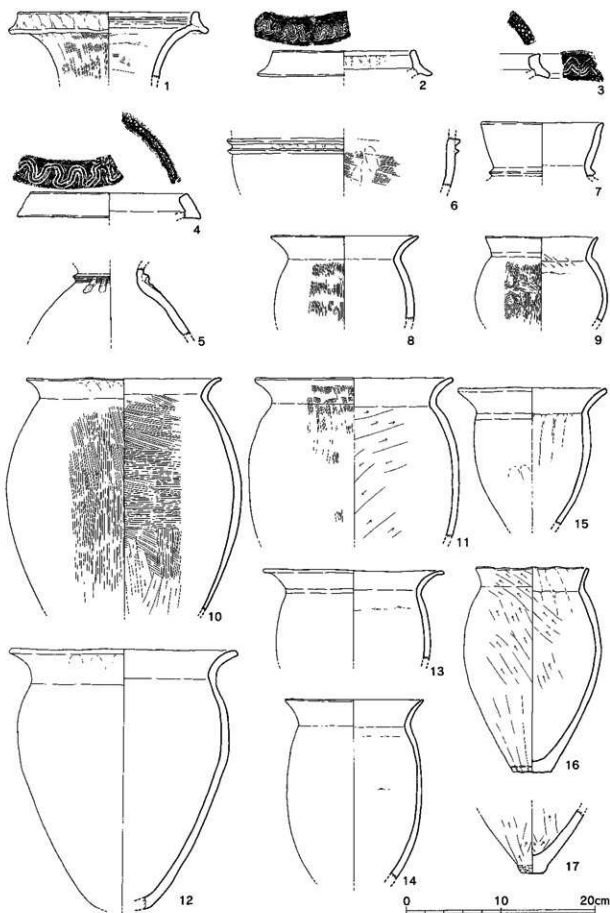
27～44は半月状の土器片加工品である。31・41・42の弦に当たる中央部には6～7個所にノッチを入れ、船筒状に加工されている。32の弧に当たる端付近には一箇所ノッチが認められる。35と37は弦の部分が土器の口縁部で全く加工を施していない。土器片加工品の用途や機能を考える上で留意できる。41～44は半分程度欠損している。これらは大いもので長さ8.3cm、幅6.5cm、重さ57.1g。小さいもので長さ2.5cm、幅1.9cm、重さ2.8g。ちなみに、長さ8cm以上が1個、長さ5cm以上が4個、長さ4cm以上が8個、長さ3cm以上が4個、長さ2cm以上が1個である。

45は鉄器である。長さ6.7+αcm、最大幅2cm、重さ13.8g。基部は断面が長方形で身部は片刃の様相を呈する。

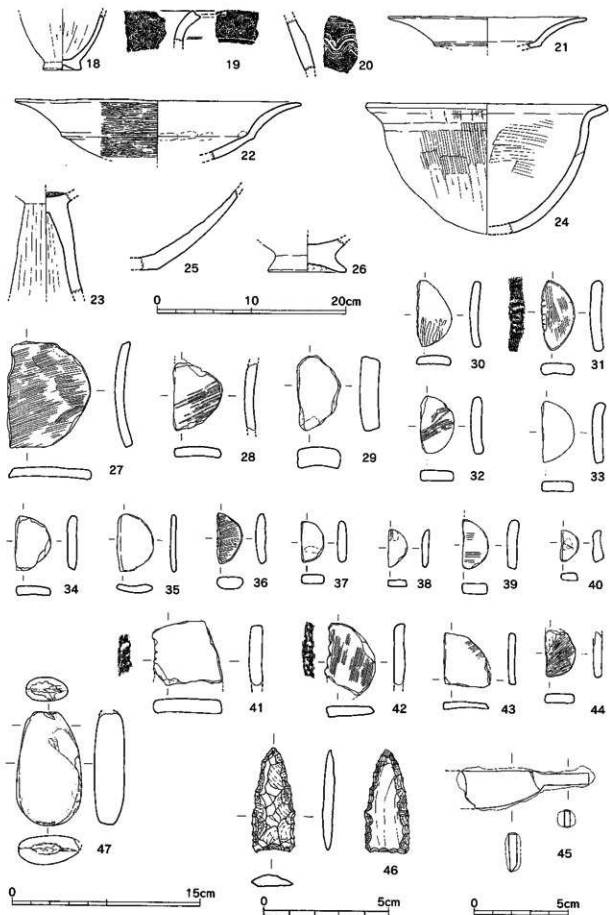
46は石鏃である。横長の剥片を利用し、周辺に細かな加工を施している。長さ4cm、最大幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ3.2g。基部は断面が長方形で身部は片刃の様相を呈する。石材はサマキト製。

47は礫石である。長さ8.9cm、最大幅5.1cm、厚さ2.3cmの卵状の石器である。両端には戴いた痕跡が顕著である。重さ152.5g。石材は粘板岩製。

7号堅穴出土遺物は弥生後期中葉～後葉にあたる。



第82图 高漆遗址石五道原地区2次调查区7号竖穴出土器物实例图① (1/4)



第83图 高添道跡石五道原地区2次調査区7号墜穴出土遺物実測図② (1/4-1/3-1/2)

8号竪穴 (第84図)

調査区の中央部やや西北端に位置する方形プランの竪穴であるが、竪穴の南東コーナーを残すのみで、7号竪穴と17号竪穴・21号竪穴に大きく切られる関係にある。竪穴の規模は判然としなが、東西約7m、南北約8m前後を呈する様相である。確認面から床面までは約20~25cmであり、中央部やや南側には長軸1.7m、短軸90cmの楕円状の炭化物炉が位置している。主柱穴は竪穴中央部の4隅に位置する4本主柱である。

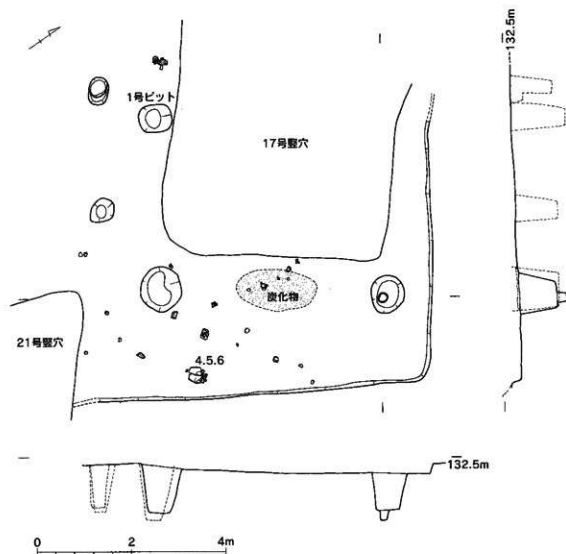
出土遺物 (第85図)

1~3は複合口縁部の破片である。1の外縁は素文であり、2は竹管状工具で上下2段の刺突文がある。3は2単位と7単位の櫛歯波状文が上下に廻る。4は複合口縁壺の胴部である。胴部中央の最大径は24cmである。口縁部から頸部と底部を欠損する。頸部は縁取りされて口縁部として再利用されている。現状の口径は13.3cmである。表面は刷毛目調整で内面はナデ調整。

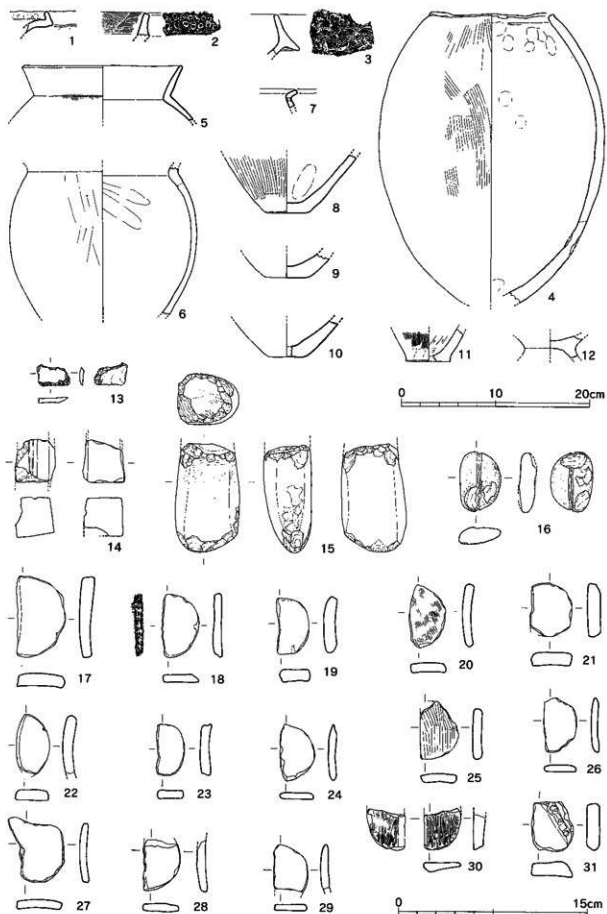
5は甕形土器の口縁部である。断面は「く」の字状を呈し、口径16.6cm、頸部径14.6cmを測る。6は胴部である。頸部径16cmを測る。表面は剝削りで内面はナデ調整。

7の口縁部は断面逆「L」字状を呈する。頸部には穿孔がある。表面は赤色顔料が塗布されている。

8~11は平底底部片である。8は底径4.4cm、9は底径4.4cm、10は底径3.8cm、11は4.8cm。12は高台付き



第84図 高浜遺跡石五道原地区2次調査区8号竪穴実測図 (1/80)



第85图 高添遺跡石五道原地区2次調査区8号竪穴出土遺物実測図(1/4・1/3)

の底部。

13は鉅島産黒曜石で一片は小さな加工を施す。14は方形の礫石である。4面を砥石として使用し、一面には半月状の溝が一条残っている。硅質泥岩製。15は砂岩製の磨製石斧である。基部と刃部を欠損している。欠損基部には敲打痕を多数残しており、楔のように使用されたものであろう。長さ8.5+αcm、最大幅4.9cm、厚さ3.8cm、重さ274.6g。16は有溝石錘である。長軸中央に「V」字状に彫られている。長さ4.7cm、最大幅3.2cm、厚さ1.2cm、重さ28.5g。粘板岩製。

17~31は半月状の土器片加工品である。18・28の弦に当たる中央部には6~7個所にノッチを入れ、鋸歯状に加工されている。22の弧に当たる端付近には一箇所ノッチが認められる。30は弦の部分が土器の口縁部で全く加工を施していない。土器片加工品の用途や機能を考える上で留意できる。28~31は半分程度欠損している。これらは大きいもので長さ6.3cm、幅3.8cm、重さ30.9g。ちなみに、長さ6cm以上が1個、長さ5cm以上が1個、長さ4cm以上が9個、長さ3cm以上が3個、長さ2cm以上が1個である。

8号竪穴は弥生後期後葉~古墳時代初頭に位置付けられる。

9号竪穴 (第86図)

調査区の北側壁面に大半がかかる竪穴である。竪穴の平面プランは方形であり、規模は判断できないが、東西5m、南北は調査区外にあたり不明である。確認面から床面までは約40cmであり、土器片がまとも出土している。

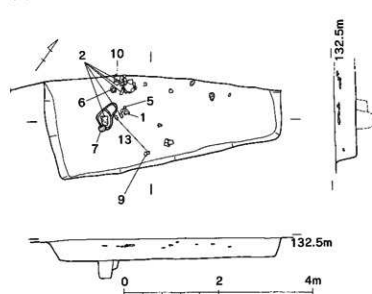
出土遺物 (第87図)

1は断面逆「く」の字に立ち上がる複合口縁部である。口縁の端部は欠損している。表面には構描波状文が施文されているが、鮮明ではない。頸部には断面三角形の突起が廻っている。

2~4は壺形土器の口縁である。2は断面「く」の字に立ち上がる壺で、口縁が内側に小さな段を設けている。胴部が球形に誇張される。底部は欠損している。表裏は刷毛目調整で内面下方向は椀の篋削りである。外面に煤が付着している。口径23cm、頸部径17.2cm、胴部最大径は28.4cmである。3は口径20cm、頸部径15.2cm。4は口径18.6cm、頸部径13.9cm。

5は高坏の坏部である。平坦な基底部から斜めに延びる口縁部である。口径18cmで脚部を欠損している。

6は小形丸底壺の体部である。頸部径は7.4cm、胴部最大径は12.4cmで底部丸底である。頸部で折れて、面取りがされており、欠損後も再利用した様相を呈する。

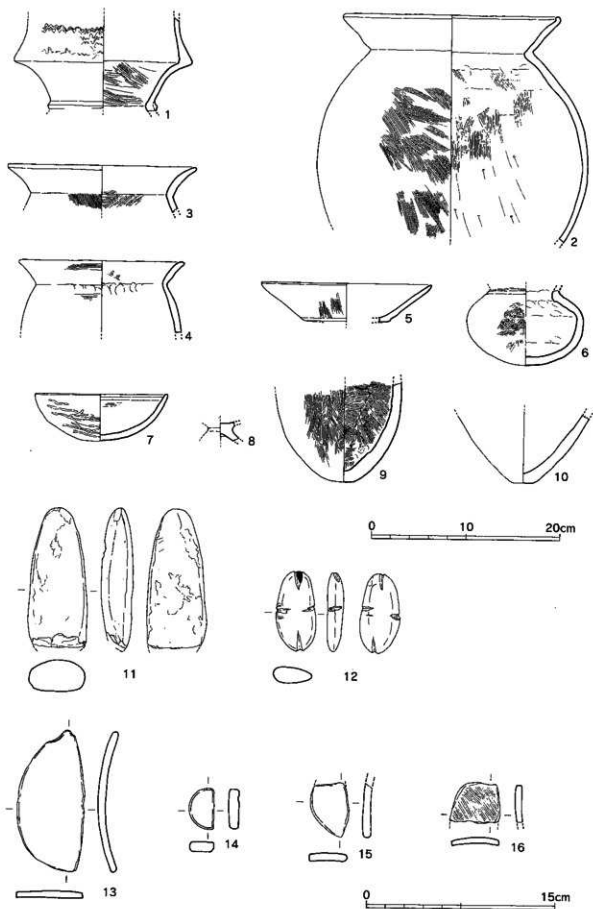


第86図 高湊遺跡石五道原地区2次調査区9号竪穴実測図 (1/80)

7は丸底の底部を持つ鉢形土器である。口径は14.1cm、器高は4.9cmである。表面は艶磨き、内面はナデ調整。8は台付き鉢であろうか。体部と脚部の境は径2.5cmを測る。

9、10は底部である。9は底径2.2cmであるが、丸底に近く、表裏に刷毛目痕跡。10は底径2.2cmであるが、丸底に近いものである。表裏にナデ調整。

11は蛇紋岩製の磨製石斧である。長さ11cm、幅4.8cm、厚さ2.4cm、重さ222.4gである。刃部は欠損している。12は切目石錘である。長軸、短軸の端部の中央に「V」字状の切



第87图 高添遺跡石五道原地区2次調査区9号竪穴出土遺物実測図 (1/4·1/3)

れ込みを入れている。長さ6.3cm、幅3.2cm、厚さ1.3cm、重さ36.64gである。

13~16は半月形を呈する土器片加工品である。13は長さ11.1cm、幅5.4cmで全周を研磨している。弦、弧の先端にノッチを施す。重さ40.3g。14は長さ3.2cm、幅2cmで全周を研磨している。重さ6g。15、16は半分欠損している。

9号竪穴の時期は古墳時代前期前葉にあたる。

10号竪穴 (第88図)

調査区の北側壁面に大半がかかる竪穴である。竪穴の平面プランは方形であり、南東コーナー部には約1m方形の張り出し部がある。規模は判断できないが、東西は張り出し部を含めて約5m、南北は調査区外にあたり不明である。確認面から床面までの深さは約2~15cmであり、南側の壁面近くには長軸1.3m、短軸1m、深さ20cmの土坑があり、上部に一抱えもある台石が位置している。土坑の北側には炭化物炉の一部が遺存していた。

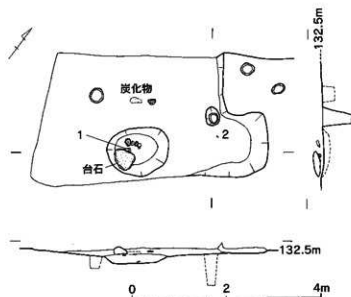
出土遺物 (第89図)

1は壺形土器である。口縁部は断面「く」の字状を呈し、胴部中央で最大径となる。底部は欠損している。口径14.2cm、頸部径11cm胴部最大径は16.5cmである。表面は刷毛目調整、内面は縦方向の笥削りやナデ調整。2は平底部である。底径4.6cmでやや上げ底を呈する。

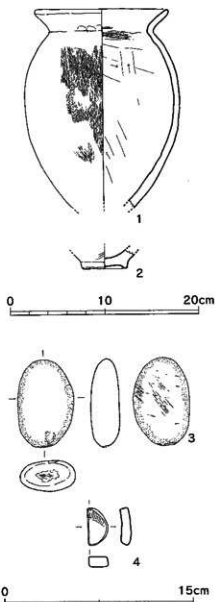
3は砂岩製の磨石・砥石である。拳大の楕円形の表裏を磨石とし、先端部は砥石として使用している。長さ6.9cm、幅4.4cm、厚さ2.3cm、重さ117gである。

4は半月形の土器片加工品である。長さ3cm、幅1.6cm、重さ4.5gである。

10号竪穴は弥生後期後葉にあたる。



第88図 高添遺跡石五道原地区2次調査区
10号竪穴実測図 (1/80)



第89図 高添遺跡石五道原地区2次調査区
10号竪穴出土遺物実測図 (1/4-1/3)

11号竪穴 (第90図)

調査区の中央部に位置し、東側の半分を欠損する竪穴である。竪穴の平面プランは、現状で東西5m、南北6.8mの長方形を呈する。竪穴の東西長を復元すると、西側に遺存する主柱から壁面までの約1.2mを追加した約6.2mである。確認面から床面までは約30cmであり、中央部よりやや南方に長軸1.6m、短軸1m、深さ約10cmの楕円状の炭化物炉が位置している。主柱穴は、竪穴四隅の2本を一对とした8本の主柱であり、炭化物炉の北側には2本で一对の補助柱穴が位置している。

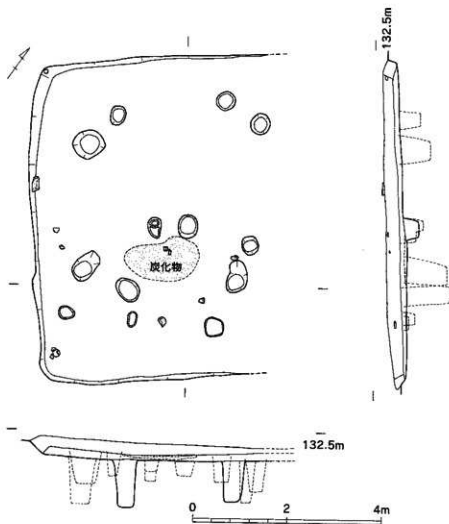
出土遺物 (第91図)

1は盃形土器の胴部片である。胴部に三条の断面三角突帯が廻る。2の胴部には細い沈線が複数弧状に施文されている。3、4は底部の破片である。3は底径4cmである。

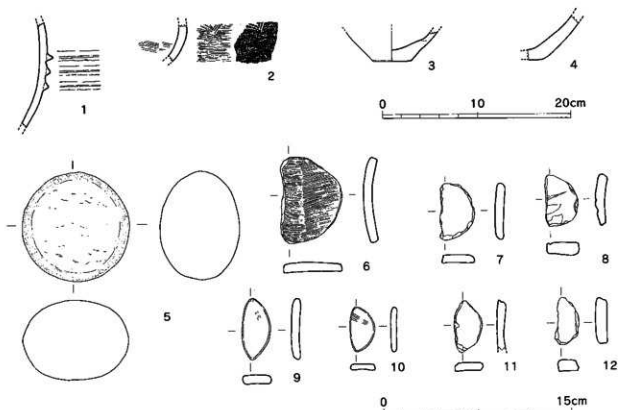
5は安山岩製の磨石である。拳大の楕円形の表面を磨石として使用している。長さ8.7cm、幅8.5cm、厚さ6.3cm、重さ656.4gである。

6-12は半月形を呈する土器片加工品である。大きいもので、6は長さ6.8cm、幅4.7cmで重さ31.8gである。小さいもので、10は長さ3.5cm、幅2cmで重さ4.5gである。

11号竪穴は弥生後期中葉～後葉にあたる。



第90図 高湊遺跡石五道原地区2次調査区11号竪穴実測図 (1/80)



第91図 高添遺跡石五道原地区2次調査区11号竪穴出土遺物実測図 (1/4・1/3)

12号竪穴 (第92図)

調査区の中央やや南西部に位置する竪穴である。竪穴の平面プランは、東西7.2m、南北9.5mの隅丸長方形を呈する。北西端コーナーで3号竪穴を切り、南西部コーナーは削除されている。東軸は13号竪穴に接する関係にある。確認面から床面までは約20~40cmであり、竪穴中央部に、長軸90cm、短軸60cmの赤褐色焼土炉が位置し、これよりやや南方に長軸1.6m、短軸1m、深さ数cmの楕円状の炭化物炉が位置している。主柱穴は北側、南側中央部の各1本と、左右に5本ずつの計12本の主柱を設置している。焼土炉と炭化物炉の間には2本の補助柱穴が位置している。

出土遺物 (第93図)

1~3は複合口縁釜の口縁である。1の立ち上がりは低く、外側に「ハ」の字状の連続文が廻っている。2、3の立ち上がりは低く、2の口縁外側に竹管状の刺突文が等間隔に廻っている。また、3の口縁外側には一条の櫛描波状文の連続文が廻っている。4~6は頸部から肩部の破片である。4、5は1~2条の頸部突帯下に勾玉状の粘土紐が廻る。6は1条の頸部突帯下に櫛描波状文の連続文が廻る。7は細い重弧文が認められる。

8は口縁部と底部を欠損した小形の甕形土器である。頸部に一条の突帯が廻り、胴部は球形に誇張され、底部はやや上げ底気味の平底である。表裏ナデ調整。頸部径8.2cm、胴部最大径16.6cm、底部径8cmを測る。3号竪穴出土遺物と接合している。中期の土器である。

9は甕形土器である。底部は大きく欠損し、表裏は匏ナデ調整。口径14.1cm、頸部径11.1cm、胴部最大径14.2cmである。10の甕形土器は頸部から胴部に至るものである。三本の平行沈線と二条の櫛描波状文が廻っている。11、12は高坏の胴部である。11は縦方向の磨き跡の痕跡。13~16は心持ち上げ底の平底部である。13は底径3.5cm、14は底径4.2cm、15は底径6.7cm、16は底径5.5cm。

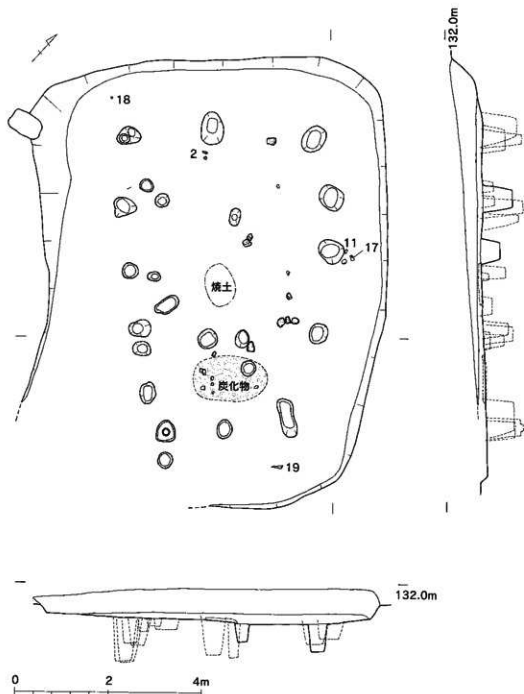
17・18は石鏃である。17は結晶片岩製の平基式石鏃である。長さ3.6cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm、重さ3.1gで

ある。18は凸基式石鏃である。長さ5.1cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ4.5gである。19は粘板岩製の砥石である。平面と両側面部も使用している。

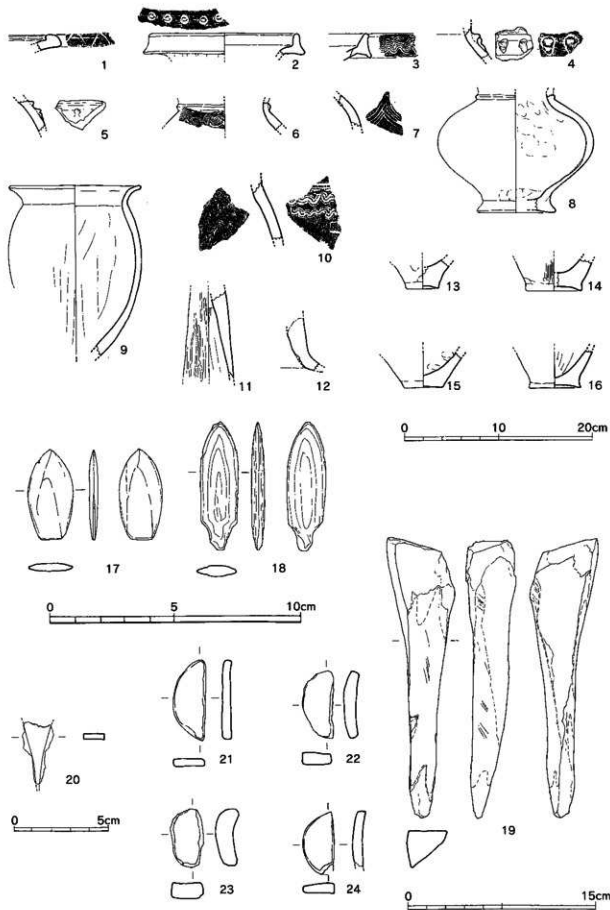
20は鉄器である。鉄鏃の基部である。

21～24は半月形の土器片加工品である。

12号竪穴は弥生後期前葉～中葉にあたる。



第92図 高津遺跡石五道原地区2次調査区12号竪穴実測図 (1/80)



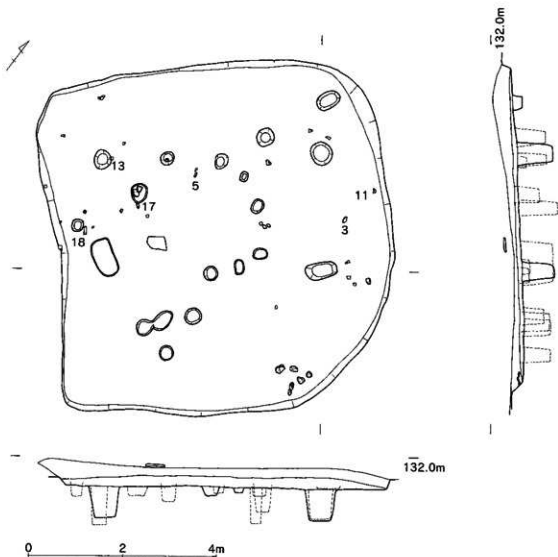
第93图 高添道跡石五道原地区2次調査区12号整穴出土遺物実測図 (1/4・2/3・1/3)

13号竪穴 (第94図)

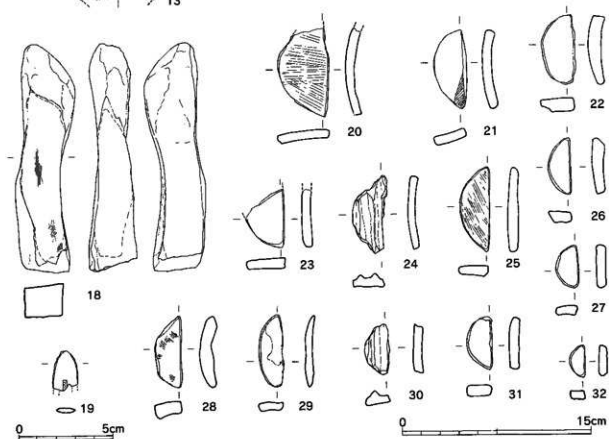
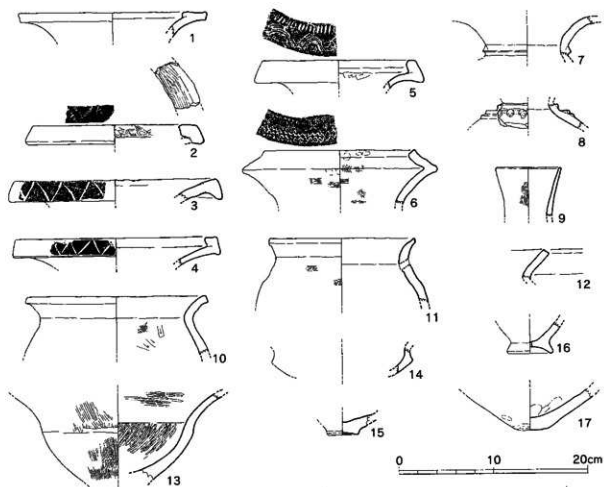
調査区の中央部に位置する隅丸でやや扁張りの竪穴である。竪穴の平面プランは、東西7.1m、南北7.4mを呈し、円形に近い隅丸方形である。西側は12号竪穴に接する関係にある。確認面から床面までは約15~30cmである。竪穴の主柱穴は判らないが、竪穴中央部付近には、径30cm前後の柱穴が円形状に位置していた。やや南東部には拳大の礫が遺存していた。

出土遺物 (第95図)

1の口縁部は肥厚し、丸みを持った鋤先状の口縁部である。円形の浮文がつく。外口径は20cmである。2は肥厚した口縁部で、口縁外側には施文原体の端部を当てて連続三角文を施文している。3の肥厚口縁部の端、鋤角状の連続山形文が廻っている。口径は21.3cmである。4~6は複合口縁部の壺形土器である。内傾気味で立ち上がりが低い。4の肥厚口縁部の外側には、鋤角状の連続山形文が廻っている。外口径は21.4cmである。5の口唇部には連続刻み目文、外側には櫛描波状文が廻っている。外口径は16cmである。6の口縁外側の上段には等間隔の原体端部の刻み目痕があり、下段には一条の櫛描波状文が廻っている。外口径は16cmである。7は壺形土器の頸部片である。頸部径は8.6cmで一条の突帯が廻っている。8は壺形土器の頸部~胴部の破片である。二本の突帯と勾玉状浮文を貼り付けている。9は直口鉢蓋の口縁部である。口径7cm。



第94図 高浜遺跡石玉浦原地区2次調査区13号竪穴実測図 (1/80)



第95图 高添酒跡石五道原地区2次調査区13号竖穴出土遺物実測図 (1/4-1/3-1/2)

10～12は壺形土器の口縁部である。表裏の刷毛目文はナデ消されている。10は口径19cm、頸部径16.3cm。11は口径15.4cm、頸部径14.1cmを測る。

13は高坏の坏部である。深い基底部から斜めに立ち上がった体部は中央部で屈曲し外反口縁部へと延びる。表面は刷毛目調整で内面は横、斜めの宛磨き調整。表裏面には赤色顔料が塗布されている。14は坏部の一部であろうか。

15～17は底部である。15、16は上げ底である。15は底径3.4cm、16は底径4.8cm、17はいわゆるレンズ状を呈し底径3.4cmを測る。

18は粘板岩製の研ぎ面が2面の砥石である。断面中央部は方形を呈する。長さ18cm、幅3.6cm、厚さ2.5cm、重さ395.3g。

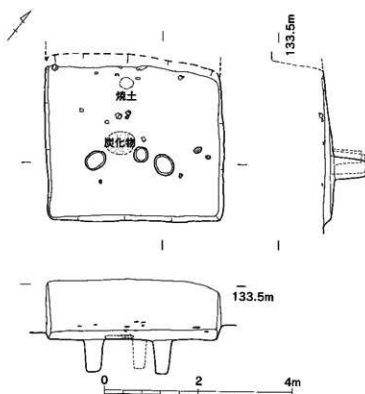
19は鉄鏝である。無冪三角形で鏝身部中央に根挟みの木質が残存している。逆刺は欠損している。長さ3.2cm、幅2cm、厚さ0.4cm、重さ3.6g。

20～32は半月状の七器片加工品である。24、30の表面には断面三角突帯が貼りついている。23は半分程度欠損している。27は弦の部分口縁部である。この場合は弦にあたる部分は全く加工していないのが特徴である。用途を推察するうえで極めて興味深い。大きいもので長さ6.9cm、幅4.1cm、重さ27g。小さいもので長さ2.5cm、幅1.3cm、重さ2.7g。ちなみに、長さ6cm以上が4個、長さ5cm以上が3個、長さ4cm以上が4個、長さ3cm以上が1個、長さ2cm以上が1個である。

13号竪穴は弥生後期前葉～後葉にあたる。

14号竪穴 (第96図)

14号竪穴は、調査区の北壁に一部がかかる長方形の竪穴である。竪穴の平面プランは、東西3.8m、南北3.3m + a の方形を呈する。竪穴中央北部に径30cmの焼土炉、やや南に長軸60cm、短軸50cm、深さ数cmの楕円状の炭化物炉が位置している。確認面から竪穴床面までは約20cmである。竪穴主柱の数は判らないが、南側には2



第96図 高添遺跡石五道原地区2次調査区14号竪穴実測図 (1/80)

本の柱穴がある。

壑穴は調査区の壁にかかっており、壑穴の掘り込み面を検討すると、少なくとも、検出できた面より壑穴床面までは1.2mの深さがあることが判明した。

出土遺物 (第97図)

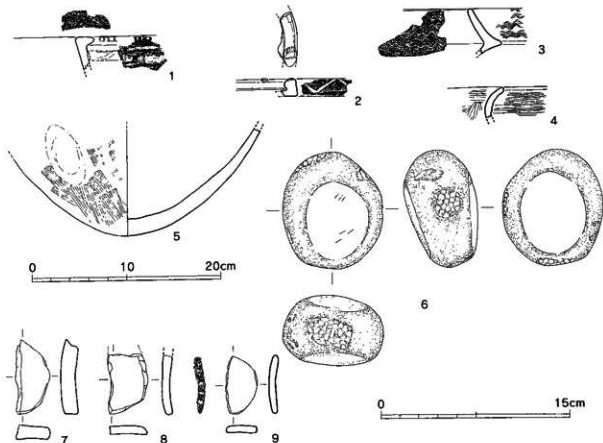
1の肥厚した口縁を横に押し広げ、口唇を幅広く仕上げた亀の甲式と呼ばれる一群であろう。口唇端部に刻み目を施し、口縁下部に突帯を施文する。2の立ち上がりは低く、口唇に刻み目の入った浮文、外側には露歯状の連続三角文が施文されている。3は複合口縁部である。三条の歯播波状文が廻っている。

4は壺形土器の段をもつ口縁部である。表裏に横ナデ後の磨きが認められる。5は丸底の壺の底部である。

6は川原礫を使用した磨石・敲石である。表表面は磨石、側面は敲石の痕跡が複数認められる。長さ9.2cm、幅8cm、厚さ5.6cm、重さ618.6g。

7～9は半月形の土器片加工品である。8は半分欠損している。9の弦部には鋸歯状のノッチが4箇所認められる。

14号壑穴は弥生後期後葉～終末にあたる。



第97図 高添遺跡石五道原地区2次調査区14号壑穴出土遺物実測図 (1・4・1/3)

15号壑穴 (第98図)

調査区の中央部に位置するやや小形で両側にベッド状遺構のある長方形の壑穴である。壑穴の平面プランは、東西5.9m、南北4.2mの長方形を呈する。東西5.9mの内、西側に90cm幅、東側に60cm幅のベッド状の高まりがあり、中央部の一段低い部分は4.4m幅である。確認面からベッド状遺構床面までは約5～25cmであり、壑穴床面までは約50cmである。中央部に長軸1.6m、短軸90m、深さ数cmの楕円状の炭化物炉が位置している。主柱穴

は炭化物炉を挟む中央部の2本である。竪穴の南側には同じ2本支柱の16号竪穴が位置している。

出土遺物 (第99・100図)

1～5は壺形土器の口縁部である。1は鋸先状に近い形態を呈する。2は低く立ち上がる口縁部の口唇に円形浮文を施し、外縁には鋸齒状の連続山形文が廻っている。3は分厚い口縁部の外縁に鋸齒状の連続山形文が廻っている。4は口縁部の外縁に一条の櫛描波状文が廻っている。5の口唇部には斜め刻み日文と円形浮文が廻り、口縁部の外縁に一条の櫛描波状文が廻っている。

6、7、8は甕形土器であり、6は口径17.2cm。7は口径27.4cmを測る。8は頸部の破片であり、沈線は5～6条の並行線が廻る。

9は高坏の脚部である。脚部径は5cmを測り、表面は縦方向の荒磨き、内面に指頭痕跡やナア調整を施す。

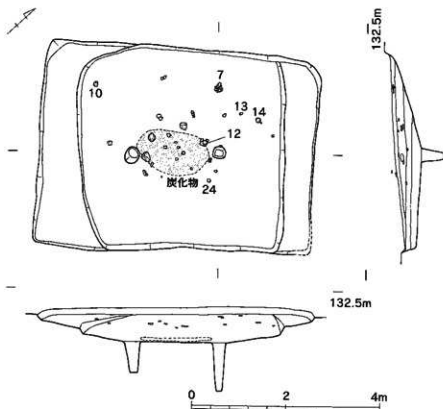
10～12は平底部である。何れも心持ち上げ底状呈する。10は底径5.2cm、11は底径6.8cm、12は底径5.8cmを測る。

13は粘板岩製の砥石である。表裏と一側面を使用している。長さ9.2cm、幅3.3cm、厚さ1.3～1.6cm、重さ86.1g。

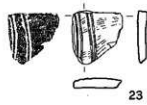
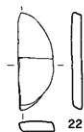
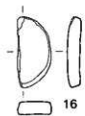
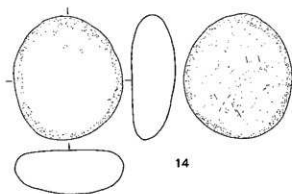
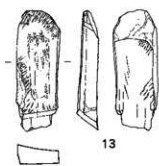
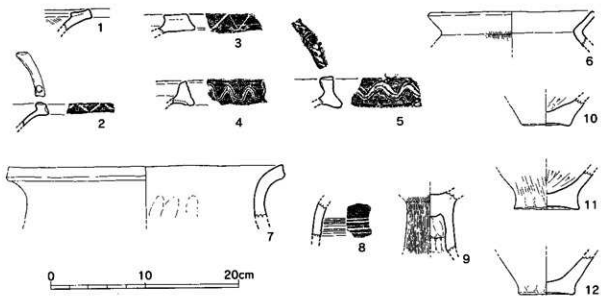
14・24は拳大の川原円礫を使用した磨石である。表裏に磨面がある。14は長さ9.8cm、幅8.6cm、厚さ3.4cm、重さ435.8g。砂岩製。24は長さ10.9cm、幅9.5cm、厚さ6.2cm、重さ963.9g。

15～23は半月状の土器片加工品である。15は弧の端に1箇所ノッチがある。23の表面には竹管状の平行沈線が施された土器の再利用である。21・23は半分程度欠損している。大きいもので長さ7.7cm、幅2.8cm、重さ22.3g。小さいもので長さ3.7cm、幅1.1cm、重さ3.5g。ちなみに、長さ7cm以上が1個、長さ6cm以上が1個、長さ5cm以上が2個、長さ4cm以上が3個、長さ3cm以上が2個である。

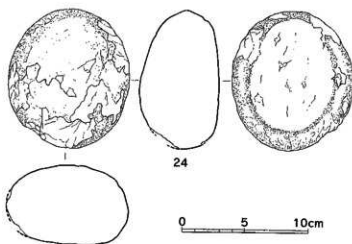
15号竪穴は弥生後期中葉にあたる。



第98図 高浜遺跡石五道原地区2次調査区15号竪穴実測図 (1/80)



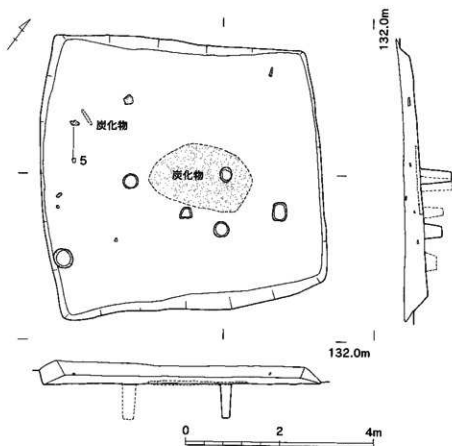
第99图 高漆遺跡石玉道原地区2次調査区15号壑穴出土物実測図① (1/4-1/3)



第100図 高浄遺跡石五道原地区2次調査区
15号竪穴出土遺物実測図② (1/3)

16号竪穴 (第101図)

調査区の中央部に位置するやや胴張りの台形状の竪穴である。竪穴の平面プランは、東西6m、南北6mと5mの台形状の長方形を呈する。確認面から床面までは約5~30cmであり、中央部に長軸2.2m、短軸1.3m、深さ



第101図 高浄遺跡石五道原地区2次調査区16号竪穴実測図 (1/80)

数cmの楕円状の炭化物が位置している。支柱穴は炭化物を挟む中央部の2本である。竪穴の北側には同じ2本支柱の15号竪穴が位置している。

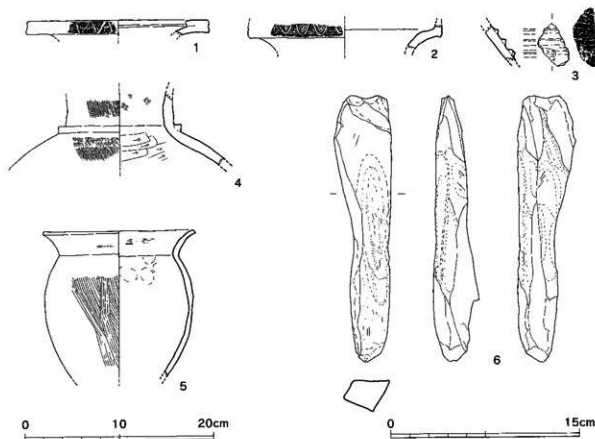
出土遺物 (第102図)

1～4は壺形土器の破片である。1は外口径が19.2cmを呈する。肥厚した口縁部である。口縁外面は鋸歯状の沈線が廻っている。2は複合口縁部である。口縁外面は柳捲波状文が廻っている。3は頸部～肩部に至る破片である。断面三角突起が3条廻っている。4は蓋の頸部である。頸部径11.4cmを測り、一条の断面三角突起帯が廻る。表面は刷毛目、内面は剝削りの痕跡を残す。

5は壺形土器である。口径15.7cm、頸部径12.7cm、胴部最大径15.8cmを測る。表面は刷毛目調整、内面はナデ調整を施す。

6は粘板岩製の砥石である。三面が研ぎ面である。長さ21.1cm、幅4.6cm、厚さ2.5cm、重さ233.8g。

16号竪穴は弥生時代後期後葉～終末であろう。



第102図 高湊遺跡石五道原地区2次調査区16号竪穴出土遺物実測図 (1/4・1/3)

17号竪穴 (第103図)

17号竪穴は、調査区の北壁に一部がかかる長方形の竪穴である。8号竪穴の真上に重なるように位置し、これを切る関係にある。竪穴の平面プランは、東西4.8m、南北4.9mの長方形を呈する。竪穴中央部には4本の主柱があり、竪穴中央部に長軸70m、短軸50m、の焼土炉、やや南に長軸1.2m、短軸70m、深さ数cmの楕円状の炭化物炉が位置している。確認面から竪穴床面までは約20cmである。竪穴中央部の床面は、周辺部よりやや高い。

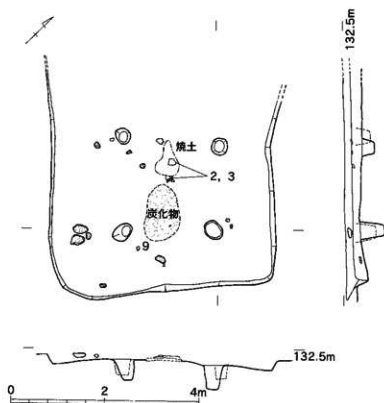
出土遺物 (第104図)

1は立ち上がりの低い、肥厚した口縁部である。外面には鋸歯状の連続山形文が廻っている。2・3は同一個体である。複合口縁部は大きく外反して立ち上がり、頸部は長く、肩部に一条の斜め刻み目突帯が廻っている。口径は18.4cmで頸部は10.2cmを測る。表面は刷毛目調整で内面はナデ調整を施す。4は胴部に幅広い帯状突帯を設け、斜め格子目文で刻んでいる。5・6は同一個体である。壺形土器の頸部～肩部、胴部の破片である。7は外に大きく開く複合口縁部である。

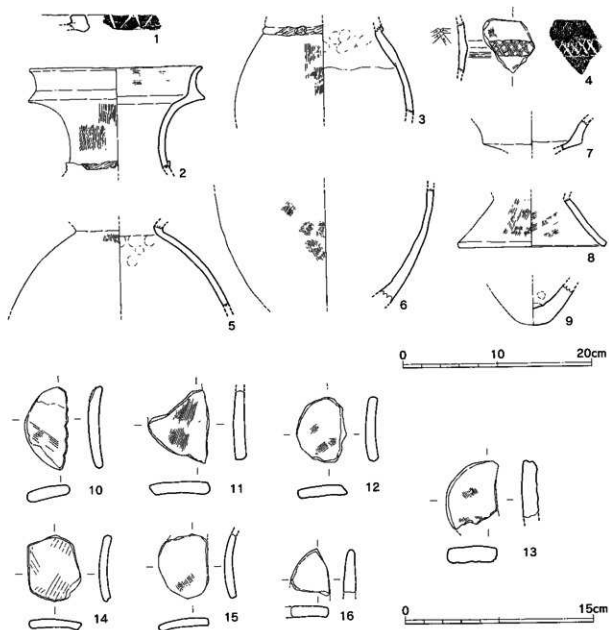
8は高坏の脚である。脚部径は15.8cm。9は底径2.5cmの丸底である。

10～16は土器片加工品である。10は弦の部分が鋸歯状のノッチがある。11・13・16は欠損している。

17号竪穴は弥生時代後期末～古墳時代前期に相当する。



第103図 高浄遺跡石五道原地区2次調査区17号竪穴実測図 (1/80)



第104図 高添遺跡石玉道原地区2次調査区17号竪穴出土遺物実測図 (1/4・1/3)

18号竪穴 (第105図)

18号竪穴は、調査区の北壁近くにある長方形プランの竪穴である。6号竪穴や8号竪穴に重なるように位置している。竪穴の平面プランは、東西4.9m、南北4.3mの長方形を呈する。竪穴には4本の主柱があり、南壁を除く三方の壁には壁溝が廻って入る。竪穴の中央部には、径10~20cmの焼土が2個所にある。竪穴南壁近くの中央部、柱穴間には、長軸1.5m、短軸90cm、深さ30cmの土坑が位置し、土坑の上には長軸1.2m、短軸90cm、深さ数cmの楕円状の炭化物炉が位置している。炭化物炉の上には一抱えもある石皿が位置していた。竪穴の覆土中には土器片があるまとまりを持って出土している。

出土遺物 (第106・107図)

1は肥大した口縁部には円形浮文と鋸歯状の山形文が廻っている。2は外縁に一条の櫛播波状文が廻っている。3は立ち上りの長い複合口縁である。外縁に三条の櫛播波状文が廻っている。4・5は壺形土器の体部である。4の帯状突帯には施文原体状工具で斜めの刻み目を残している。5は球形に誇張された体部である。胴部最大径

は中央部にあり29.6cmである。貼り付け突帯は中央部よりやや上部に位置している。貼り付け突帯には「×」状がやや退化変質した状態の刻みが施文されている。底部は丸底で器壁の薄いものである。

6～10は壺形土器である。6は口径20.3cm、頸部径15.5cmを測り、胴部があまり張らない壺である。7～10の口縁部は断面「く」の字に大きく外反し、胴部が球形に誇張されるものである。7は口径14.8cm、頸部径10.5cmを測る。8は口径17.7cm、頸部径13.9cmを測る。9は口径14.6cm、頸部径10.6cm、胴部最大径19.7を測る。10は口径15.3cm、頸部径11.3cm、胴部最大径21.3を測る。

11は丸底の鉢である。12・13は脚部である。脚付き鉢の脚部であろう。13は脚径10.5cmである。14は平底の底部である。内側に赤色顔料の塗布あり。15は底径1.9cmの底部である。

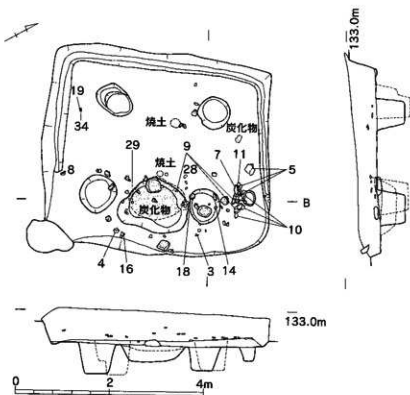
16は表裏研磨した結晶片岩製の平基式石鏝である。長さ19.5cm、幅13.5cm、厚さ1.5cm、重さ0.6g。

17は粘板岩製の削器である。片面から細かな加工が施されている。刃部は弓なり状になっており、刃には鋭利さはない。刃部を持つ表面には、使用痕跡を示す擦痕が幾条も確認できる。現長11.4cm、幅6.8cm、厚さ1.7cm、重さ197g。18は円礫の磨石である。表裏面は磨面であり、側縁は敲打面である。

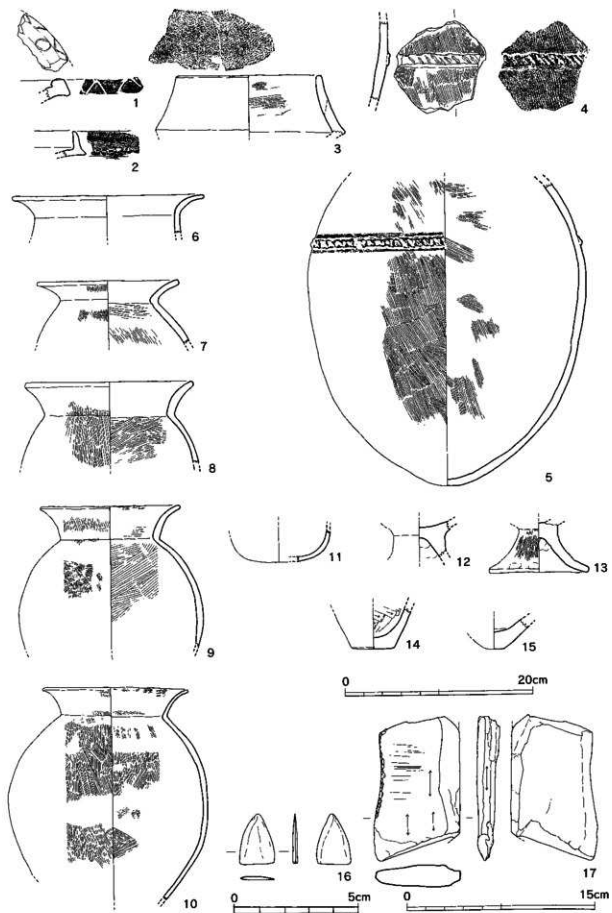
19は滑石に類似した石材製の勾玉である。長さ1.9cm、厚さ0.45cm、重さ1.7g。

20～45は半月状の上器片加工品である。37・39・41・43は弧の端に1箇所ノッチがある。26・37・38の弦には鋸歯状のノッチが4～5施された土器である。大きいもので長さ7.3cm、幅9.3cm、重さ47.7g。小さいもので長さ3cm、幅1.7cm、重さ2.8g。ちなみに、長さ7cm以上が2個、長さ6cm以上が1個、長さ5cm以上が4個、長さ4cm以上が8個、長さ3cm以上が11個である。

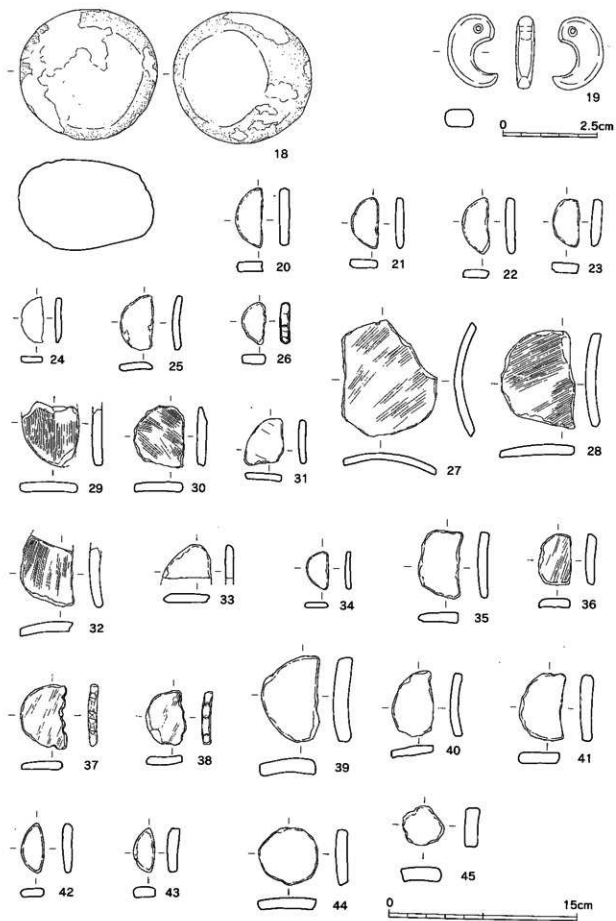
18号整穴は古墳時代前期前葉に相当する。



第105図 高添遺跡石五道原地区2次調査区18号整穴実測図 (1/80)



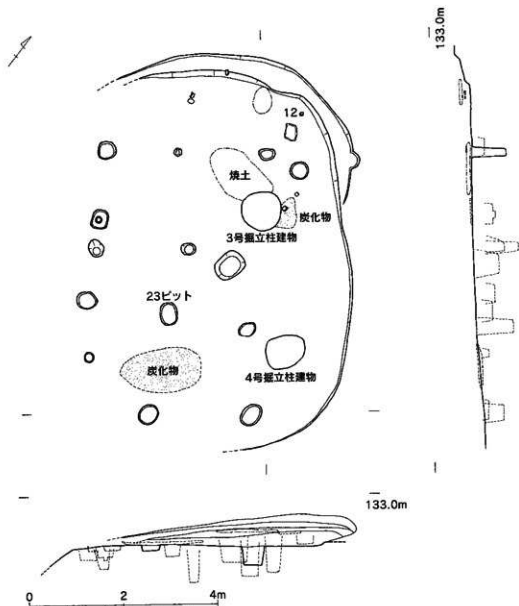
第106图 高濂遗址石五道原地区2次调查区18号竖穴出土遗物实测图① (1/4-1/3)



第107图 高添遗址石五道原地区2次调查区18号窑穴出土遗物实测图② (1/1·1/3)

19号竪穴 (第108図)

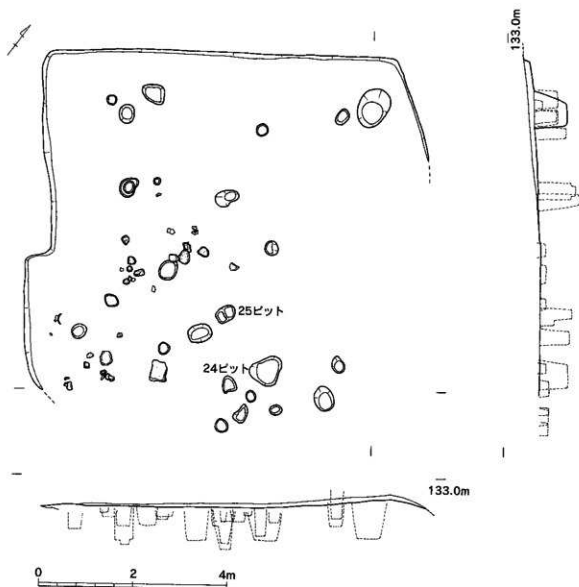
19号竪穴は、調査区の東端近くにある小判形の竪穴である。竪穴北壁は2段になっており、西半分は大きく欠損している。竪穴の規模は、東西6～7m、南北8.4mを呈する。竪穴の主柱は判然としませんが、やや深い中央部の一本と、壁面近くに位置する複数の柱穴がこれに伴うものである。竪穴の中央部のやや北側には、長軸1.5m、短軸85cmと長軸60cm、短軸40cmの焼土が2個所にある。また、竪穴南壁近くの中央部には、長軸1.8m、短軸95cm、深さ数cmの楕円状の炭化物炉が位置している。19号竪穴は3号、4号掘立柱建物と切り合い関係にある。



第108図 高添遺跡石五道原地区2次調査区19号竪穴実測図 (1/80)

20号竪穴 (第109図)

20号竪穴は、調査区の東端近くにある方形の竪穴である。竪穴は南壁、東壁を大きく欠損している。竪穴の規模は、東西約8m、南北約8.5mを呈する。西壁の一部には50cmほどの張出部がある。竪穴の主柱は判然としな
いが、竪穴内に位置する複数の柱穴がこれに伴うものであろうか。



第109図 高添遺跡石五道原地区2次調査区20号竪穴実測図 (1/80)

19・20号竪穴出土遺物 (第110図)

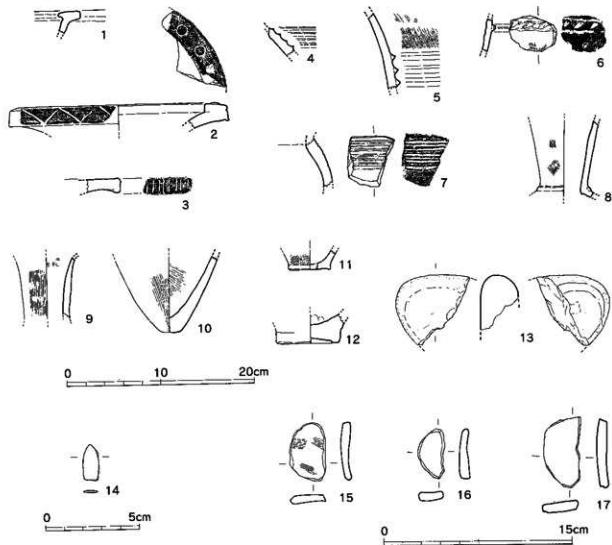
1～5は壺形土器の破片である。1は鋤先状を呈する壺の口縁部である。2は肥厚した口縁部で上面に凹形の浮文、側面に山形状の連続文が施文されている。3は縦に刻む線刻列がある。4・5・6は胴部の破片である。4・5は断面三角形の突帯が複数起っている。6は太い幅の刻目突帯である。7は壺形土器の頸部から胴部である。平行の細かな沈線が廻っている。8・9は壺形土器の頸部である。8の頸部径は5cmであり、低い突帯が廻っている。口縁部は斜め直線に開き気味である。9の表裏面には赤色顔料が塗布されている。

10は底部径2.1cmの壺形土器である。尖底に近い。11は底径4.5cm、12はやや上げ底で底径6.7cmを測る平底である。

13は半欠損した磨石である。片面を使用している。14は磨製の石鎌である。長さ2.9cm、幅1.3cm、厚さ0.2cmを測る。

15～17は半月形の土器片加工品である。

19・20号竪穴出土遺物は弥生時代後期前葉であろう。



第110図 高浜遺跡石五道原地区2次調査区19・20号竪穴出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/2)

21号竪穴 (第111図)

21号竪穴は、調査区の西端付近にある歪な台形状の竪穴である。竪穴の南半分は3号竪穴に切られて大きく欠損している。竪穴の規模は、東西約4.5m、南北約5.2mを呈する。竪穴の主柱は、南西部の一本を欠くが、竪穴の4隅近くにある2本で一对の8本主柱である。

出土遺物 (第112図)

1は口縁下の突帯に刻目を施す下城式土器の甕の口縁部である。2は三本の細線を弧状に施した壺の肩～胴部の破片である。

3は口径16.7cmの壺形土器の口縁部である。口縁部外側には一条の櫛状波状文が廻っている。4、5は壺形土器の頸部付近である。4は低い断面三角突帯が数条と短い貼付け突帯文が施されている。5は低い断面三角突帯が一条廻る。

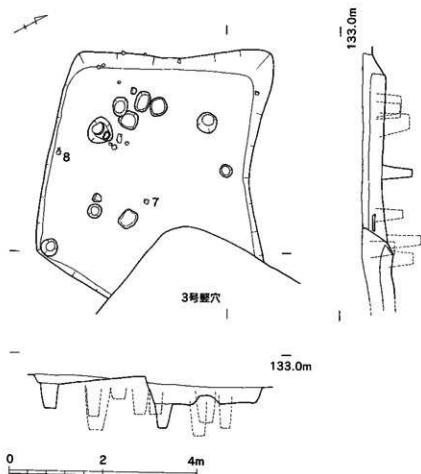
6・7は壺形土器の口縁部である。6は口径19.6cm、頸部径14.4cmを測る。7は口径20cm、頸部径15.6cmを測る。

8は高坏の坏部である。浅い基底部から斜めに立ち上がった体部は中央部で屈折し外反口縁部へと延びる。表面は刷毛目調整で内面は横、斜めの篋磨き調整。口径29.4cm、体部径17.8cmを測る。9は高坏の脚部である。穿孔がある。

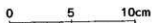
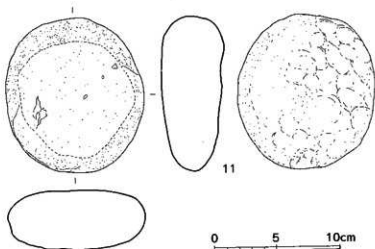
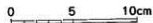
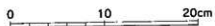
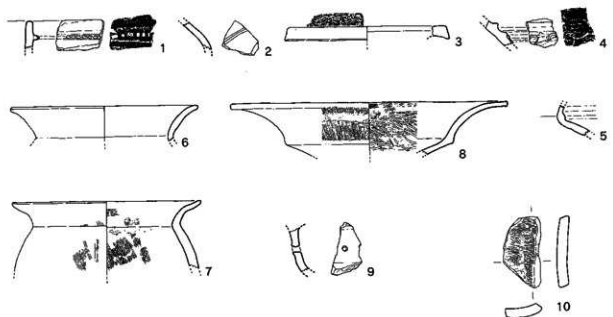
10は半円形の土器片加工品である。

11は磨石である。円礫の片面が磨面である。長さ12.2cm、幅10.9cm、厚さ4.7cm、重さ1035.7gである。

21号竪穴は弥生後期中葉～終末にあたる。



第111図 高添遺跡石五道原地区2次調査区21号竪穴実測図 (1/80)



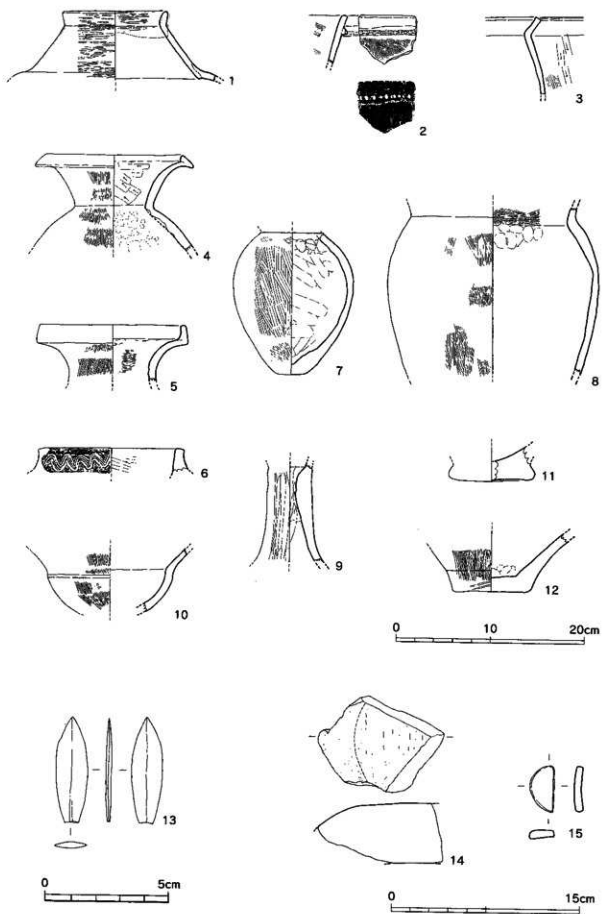
第112図 高添遺跡石五道原地区2次調査区21号壜穴出土遺物実測図 (1/4-1/3)

22号壜穴

出土遺物 (第113図)

1は夜白式の壺形土器の口縁部である。口径11.2cmを測り、頸部径10.9cm、肩部径19.4cmを測る。胴部は球形に誇張される。表面艶磨きを呈し、赤色顔料を施す。2は口縁下に一条の刻目突帯を施す下城式土器の甕である。3は跳ね上げ口縁部である。胴部はあまり張らない。4～6は複合口縁部の壺である。4の口縁部の立ち上りは低く、口径は14.5cm、口縁部最大径は16.8cm、頸部径は8.4cmを測る。表面は刷毛目、内面は笄削り、横ナデ調整である。5の口縁部の立ち上りは直に近く、口径は15.4cm、口縁部最大径は16cm、頸部径は9.2cmを測る。表面は刷毛目、内面は横ナデ調整である。6は口径15.5cmの複合口縁部である。一条の櫛描波状文が廻っている。

7は口縁部が欠損しているが、頸部を面取りして口部としており、再利用していたことが推測できる。口部の



第113图 高泽遗址石五道原地区2次调查区22号竖穴出土遗物实测图 (1/4·1/3-2/3)

径は6.5cm、胴部最大径は12.8cm、底部径は2.8cmを測る。表面は刷毛目、内面は強いナデ調整。8は頸部から胴部の破片である。頸部径は17.4cmを測り、胴部最大径は22.4cmである。表面は刷毛目、内面は横ナデ調整である。

9は高坏の脚部である。表面は縦の磨き。10は高坏の坏部である。比較的丸い体部から外反する口縁部が延びる。頸部径は15.2cmで、表面は刷毛目、内面は横ナデ調整である。

11、12は底部である。11の表面は縦の磨き、内面はナデ調整の壺の底部である。底径8cm。12は底径9.2cmで円盤貼付け底である。

13は柳葉形の結晶片岩製の石鏃である。長さ5.6cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm、重さ3.7gである。14は砂岩製の石皿の破片である。長径22cm、短径14.3cm、厚さ4.5cm、重さ3,200g。

15は半月形の土器片加工品。長さ3.7cm、幅1.9cm、重さ4.9gである。

22号竪穴は弥生時代後期中葉～後葉であろう。

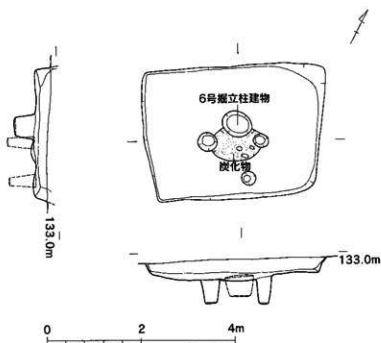
23号竪穴（第114図）

23号竪穴は調査区の北端近く、5次調査区に位置する長方形プランの小形の竪穴である。6号掘立柱建物と重複して位置している。竪穴の平面プランは、東西3.9m、南北2.8mの長方形を呈する。竪穴には長軸にそって中央部に2本の主柱があり、主柱間には、長径100、短径70cm、深さ10cmの楕円状の炭化物炉が位置している。

出土遺物（第115図）

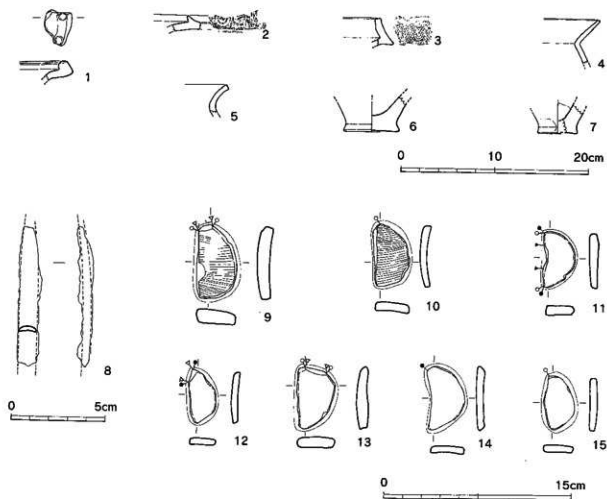
1～3は壺形土器の複合口縁部片である。1は低く「コ」の字に立上る口唇部には凹形浮文が施文される。2は低く尖り気味に立上る複合口縁部片であり、一条の櫛波状文が廻る。3はやや立ち上り幅のある複合口縁部片である。一条の櫛波状文が廻る。4・5は壺形土器の「く」の字に曲がる口縁部である。6・7は心持ち上げ底気味の平底部の破片である。6は底径5.2cm、7は底径5.9cmである。

8は鉄器である。幅1cmで長さ7.5+αcmの楕円である。身の部分の断面は丸みを持った形態で、先端部はやや反りつつ細く仕上げている様子である。



第114図 高添遺跡石五道原地区5次調査区23号竪穴実測図 (1/80)

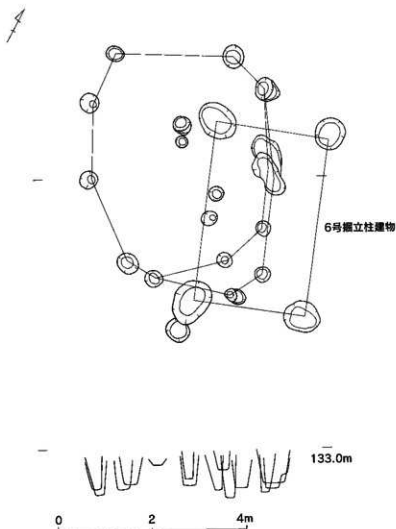
9～15は土器片加工品である。周辺部を磨き半月状に仕上げている。大きいもので長さ5.9cm、幅3.1cm、重さ23.3g。小さいもので長さ4.1cm、幅2.0cm、重さ5.8g。土器片加工品の形態や機能を推察するに、研磨しつつ、半月状に仕上げるのが目的だったのか、使用の結果の所産かは俄かに判別しにくい。



第115図 高添遺跡石五道原地区5次調査区23号堅穴出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/2)

24号堅穴 (第116図)

24号堅穴は調査区の西端部近くの5次調査区に位置し、上半部が削平された楕円形プランと想定できる堅穴である。6号獨立柱建物と重複して位置している。堅穴の規模は不明であるが、平面プランは、東西4.5+αm、南北5+αmの楕円形を呈する。堅穴の主柱穴は2本を一對とした8本～10本と考えられる。



第116図 高添遺跡石五道原地区2次調査区24号竪穴実測図 (1/80)

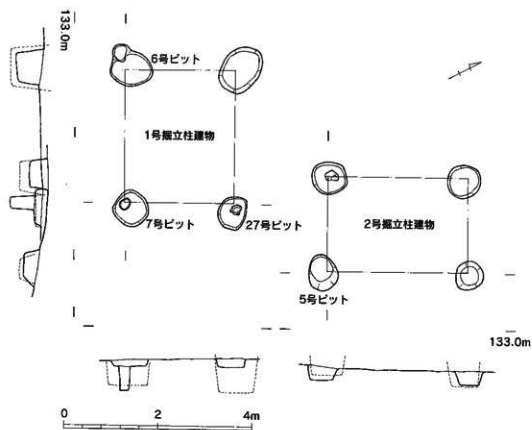
掘立柱建物遺構

1号掘立柱建物 (第117図)

1号竪穴と切り合う関係にある掘立柱建物である。掘立柱は4本を基本とし、竪穴の主柱よりも一回り大きな柱穴である。掘立柱の規模を芯芯間で測ると、長軸である東西長は2.8m、短軸である南北長は2.4mを呈する。柱穴は直径約60～110cmの間である。南東部の柱穴は直径約70cmであるが、中心柱が約20～25cmであることが推測できる。確認面から柱穴の底部までの深さは約80cmである。

2号掘立柱建物 (第117図)

1号掘立柱建物の北側に位置し、1号掘立柱建物の長軸と2号掘立柱建物の長軸は直角に配置された関係にあり、2mの間隔をあけている。掘立柱は4本を基本とし、竪穴の主柱よりも一回り大きな柱穴である。掘立柱の規模を芯芯間で測ると、短軸である東西長は2m、長軸である南北長は3mを呈する。柱穴はいずれも直径約60～80cmである。確認面から柱穴の底部までの深さは約30～60cmである。



第117図 高湊遺跡石五道原地区2次調査区1・2号掘立柱建物実測図 (1/80)

3号掘立柱建物 (第118図)

19号竪穴と切り合う関係にある掘立柱建物である。掘立柱は4本を基本とし、竪穴の主柱よりも一回り大きな柱穴である。掘立柱の規模を芯芯間で測ると、短軸である東西長は2.4m、長軸である南北長は4.6mを呈する。短軸に比べ長軸がやや長いくらいがあるが、周辺部の柱穴でこの遺構に比定できそうなものがない。柱穴は直径約60~85cmの間である。確認面から柱穴の底部までの深さは約80~110cmである。

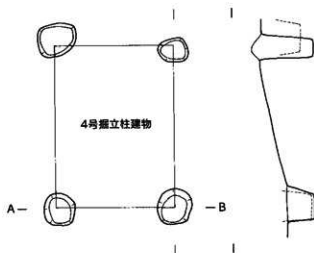
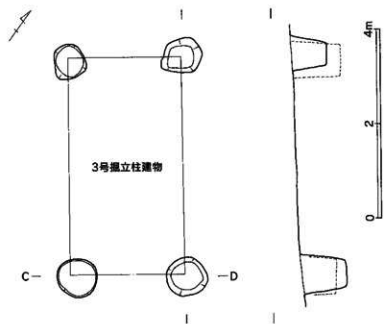
3号掘立柱建物と4号掘立柱建物の長軸は僅かに25cmのずれで、一直線上に位置づけられることから、原初的な並び倉的な施設と解釈できそうである。

4号掘立柱建物 (第118図)

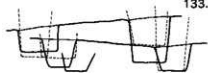
19号竪穴と切り合う関係にある掘立柱建物である。3号掘立柱建物と長軸方位を同じくし、約3.2mの間隔を置いている。掘立柱は4本を基本とし、竪穴の主柱よりも一回り大きな柱穴である。掘立柱の規模を芯芯間で測ると、短軸である東西長は2.55m、長軸である南北長は3.4mを呈する。柱穴は直径約50~85cmの間である。確認面から柱穴の底部までの深さは約60~110cmである。4号掘立柱建物と3号掘立柱建物の長軸は僅かに25cmのずれで、一直線上に位置づけられることから、原初的な並び倉的な施設と解釈できそうである。

5号掘立柱建物 (第118図)

僅か1本の柱穴であるが5号掘立柱建物の一部として把握した。柱穴は直径約65~80cmの間である。確認面から柱穴の底部までの深さは約35cmである。この柱穴に対応するものは東側にはない。地形的にみると、南側や西側はやや低く、削平されており、遺構の遺存状態も良好とは言い難いが、残っている場合は、調査区外に遺



C—A—E F— —D—B
133.0m



第118图 高濂道跡石五道原地区2次調査区3・4・5号独立柱建物実測図 (1/80)

存している可能性がある。

6号掘立柱建物 (第119図)

石五道原5次調査区で出土した。23号堅穴と切り合う関係にある掘立柱建物である。約5mの間隔を置いて、8号掘立柱建物と長軸方位が直角になるように設置されている。

掘立柱は4本を基本とし、堅穴の主柱よりも一回り大きな柱穴である。掘立柱の規模を芯芯間で測ると、短軸である東西長は2.30m、長軸である南北長は2.70mを呈する。柱穴は直径約60～95cmの間である。確認面から柱穴の底部までの深さは約40～80cmである。

7号掘立柱建物 (第120図)

石五道原5次調査区で出土した。大きく削平され、柱穴だけ残った24号堅穴と、切り合う関係にある掘立柱建物である。

掘立柱は4本を基本とし、堅穴の主柱よりも一回り大きな柱穴である。掘立柱の規模を芯芯間で測ると、短軸である東西長は2.23m、長軸である南北長は3.60mを呈する。柱穴は直径約60～95cmの間である。確認面から柱穴の底部までの深さは約40～70cmである。

8号掘立柱建物 (第121図)

石五道原5次調査区で出土した。8号掘立柱建物の長軸は、9号掘立柱建物の長軸と僅か38cmの間隔しかなく、並行する位置関係にある掘立柱建物である。約5mの間隔を置いて、6号掘立柱建物と長軸方位が直角になるように設置されている。

掘立柱は4本を基本とし、その規模を芯芯間で測ると、短軸である北南長は2.08m、長軸である東南長は3.45mを呈する。柱穴は直径約50～65cmの間である。確認面から柱穴の底部までの深さは約50～65cmである。掘立柱建物の南東隅部の柱は2段掘りである。

9号掘立柱建物 (第121図)

石五道原5次調査区で出土した。9号掘立柱建物の長軸は、8号掘立柱建物の長軸と僅か38cmの間隔しかなく、並行する位置関係にある掘立柱建物である。約3.6mの間隔を置いて、6号掘立柱建物と長軸方位が直角になるように設置されている。

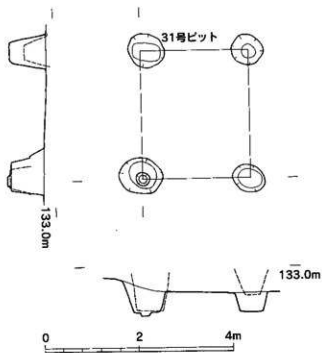
掘立柱は4本を基本とし、その規模を芯芯間で測ると、短軸である北南長は2.50m、長軸である東南長は3.52mを呈する。柱穴は直径約30～65cmの間である。確認面から柱穴の底部までの深さは約20～75cmである。

溝 (道路) 状遺構

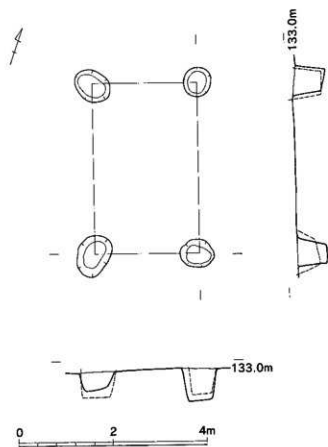
1号溝 (道路) 状遺構 (第122図)

調査区中央部よりやや東側で、北南に斜めに貫く浅い溝状遺構が検出されている。出土遺物は少なく、近世～中世の凝灰岩質の五輪塔の一部が出土している。溝状遺構は調査区を斜めに横切っており、溝状遺構の外幅は3.2～3.7m、内幅は2.1～2.8mを測り、深さ30～50cmと平坦で浅い。現状で約17mの長さを確認している。

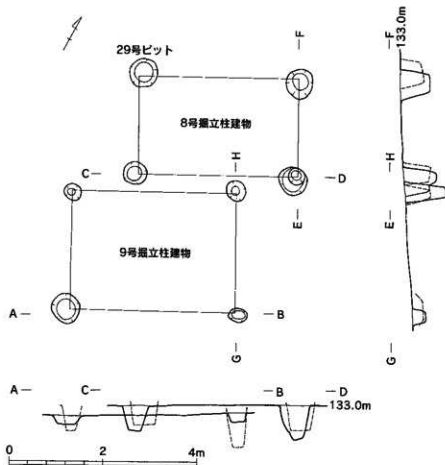
溝状遺構の延長線上には、豊後大野市指定有形文化財の大永六年(1526年)の石幢が立っている。この付近は、地元で通称、権現塚といわれている。石祠や五輪塔の一部が累々と堆積しており、元々お宮があった場所という。



第119図 高添遺跡石五道原地区5次調査区6号掘立柱建物実測図 (1/80)



第120図 高添遺跡石五道原地区5次調査区7号掘立柱建物実測図 (1/80)



第121図 高湊遺跡石五道原地区5次調査区8・9号獨立柱建物実測図 (1/80)

出土遺物 (第123図)

1は複合口縁部である。櫛指波状文が一条廻っている。

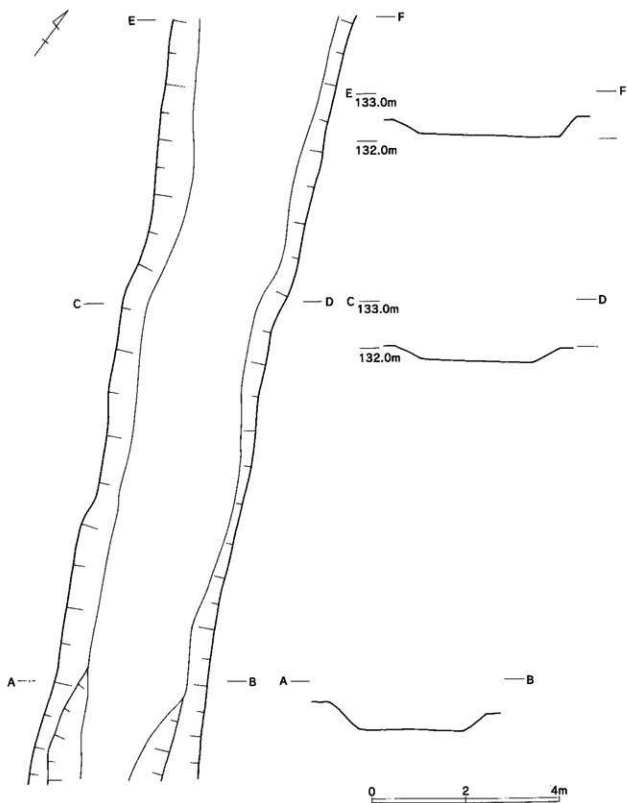
2～3は瓦質土器である。口縁部は心持ち外側に折れる特徴的な土鍋である。内面は刷毛目痕跡を残し、外面は釉で調整。2は口径27.8cmを呈する。

4は壺の頸部である。頸部径は23.5cmである。壺の肩部には3～4条の比線が廻っている。備前焼に類似している。

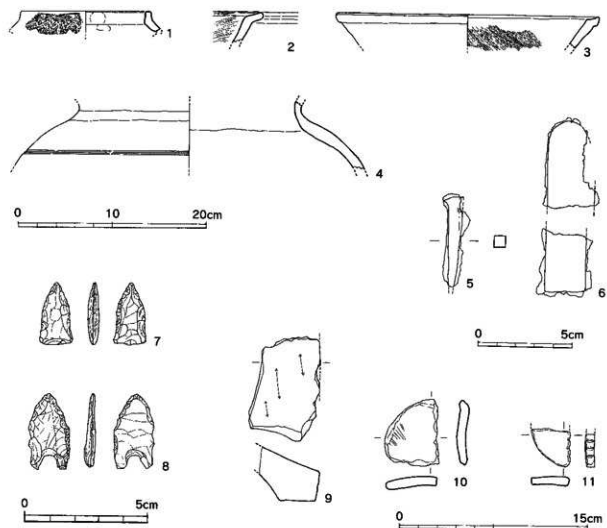
5・6は鉄製品である。5は角釘、6は板状の切れ端で不明。

7、8は石鏃である。7は凹基式で片面は主要剥離面を大きく残し、周辺部に加工が施されている。チャート製で長さ2.9cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ1.8g。8は平基式の石鏃である。サヌカイト製で長さ2.5cm、幅1.3cm、厚さ0.5cm、重さ1.2g。9は凝灰岩質の砥石である。長さ $8.3+\alpha$ cm、幅 $5.7+\alpha$ cm、厚さ3.3cm、重さ145.7g。

10、11は土器片加工品である。10は長さ5.3cm、幅4.3cm、重さ20.6g。11は破片である。弦の部分は鋸歯状の加工がある。



第122图 高泽湖跡石五道原地区2次調査区1号溝(道路状遺構)実測図



第123図 高湊遺跡石五道原地区2次調査区1号溝（濶路状遺構）出土遺物実測図（1/4・1/3・1/2・2/3）

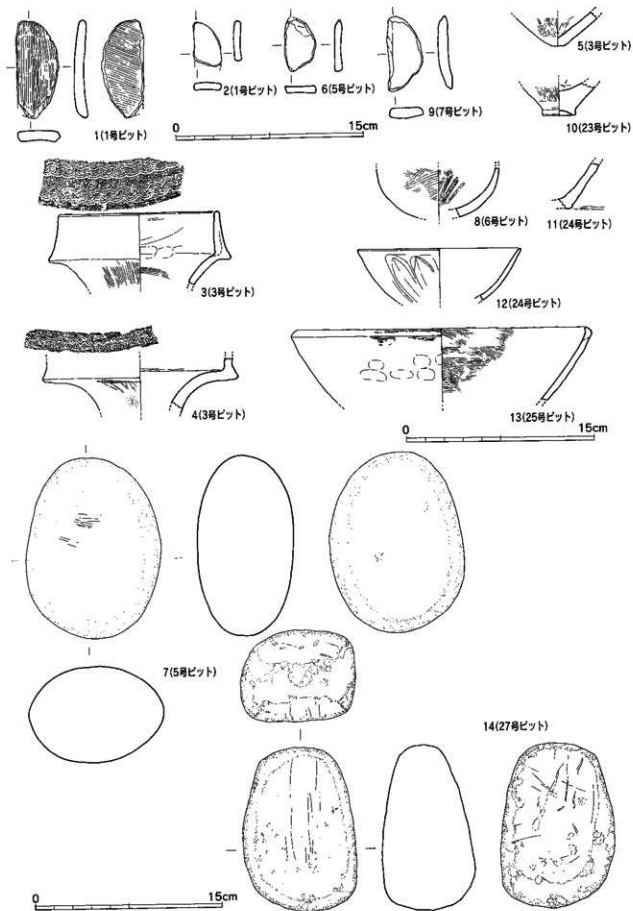
柱穴内の出土遺物

1号ピットの出土遺物（第124図1、2）

8号竪穴の北西端の主柱穴である。柱穴内から2つの半月形をした土器片加工品が出土している。1は長さ7.5cm、幅3.3cm、重さ25.1gで弧状部の端に2つのノッチがある。2は半分弱が欠損している。長さ3.1+αcm、幅2.2cm、重さ5.7g。

3号ピットの出土遺物（第124図3～5）

6号竪穴の北東部の主柱穴である。柱穴内から2つの複合口縁部の破片と底部が出土している。3は口径17.2cm、口縁最大径19.5cmを測り、口縁外面には上下二条の櫛描波状文が廻っている。4は口縁最大径20.8cmを測り、口縁外面には現状で下段に一条の櫛描波状文が廻っている。5は底径約1cmの尖底に近い底部である。



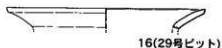
第124図 高添遺跡石五道原地区2次調査区柱穴(ビット)内出土遺物実測図① (1/3)

5号ピットの出土遺物 (第124図6、7)

2号掘立柱建物の南東部の主柱である。柱穴内から半月形をした土器片加工品が出土している。6は長さ3.9cm、幅2.5cm、重さ7.6gで弧状部の端に2つのノッチがある。7は磨石である。表裏が研磨されている。長さ14.2cm、幅10.6cm、厚さ7.5cm、重さ1500g。



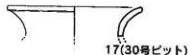
15(28号ピット)



16(29号ピット)

6号ピットの出土遺物 (第124図8)

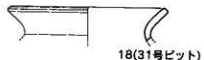
1号掘立柱建物の北西部の主柱である。柱穴内から土器片が出土している。8は丸底の鉢であり、表裏刷毛目調整である。最大径は13cmである。



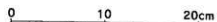
17(30号ピット)

7号ピットの出土遺物 (第124図9)

1号掘立柱建物の南西部の主柱である。柱穴内から土器片が出土している。9は半月状に加工された土器片加工品であり、長さ5.8cm、幅2.7cm、重さ16.1g。



18(31号ピット)



第125図 高湊遺跡石五道原地区2・5次調査区柱穴(ピット)内出土遺物実測図②(1/4)

23号ピットの出土遺物 (第124図10)

19号壑穴内の柱穴出土の底部である。10の底部はやや傘んだ様相で、底部径3.4cmでやや上げ底を呈する底部である。

24号ピットの出土遺物 (第124図11、12)

22号壑穴内に位置するが柱穴は中世の所産である。11は瓦質土器の底部、12は筒蓋弁の青磁の碗である。口径17.4cm。

25号ピットの出土遺物 (第124図13)

22号壑穴内に位置するが柱穴は中世の所産である。13は土師質土器の口縁部。表面は指押さえや指ナデ、内面には刷毛目調整。

27号ピットの出土遺物 (第124図14)

1号掘立柱建物の南東部の主柱である。柱穴内から磨石が出土している。14は重な楕円形の磨石である。表裏は磨った痕跡が顕著である。なお、側面には敲打痕が認められる。長さ13.1cm、幅9.1cm、厚さ7.3cm、重さ1200g。

28号ピットの出土遺物 (第125図15)

15は高坏の坏部である。屈折部の径は18.2cm。表裏は横磨きの痕跡。

29号ピットの出土遺物 (第125図16)

8号掘立柱建物の北西隅の柱穴から出土した甕形土器の口縁部である。口縁端部を面取りしている。表裏ナデ調整。口径21cmを測る。

30号ピットの出土遺物 (第125図17)

17は壺形土器の口縁部である。口縁端部を面取りしている。表裏撫で調整。口径14.3cmを測る。

31号ピットの出土遺物 (第125図18)

6号掘立柱建物の北西隅の柱穴から出土した壺形土器の口縁部である。口縁端部を面取りしている。表裏ナデ調整。口径16.9cm、頸部径は13.4cmを測る。

調査区出土の遺物

縄文時代の土器 (第126・127・128図)

1は縄文早期の山形押型文である。2は前期の貝殻条痕文土器で断面三角突帯文の上下に刺突するような刻目が確認できる。3は縦や斜めの凹線文を施文する前期土器である。4は沈線文を十字に配置し、空間の一部を文様で埋めるもので、竈ノ神式土器か晩期の土器の一部であろう。にわかに判断ができない。

5～9は土器の表裏に貝殻条痕文を横や斜め方向に残す条痕文土器である。5・6は口縁部であり、5の口唇部には刻目が施されている。

10～17は土器の表面に細かな単節の縄文を施文する一群である。18は胴部に渦巻き文を施す。19・20は磨消縄文土器である。沈線が細線化し、幾何学的になる後期後半期の一群である。21～23は内湾する口縁部の破片である。21の表裏には条痕文、口縁部周辺は縄文が施されている。表裏から穿った補修孔も興味深い。22は磨消縄文土器である。23は沈線と短沈線が組み合わさる。24は無節の縄文を施文する。

25～29は深鉢形土器の口縁部である。大きく開いた口縁部の先端は肥厚して文様帯を形成している。25・26は肥厚した口縁部に二条沈線、27は三条沈線が施されている。28は二条沈線間に縄文を施文する。29の外反する口縁部の縁には一条の沈線が廻る。

30～36は頸部から球形に誇張される胴部の破片である。頸部の屈折部から胴部上半にかけて磨消縄文が施文されている。文様構成は刺突文や斜細線文、二本沈線、縄文、二本沈線となる。31・36は縄文が認められない。37～45は浅鉢形土器の口縁部と、頸部から胴部の破片である。37・38は緩く外反する口縁部であり、頸部に屈折して、丸みをおびつつ底部に至る浅鉢である。37は口縁部に二条の沈線、38は口縁部と屈折部に各一条の沈線が廻る。39の口縁部には3条の沈線が廻っている。40は屈折部に円形の刺突文、41は屈折部に縦の刻目文、42は凹線文の曲線を施す。43～45は屈折部の破片である。

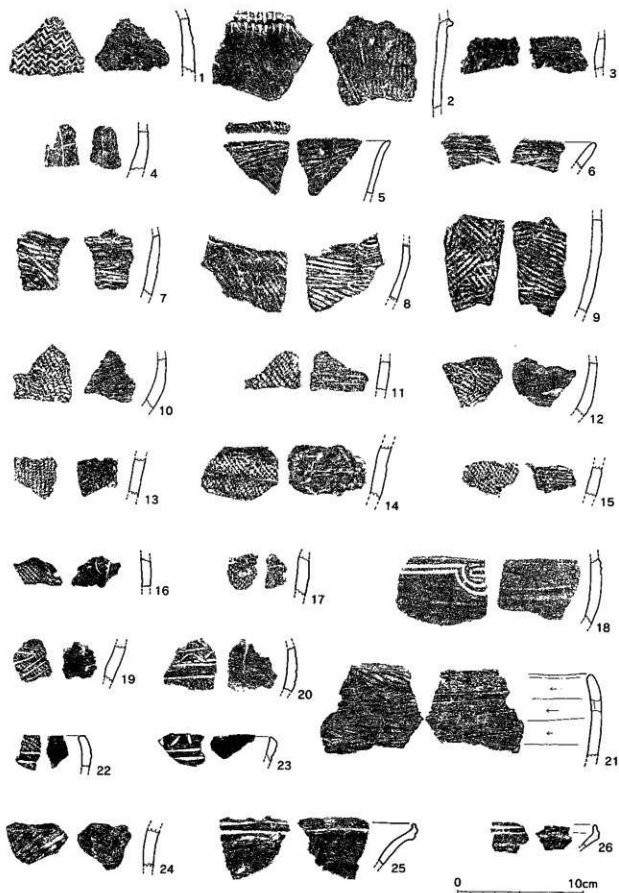
46～74は縄文晩期の刻目突帯文土器である。表裏は条痕文であり、ナデ調整を併用している。46～52の壺形土器は口縁部をやや内傾するものである。46は突帯を指で押さえた跡があり、突帯には刻目文はない。47は口唇部に突帯を付け、刻目を廻らす。48～52は突帯文の刻目が細いもの、太いものがあり、50のように円形状を呈するものもある。

53は二条の突帯文を施文する。口唇部の突帯には刻目はない。54～68は直行ないし、やや外傾する一群である。突帯文の刻目が細いもの、太いものがあるが、突帯文は貼り付け時の押さえや摘み等の指痕痕跡をそのまま刻目文として使用しているものが多い。69～74は胴部の破片である。70は刻目を施す縦の突帯文、71・73・74は屈折部の刻目突帯文である。

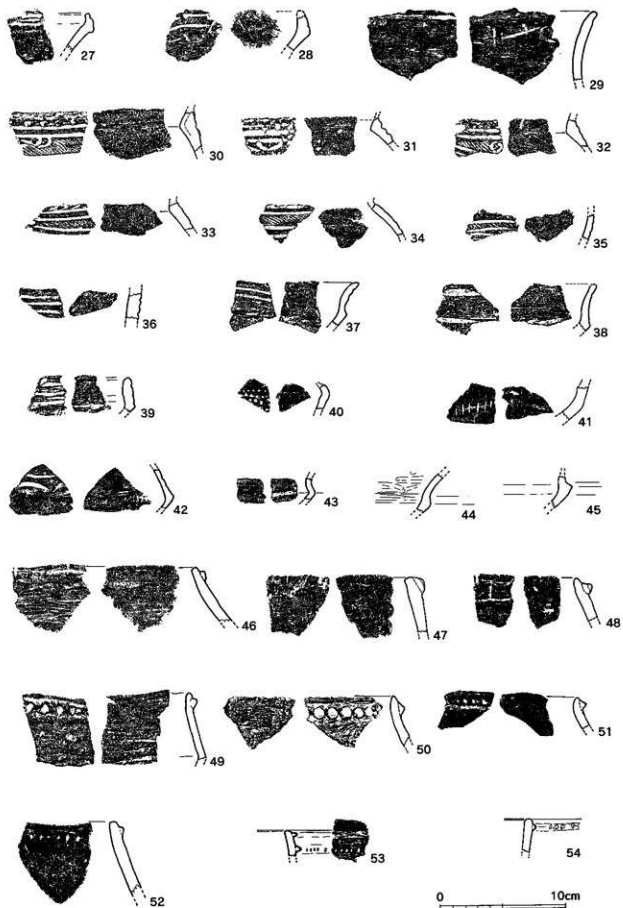
旧石器・縄文時代の石器類 (第129・130図)

75～78は流紋岩製の旧石器時代の石器である。75は「ノ」の字形の剥片の一片に細かな加工を施したコンケイブスクレイパーである。縦長3.2cm、幅2.4cmである。76は細い縦長剥片の一片に細かな加工を施した二次加工のある剥片である。縦長4.9cm、幅1.4cmである。77は表皮の一部を残す分厚い剥片である。縁辺部に細かな加工が残っている。縦長8.1cm、幅5.4cmである。78は不定形剥片の一片に加工を加えたものである。

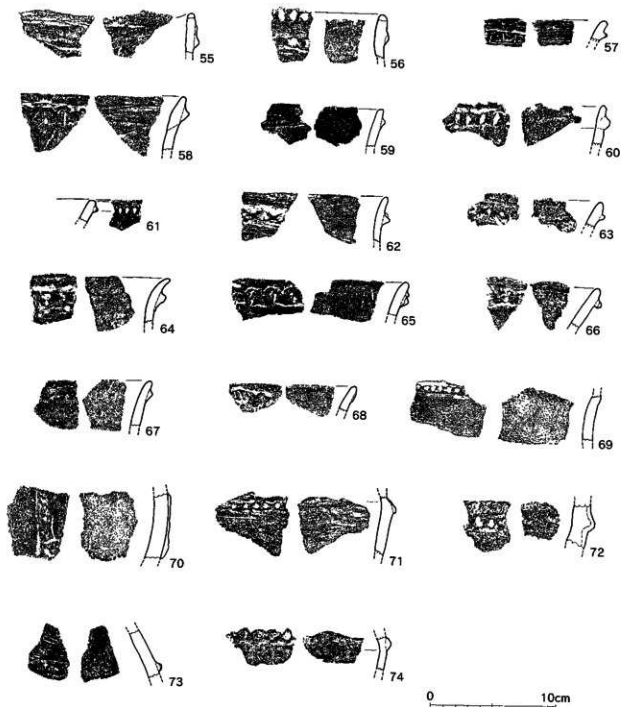
79は角閃安山岩製の石鏃である。中央部の縦長1.4cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重さ1.1gである。80は姪島産



第126图 高添遺跡石玉道原地区2・5次調査区出土遺物実測図① (1/3)



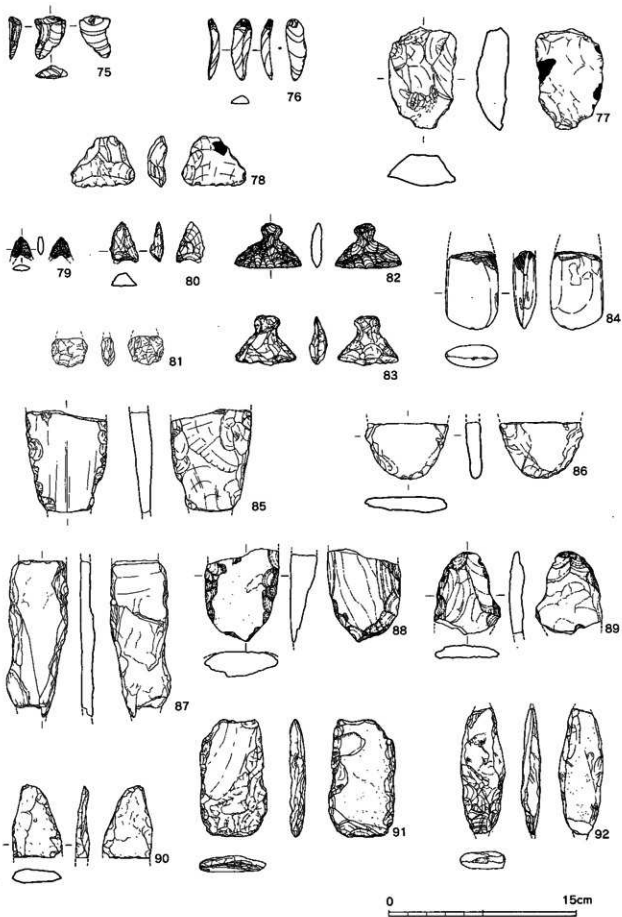
第127图 高湫遗址石五道原地区2·5次調査区出土遺物実測図② (1/3)



第128図 高津遺跡石五道原地区2・5次調査区出土遺物実測図③ (1/3)

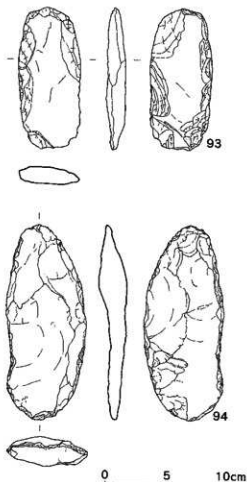
黒曜石の石鏃未製品である。81はチャート製の尖頭状石器の基部である。中央から先端部が欠損している。最大幅は2.8cm、厚さ1cmを測る。82は姫島産黒曜石の石匙である。中央部の縦長3.6cm、幅5.3cm、厚さ0.8cm、重さ11.4gである。83はサヌカイト製の石匙である。中央部の縦長4cm、最大幅4.9cm、厚さ1.4cm、重さ15gである。84は蛇紋岩製の磨製石斧である。基部は欠損している。中央部の縦長6.2cm、幅4.2cm、厚さ1.8cm、重さ79gである。

85～94は扁平打裂石斧である。93、94を除いて、いずれも基部や刃部が欠損している。85は輝石安山岩製の横長剥片を使用する扁平打裂石斧であるが、刃部と基部を大きく欠損している。刃部付近には縦や斜めの使用擦過



第129图 高添遺跡石五道原地区2・5次調査区出土遺物実測図④ (1/3)

痕が認められる。長さ8.1+αcm、幅6.4cm、厚さ1.5cm、重さ107.6g。86は輝石安山岩製の刃部である。長さ4.5+αcm、幅6.7cm、厚さ1.2cm、重さ37.7g。87は結晶片岩製の扁平打製石斧である。刃部と基部を大きく欠損している。長さ12.4+αcm、幅4.7cm、厚さ1.0cm、重さ79.8g。88は輝石安山岩製の横長剥片を使用する扁平打製石斧であるが、刃部の一部と基部を大きく欠損している。長さ6.9+αcm、幅5.8cm、厚さ2cm、重さ100.1g。89は安山岩製の扁平打製石斧の基部である。体部と刃部を大きく欠損している。長さ6.55+αcm、幅5.2cm、厚さ1.1cm、重さ45g。90は輝石安山岩製の扁平打製石斧の基部である。長さ5.7+αcm、幅3.9cm、厚さ1.1cm、重さ27.5g。91はヒン岩製で横割剥片を基調とし、短冊形で多面には表皮を残している。長さ9.3+αcm、幅5.2cm、厚さ1.3cm、重さ78.5g。92は結晶片岩製の打製石斧である。両側辺の中央部には一部研磨の痕跡が残っている。長さ10+αcm、幅3.5cm、厚さ1.5cm、重さ63.6g。93は結晶片岩製の扁平打製石斧の完形品である。横割剥片を使用し周辺部を加工して整形している。長さ11.1cm、幅4.8cm、厚さ1.6cm、重さ112.5g。94はヒン岩製の扁平打製石斧の完形品である。石器の周縁部には細かな二次加工が施されている。長さ15.4cm、幅6.4cm、厚さ1~2.3cm、重さ201.5g。



第130図 高湊遺跡石玉道原地区2・5次調査区出土遺物実測図⑤ (1/3)

弥生~古墳時代の遺物 (第131・132・133図)

1~3は複合口縁の壺形土器である。1は口径14.2cm

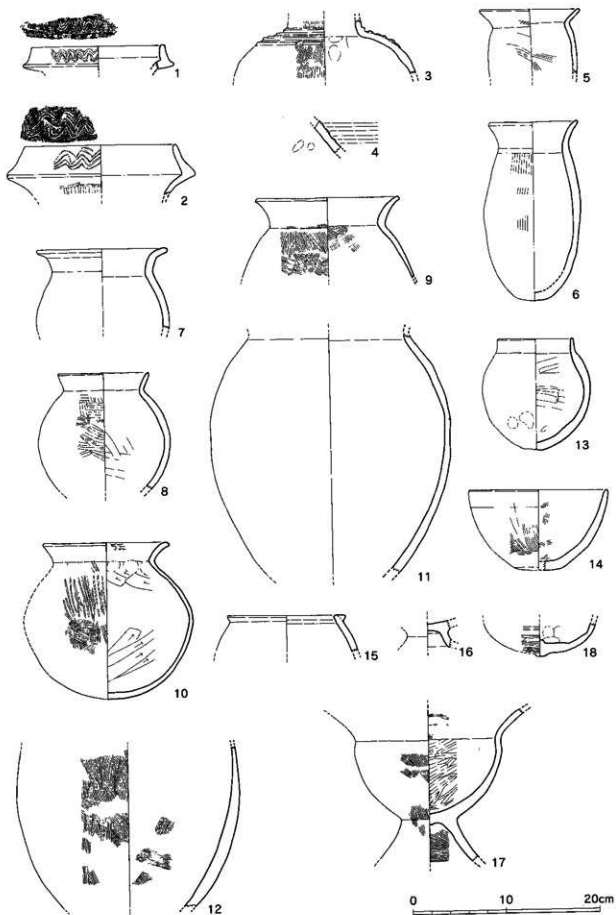
で口縁最大径は16cmである。縁側に一条の櫛指波状文を廻らせている。2は断面逆「く」の字状の口縁であり、口径16cm、口縁最大径は20cmである。縁側に一条の櫛指波状文を廻らせている。3は頸部~肩部の破片である。断面三角形の突帯が5状廻り、勾玉状の粘土紐が幾つか貼り付いている。頸部径7.6cmを測る。表面は刷毛目調整で内面はナデ調整。4は頸部~肩部の破片である。低い突帯が3+α条廻っている。

5、6は壺形土器である。胴部の張りはない。5は口径10.6cm、頸部径8.2cm、胴部最大径は9.5cmである。6は長胴で胴部の張りがなく底部は九底である。口径9.2cm、頸部径7.6cm、胴部最大径は10.3cm、器高は18.9cmである。表面は縦の刷毛目、内面はナデ調整。7は口径13.8cm、頸部径10.2cm、胴部最大径は14cmの壺形土器である。8は口径9.6cm、頸部径8.5cm、胴部最大径は24cmの壺形土器である。胴部は球形に誇張されている。9は口径15cm、頸部径12.2cmである。表面は縦・斜めの刷毛目調整。内面は斜め刷毛目調整、ナデ調整。10は口径13.1cm、頸部径10.8cm、胴部最大径は18cmである。胴部は中央部で球形に誇張され、底部は九底となる。表面は斜めの刷毛目調整。内面は斜めの斲削り調整である。11は頸部径17cmで、中央部やや上半にくる胴部最大径は25.5cmである。表裏はナデ調整である。12は壺形土器の胴部の破片である。胴部最大径は23.7cmである。表面は粗い縦刷毛目、内面は摩滅が顕著である。

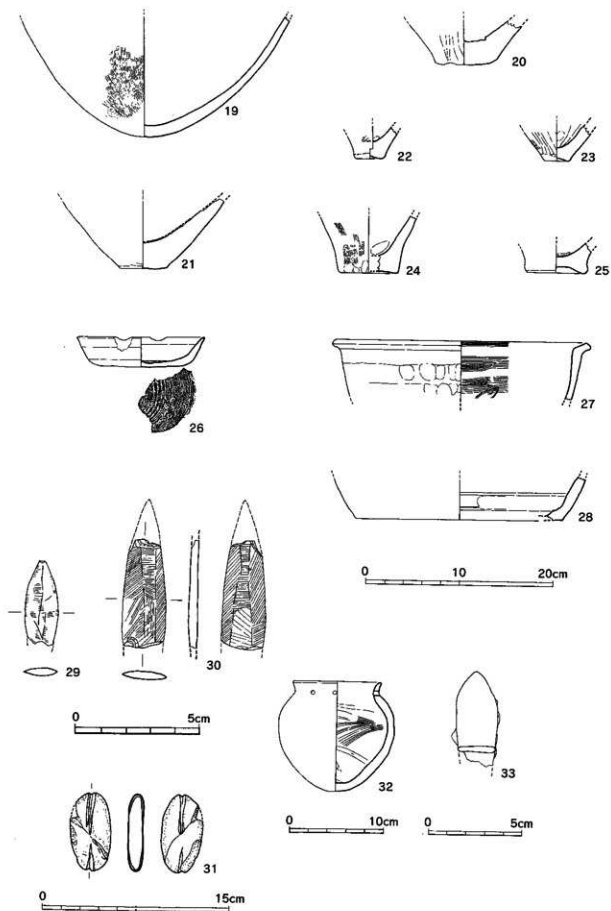
13は直口口縁の壺である。口径8cm、頸部径8.3cm、胴部最大径は11.5cm、器高11.7cmである。表面ナデ調整で、内面は板状工具によるナデ調整である。

14は口径14.8cmで、底部径5cm、器高8.5cmである。表面は縦刷毛目目で内面はナデ調整である。

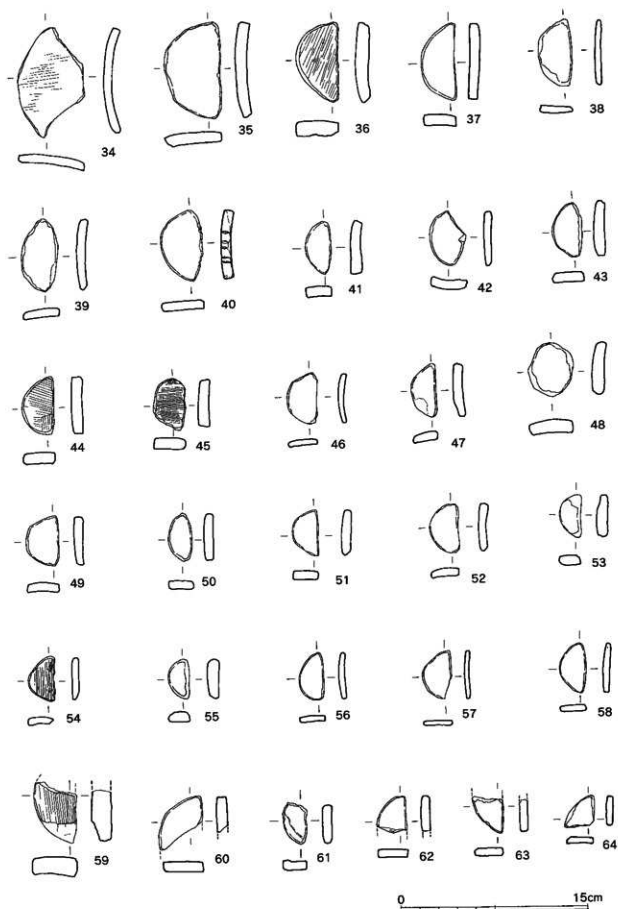
15は内湾する口縁部で、口唇は厚く、内口径10.4cm、外口径12.5cmである。表裏はナデ調整。



第131图 高濂遗址石五道原地区2·5次调查区出土器物实测图⑥ (1/4)



第132图 高漆道跡石五道原地区2・5次調査区出土遺物実測図⑦ (1/4・1/3・2/3・1/2)



第133图 高濂遗址石五道原地区2・5次调查区出土遗物実測図⑥ (1/3)

16は脚部である。脚部径は4.4cmである。17は脚付き鉢である。大きく開く脚部に、半球状の体部と外反する口縁部が乗る典型的な一群である。

18は丸底部である。底部中央部の外と内に小さな丸い突起が出ている。外面には赤色顔料が塗られている。19は丸底部である。表面は粗い縦刷毛目で、内面は摩滅が顕著である。底部の器職は、胴部とあまり変わらない。20、21は平底部である。底径は両方とも約5cmである。22～25はやや上げ底気味な平底である。22は底径3cm、23は底径2.7cm、24は底径6cm、25は底径6.2cmである。

26は回転糸切り底の痕跡を残す土師器の杯である。口径13.6cm、底径9.5cm、器高3.1cmを測る。

27は口径26.7cmを測る鉢形土器である。口縁部は肥厚しつつ外に折れる特徴的なものである。外面はナデ調整の指頭痕跡を残し、内面は細く緻密な刷毛目が展開している。28は底部の破片である。底径は22cmである。

29、30は粘版岩製の磨製石鏃である。表裏を丹念に研磨して、形を整えている。どちらも先端部と基部を欠損している。29は長さ3.3cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ1.8g。30は長さ4.3cm、幅1.7cm、厚さ0.35cm、重さ4g。

31は有溝石鏃である。長軸の中心に沿うように溝が通っているが、表裏とも中央部で途絶え、一周はしていない。長さ6.2cm、幅3.3cm、厚さ1.15cm、重さ34gである。

32は口縁部が短く外反する小形の甕である。表面はナデ調整で内面は刷毛目や削りが認められる。底部は丸底である。頸部には約2cm置きに穿孔が複数ある。口径9.4cm、頸部径8.8cm、胴部最大径12.2cm、器高11.6cmである。

33は基部を欠損した鉄鏃である。現状での長さ5.1cm、幅2.3cm、厚さ0.3cm、重さ9.8g。

34～64は半月形の土器片加工品である。40は弧の部分に鋸歯状のノッチが4～5施された土器である。土器片加工品は、大きいもので長さ7.6cm、幅4.5cm、重さ44.5g。小さいもので長さ3.1cm、幅1.7cm、重さ5.6g。ちなみに、長さ8cm以上が1個（内1個が破片）、長さ7cm以上が1個、長さ6cm以上が2個、長さ5cm以上が3個、長さ4cm以上が8個（内1個が破片）、長さ3cm以上が13個（内4個が破片）である。長さ2cm以上が3個（内3個が破片）である。



第134图 高湊遺跡土水曜地区1次調査区遺構配置圖 (1/200)

第134图 高家遗址水坑地区1次清理区遗址平面(1/200)

